

7228

第8

472

松月堂梅村清演
九山平次郎速記

鈴木主水







水主木鈴

鈴

木

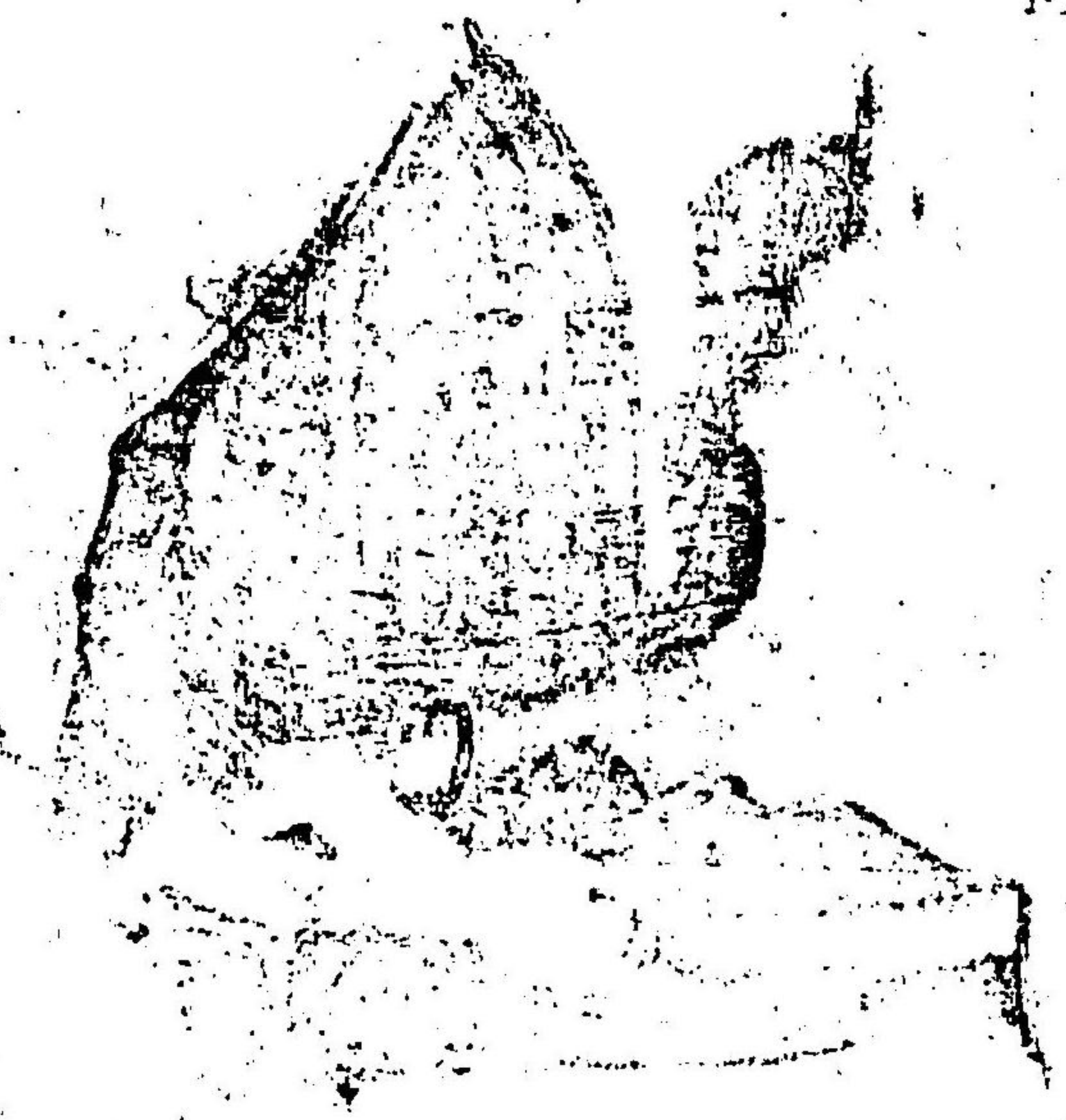
主

水

第一回

松月堂 煤林 講演
丸山平次郎 速記

エー本日よりお求めに應じまして、鈴木主水といふ表題でお話を致
 します。この鈴木主水といふ者は、新海節一名ヤン節といふ、元
 の薩賣りになり、四ッ谷の新宿町にと、唄出したのが抑も始まりで
 お芝居その他の古本にも出て居りますが、眞は大きにその鈴木主水
 と趣を異に致しまして、只妻子が有りながら、娼妓に浮狂て情死を
 したといふお話とは事かはり、願る孝心の上忠義の仁でありました
 實父の仇と舅の仇とを、同じ月の間に報じまして、俗にこれを兩父



二 鈴 木 主 水

の仇討と稱へまする講談でございます、さて越後國頸城郡高田の城
主十五万石榊原式部大輔と仰しやるその藩中江戸詰の一人に、鈴木
傳内兵衛といふ仁がございまして、此仁は起倒流の三人衆と申しま
して、この起倒流といふのは、甲州浪人山形右近義正といふ仁が編
出したのでございまして、その後山形清太夫といふのが二代を嗣い
で、其仁から教はつた仁が三人、ア多くの門人の中から選出され
た位で、第一がこの鈴木傳内兵衛、第二番が、三番丁で食祿八百
石のお旗本小笠原十郎右衛門、いま一人は尾州犬山成瀬の藩で尾崎
右膳、この三人の中で第一と云はれた位での傳内兵衛でございます
食祿は五百石を頂戴いたしました、榊原家では門閥でございます
妻は脇坂淡路守の家臣、根來勘兵衛といふ仁の妹滝江と申されまし
て、夫婦の間に出来ましたのが、主水といふ頗る美男子でございま
した、これは後に鈴木主水いふ、將軍家直参に相成りまして、大層
評判を造した仁でございまして、このお話の起源は、榊原式部大輔と

鈴 木 主 水

仰しやるは、願る御名君でございまして、よく申す通り、月に幾
雲の譬喩で、幾ら伶俐なお仁でも、過失といふものは出来て参りま
すもので、同藩の輕格に押原右内といふ者がございまして、些かな
切米取ではございまして、至つて奸智に長けた奴で、か中老の松
笠典膳といふ仁が、これを愛願て居ります、然るにその右内の娘
に秋と申しまする頗る美人がございまして、此女は松笠の推舉に依
つて、主公の御愛妾となりまして、それが爲めに表面は松笠が取持
ち、内面は彼の秋が御前に色々阿諛つて申上げるところから、些か
二十石ばかり貰つて居りました、輕格の押原が、忽ちの間に三百石と
まで登用いたしました、これ全く娘のお庇蔭、松笠の愛願でござい
ます、然うなりますと妙なもので、この押原右内に阿諛る奴が、
幾らも出来て参り、押原さんの屋敷へ出入をして置けば、また押原
さんのお取成に依つて、好いお役に就くだらうとか、又は御加増に
も相成るであらうなと、いふやうな諂者、澤山出来まして、御日

水 主 木 鈴

十五日或は五節句などには、この押原の宅は、菓子折盒を積上げ
るといふやうな譯でございませぬ、然るに這回江戸家老榊原主膳とい
ふ方が御病死でございませぬ、これに依つて國許より御家老を迎へる
ことになりませぬ、そこで誰れが好からうといふうちに、彼の松笠
典膳は「恐れながら當時食祿は三百石を頂戴いたして居りますが、
太平の御世の孔明、以前足輕であつたから、出世は出来ぬといふも
のではござりませぬ、既に秀吉公は、土民の胎内より出でましても
關白となり、太閤とまで御成りなされたのでござりませぬ、願はくば
押原右内を以て、千石の食祿をたまはりませぬならば、彼れは江戸
家老となつて、萬事の御政治を預ります、然すれば大きに御家の
爲めにも都合が好しからうと存じます、式部成程、有理の次第である
予も考へて置くであらう」とあつて、その日はその儘濟みませぬが
夜に入りまして彼の部屋お秋の許へ參られませぬといふとお秋御
前様、ナ、ッ、今日承はりましたが、典膳様のお話に、父はマア思

水 主 木 鈴

ひも依らぬ出世を致しまして、御家老様になりますの趣、妾はこん
な嬉しいことはござりませぬ、式部待て、未だ予は承知をしたとい
ふ譯でもない、いま勘考中である、お秋、オヤ左様でござりませぬか、妾
は父が御家老様になれるのだと思ひませぬ、こんな嬉しい事はない
と思ひませぬが、成れぬのでござりませぬか、ア、ッ……」と言ふ
と、癪を發したか、バツ、其處へ倒れて仕舞ひ、苦悶氣の息遣ひ
難いた御前は「コ、ン、秋、氣を確かに持て、予が介抱いたしてや
る、サア此處に水がある、薬もある、これを與へやう」と宛然狂氣
の如くにお成りなすつて、御介抱を遊ばす、夜中のことでもあり、
女中も遠く離れて居ります、御前は一生懸命介抱をしてお在でなさ
る、横を向いて赤い舌を出した彼のお秋は「ア、ッ、苦しうござ
ります、妾は……、式部マア、ッ、好い、水を少し飲み、咽喉を沾さん
ければならぬ、お秋、ハ、ッ……、ア、ッ、有難うござりませぬ、式部氣が付い
たか、お秋、ハ、ッ、お薬を戴きましたので、少し治まりました、メ、面

水 主 木 鈴

目がござりません 式部何が面目ない お秋妾に附いて居ります 腰元共
が、お部屋さま、お目出度うござります、阿父様は御出世を遊ばし
てと、こんな言はれて居りましたのに然うではなく、父は御當家
の小身者、逆も御家老にはなれないかと思ひますと、妾はこんな情
けないことにはござりません 式部好い、明日子が評定の節、彼れを老
臣に取立て遣し、年寄役を命ずるやうに致すであらう、心配をする
ナ、決して備が面目を失ふやうなことは致さぬから お秋、ハイ、有難
うござります、御前様、お嬉しうござります」と御前の顔を見て莞
爾と笑ひました、この莞爾と笑つたのが、七百石の價値でございま
す、随分高い笑ひやうもするもので、その晩は充分に御前様を籠絡
して、御喜ばせ申して朝の別れ、いよ、殿中に於て江戸詰合ひの
者を御召しに相成つて 式部、這回江戸家老が入用に付いて、國許より
呼迎へる筈であつたが、近頃お側用役のうちにて、彼の押原なる者
は、天晴れ才智に長けたる者である、彼れをして老臣の列に加へや

水 主 木 鈴

うと考へる、一同の者、左様に心得よ、どの仰せ、ハツと驚いた者
もあれば、俗にいふ長い物には巻かれるの譬喩で、黙つて居る者も
あり、中にはまた彼れの屋敷に出入をして、身柱の應を拂つて居る
やうな連中は、大きに喜びまして雀躍をする、先刻から片傍に何事
も言はず、空然として居た傳内兵衛、この時、ッど前に進出で
まして、傳内ア、恐れながら御前、主君の御意に背き奉つるではござ
りませんが、只今の仰せは、押原右内をして老臣に御引上げに相成
るといふ、その儀に就きましては、少々御控へを願ひたうござりま
す、御當家は徳川家四天王の御家柄に致して、御先祖以來武を以て
立ちましたる御家、御先祖様御供をして、戰場馬場を往來をなし
太平の御世と相成りましては、御國許の政治萬端、それの勤
を願ひましたる者も多くござります、右内は成程才智のある者では
ござりませうが、過日來までは漸く組外格と名づけまして、御
調見以下の武士、二十石の小身者より、只今は三百石とまで登用い

たしましたのは、如何なる功がござりましたか、只智恵あるといふ
のみに致しまして、一ヶ所もこれを以て彼れが増なり登用なりし
といふ所を、拙者認める事が出来ません、併しながら彼れが嫉は主
君の御愛妾、その縁邊にありませぬ、御遠慮は申上げませ
ん、それ而已ならず他に御意に適ふことどもこれあるがゆゑに、三百
石とまで追々昇進いたしましたものでござります、これは敢て私は
御止め申す次第ではござりませぬ、が、三百石の御側用役を以て、
何の勤功もなきに、老臣の列に加へられると云ふことは、憚りなが
ら他家は存じませぬが、當榊原の御家に於ては、これまで例のなき
事にござります、また國許には多くの御家老もこれあります、
その御老臣或は重役を差置きまして、主君の思召したればとて、彼
れを老臣に御加へなさるといふのは、甚だ不都合のやう心得られま
する、傳内兵衛御諫言を申上げ奉つる、思召あらば承はり申さん
とボツと言放つたが理の當然、こゝが馬鹿な主公様ならば、黙れ傳

内、予が考へちや、とか何とか言ひませうけれども、女には惚けて
在らッしやるやうなもの、榊原公も去る方で在らッしやるから、
彼れの一言に何事も仰せられず、只空然として御在で遊ばすので、
座中白けて見えました、が、稍暫時経つて式部成程傳内、其方の申す
所、至極有理である、國許の老臣に相談の上取極めたら好からう、
傳内左様にござります、お國許老臣に於きまして、一同の者が押原
右内を正に老臣になるべき者であるといふことでござりますれば、
傳内些かも御止めは申上げませぬ、決して彼れに怨恨のある者では
ござりませぬ、まだ他れを憎むのでもござりませぬ、只家例の正し
からぬ事を存して申上げるのでござります、式部、然らば國許老
臣に申送り取極める事である、と、その儘評定はこれにて止まること
になりました、松笠典膳、押原右内、その他彼れ等に從ふところの連
中は、ナアコ彼の老爺、憎い奴だと、睨付けて居ります、然るに
傳内兵衛は平氣なもので、その儘で御殿内を退りました、その翌

日も翌々日に至りましても、別に異なる事もなく、四五日相経らまし
て、今日しも傳内兵衛、お上屋敷を出で、彼の下谷七軒丁にある
お中屋敷の留守居役中村久馬といふのは、御自分とは至つて心安い
間柄で、今日ば閑暇でもありましたから、これへ参つて朝からか
茶を御馳走になり、昼飯も御馳走になり、夕飯も御馳走になつて、
夜に入りましてから、中間一人を伴れて傳内兵衛は、フツと立
歸つて来る、平素は御成街道を出て、筋遠見附を通り、或は昌平橋
を渡つて歸るのでございませうが、今晩は如何いふものか、フツと
と和泉橋を通り、既に藤堂公のお屋敷の横會まで歸つて参ります
と、バツとフツと四五人の武士、大刀を抜いて斬込んだ、喫驚
いたしたは中間の市助、携へて居た提燈を投り出して逃出したが、
傳内兵衛は義正流の達人、柔術は起倒流免許皆傳、三名や五名の者
を相手にして斬合ふのは、仔細のない仁でありませうが、事を好まぬ
お仁であり、若武士の試斬りと考へましたから、その儘でバツと休

を轉じて、藤堂家のお窓へ飛付きました、江戸表は屋敷も廣うござ
います、この下谷の名物は、三味線堀の佐竹の屋敷か、和泉橋の
藤堂家のお屋敷と云つて、大變近頃は彼の溝渠が汚なくなり、或は
埋りも致しました、従来は上方で溝渠といひ關東で溝渠と名づけ
る溝渠とは言ひながら、全でお塚のやうな清いな水が流れて居りま
して、金魚だの鯉だのが游いで居たといふ、尤もこの溝渠の幅は
廣うございませう、それを飛越して向ふの窓へ飛付きました、槍で
もあるなら、突きも致しませうが、長いと言つても二尺七八寸、三
尺の刀、斬付けることが出来ない、五人の者はハツと驚いた、この
飛付いた窓は、藤堂の藩の原田彦太夫といふ大島流の槍の先生のお
長屋、彦太夫は今机に倚靠つて、書見をして居ると、窓がヒリッ
ツと音がした、何事やらんと起上つて、ヒロイツと見ると、人間が
くッ付いて居る彦太夫、ア、コリヤ、其方は何者ぢや、傳内拙者は、
藩、鈴木傳内兵衛と申します、只今亂暴人が斬込んで参りました

鈴 木 主 水

て、彼れを斬らば人殺しの罪、主持つ身の上斬られては相成りませ
 ん、依ッてチロツとお窓を拜借いたしました、彦太「これは何うも怪し
 からぬ」と窓の内と外とで話をして居る、兩方の手でチロツと窓へ
 取つき、足が壁にくッ付いて居る様は、宛然鳥でも止まッたやうな
 もので、原田も傳内兵衛の名前は聞き及んで居りますが、今この腕
 前を見て感心いたしました、彦太「然らば拙者御助勢申す」と言ふなり
 承塵にかムッてございました、二間半の長槍の鞘を拂つて、窓内から
 向ふへサツと線出した、五人の奴は驚きました、窓内から槍が出た
 傳内兵衛は彼んな所に止まッて居る、此方も槍で突かれる氣遣ひは
 ございせんから、大道の真中に寄つて見て居ります、とこるへ
 向ふから提燈の燈火、アアア人の足音、見付けられては一大事と
 彼の曲者共は逃出して仕舞ひました、これを見ると傳内は「誠に何
 うもお邪魔を致しました、彦太「イヤ鈴木氏、御姓名を承はりました、
 拙者の名前を名乗りませんでした、失禮いたしました、拙者は原田彦太

鈴 木 主 水

夫と申す者でござる傳内「イヤこれは、また何れ伺ひます、お邪魔
 を致しました、左様ならば」とアツとまた元の大道へ飛下り、そ
 の儘足を疾めて、この處を立去りました、原田はこれを見て「ア、
 巧く飛んだ」と感心いたして居ります、此方はやうく屋敷へ歸
 つて來ると、お上屋敷の門前で、戦々慄へて居る奴は家來の市助、
 「お歸り遊ばせ傳内、如何いたしました市助へエ、お先へ歸りまして
 ……これまで逃出して歸りましたけれども、旦那様がお歸りがない
 のに、私だけ歸つてはと思ひまして、今まで此處にお待ち申して居
 りました傳内、偏は感心な奴だ、三十六計逃ぐるが第一、其方等
 も若者ぢや、以來若しや喧嘩などを吹掛けられた時は、一旦は足の
 届くだけ逃げる、如何しても逃げる方が徳だ市助へエ傳内決して口
 論などをせぬやうにしろよ」と彼れを誡めまして門を這入つた、
 ア斯うなるといふと、押原右内等の連中は、マツマツと首尾悪く遺損
 つたが、何うかして鈴木傳内兵衛を殺したいものであると、密々相

談をして居る様子、傳内兵衛は確かに顔は見ませんが、彼の五名の
連中は、押原に味方の者、此方があつては彼れの出世の妨げといふ
事は正に分つて居る、何うにか致して彼の連中を殺して仕舞ひたき
もの、さすれば根を断つて葉を枯らすの道理、押原、松笠等の奴輩
を討たんければ、この榊原の御家は安泰には参らぬといふ考へて居
ります、然るに御自分の忤主水なる者は、去んぬる十三歳の年よ
り、御自分の爲めには兄弟弟子、表三番丁の小笠原十郎右衛門の許
へ稽古にやつております、何うも家庭にての教育といふものは、上
へ行かないもので、大抵は如何に自身は腕前が出来ます、鑿劍の先
生方でも、また同流名であれば、他の人を頼んで、それに預けると
いふ、如何しても親子の間といふものは、お互ひに氣儘が出来して
稽古になりませぬもので、最早主水は十七歳と相成りまして、腕前
も餘程出来るやうになりました、これは小笠原氏が引受けて呉れる
から安心だが、何れ悪人を殺せば我身は切腹の覺悟、吾れ死なば妻

の流江が困るであらうから、これを離縁をして置けば好からうと、
色々考へたものと見せまして、傳内、コリヤ流江、流江「ハイ、傳内、チヨツと
お出で、流江、何か御用でござりまするか、傳内、ム、ア、さてお前と私と
夫婦になつて、はや三十年近いナ、流江「ハイ、誠に古いお話でござい
ます、傳内、で、後れながら出来た忤は十七歳、小笠原殿方へやつてあ
る、少し私に考へる事があるので、今からお前を離縁をするに依つ
て認めて置いたこの離縁状、これを持つて兄の許へ歸つて呉れ、突
然の傳内兵衛の言葉に、喫驚いれした奥方流江「チヨツと貴郎、お
待ち遊ばして、御申成ではござりません、妾は十九歳で嫁に参りま
して、三十年以上、最う貴郎五十の坂も越えて、齒が脱けて参りま
す、頭髮はこの通り白髪になり、今更貴郎に離縁をされまして、父
母もござりませず、兄の許へ参りますといふのも、面目ない譯で、
傳内「假令面白からうとも離縁をする、良人が氣に適らぬ女房を離
縁するに、誰れに遠慮がある、流江「そりやア貴郎は御遠慮はござりま

鈴 木 主 水

すまいけれども、妻は……傳内黙れッ、離縁状を遣すからは赤の他人、出て行けッ、不埒な奴だ、一寸も置くことは出来ぬ、第一面を見るのも癪に觸る、行けッ」暫時顔を見て居た奥方は「こりやア良人は氣狂ひになつて」と驚きました、そこはお武士などいふものは、なかく感心なもので、株林輩の喚アで御覽あそばせ、突然女房を離縁するなんてなことを言ひますと「何を吐しやアがこのひよつとこめ、汝ア節季の拂ひが足らない時に、乃公の半纏を質に置いたことがあるだらう、里へ行つて錢を一貫五百文借りて来たこともあるぢやアねかッ」ていな事を言つて、詰らない貧乏世帯の悪態を出して、掴會ひが始まらうといふ、下等社會は困つたもので、奥方は良人に言はれて、争ふ力もなく、三行半を貰つて、彼の沙止の脇坂公の上屋敷、兄根來勘兵衛のお長屋へ立歸つて参りました、中間はそれと見るより中間オ、これは奥さま、お越し遊ばせ、何卒お上り遊ばして、瀧江アノ兄は宅でござりまするか、中間へ、旦那

鈴 木 主 水

様は在らつしやいます……旦那様、鈴木様の奥さまが入らつしやいました、勘兵衛、然うか、此方へと申せ……イヤ存分御無沙汰をして居ました、大分順氣も好くなりましたが、如何ぢや、傳内兵衛にも和變らぬか、主水も勉強して居るでせう、お前も變らないで目出度い瀧江「イエ妻は變つたので目痛いでござります、勘兵衛何を申して居る、オヤッ、泣いて居るではないか、瀧江「ハイ、泣かすには居られませんが、せん、妻は良人に離縁しました、離縁をされて歸りましてござります」驚いたのは根來勘兵衛「何だ、コレ嫁に參つて三十年來、十七才の男子が出来て居るではないか、成程女は七去と云ふ事があつて、その淫なるとか妬なるとか、又は子なきとか悪疾なるとか、何かそれ申分があつて、離縁たのならば仕方がない、が、それとも何か其方不埒でも働いたのか、瀧江「御申儀仰しやいます、妾にそんな事がありませぬものか、妾は五十二になりました、少々逆上性でございませぬから、この通り頭髪も禿げて白髪……勘兵衛成程分つた、さては

鈴 木 主 水

傳内兵衛、彼の老爺助倍老爺で、貴様が年を老つたところから、
 か何か置いて、その若い女に惚けて、その揚句貴様を離縁すると言
 んのであらう、言語道断だ、コソ許しては置かぬ、拙者が参つてこ
 れから掛合ッて遣す、マア泣くな、コソ瀧江が歸つたと奥へ申して
 呉れ」と言つてる所へ、勘兵衛殿の奥方は「オヤお歸り遊ばせ、瀧江か
 組イさま、誠に面目次第もござりませぬ、奥方「ナニ宜しうござります
 ……貴郎確かり掛合ッてお出で遊ばせ、元々通りになりませうやうに
 勘兵衛、いよく承知をしないなら、傳内と決闘に及んでも、根
 來勘兵衛武士道を立てる、羽織を出せ……イヤ着せるに及ばぬ、乃
 公が着る……奥方「其郎それは裏でござります、勘兵衛「イヤ當世は裏が流
 行る、奥方「御申儀仰しやア可けません、勘兵衛「サア、履物を出せ履
 物を……奥方「それは貴郎お裏でござります、勘兵衛「裏か表か向ふが見
 えない、奥方「コソ重助や、旦那様は少し遊ばせて在らつしやるから、氣
 を付けてお出で、重助「エ宜しうござります、私だつて事と次第に依

鈴 木 主 水

りやア承知いたしません、勘兵衛は若衆の重助を伴れまして、沙止
 の脇坂のお上屋敷をします、汗を流して老爺さん、榊原のお上
 屋敷、彼の鈴木傳内兵衛の長屋へやつて参りました、勘兵衛「頼まう……
 市助「ドレ……イヤこれは根來様、入らつしやいませ、勘兵衛「ア、傳内
 兵衛は在宅か、市助「左様でござります、勘兵衛「コソ、案内には及ばぬ」と
 おッ取刀でツカク、と奥室へ通る、傳内は机の前に座を占めまし
 たが、書籍を讀むのでもなし、只手を拱いてツツと考へて居る、勘兵衛「
 傳内、傳内「イヤこれは、サア何卒お兄、此方へ、勘兵衛「ナニ兄、この勘兵衛
 衛に向ッて兄といふ挨拶が出来るか、白痴者め、サア何故あッて離縁
 を致した、妹の瀧江に不埒な廉があらば、早速述べさッしやい、兄
 親と申す事もある、父の善太夫は亡くなる、妹瀧江は引取り
 申す、十年來居を同じうした者は、夫婦の間は尙更のこと、その情
 の深いものぢや、況して知んや三十年、殊に主水といふ忝の出来て
 居る者を、如何なれば離縁をした、サア事と場合に依ッては、勘兵衛

鈴 木 主 水

衛その分には捨て置かぬ、速かに御返答をなさい傳内イヤお話し申すど、起上つて襖を開き傳内ア、市助や市助へエ傳内チヨツと其方は出て参れ市助へエ傳内で、又蔵と九助は如何した市助お使ひに参りました傳内イヤ、居らねば可い、少々内談があるから、其方も出て行け市助エー何方へ参りませう傳内然うおや、前町の小間物屋へでも行つて遊んで来い」家來の市助は驚いた、三人の家來で二人は使ひに行つて居るのに、残つた自分にまで出て行けといふ主命でございませうから市助それでは今日一日お暇を貰ひましても構ひますまいか傳内イヤそんなに遠方へ行つてはならぬ、暫時経つて此方の用事が済んだ頃を考へて歸つて来い」正直者の市助は、その儘で出て行つた、此方は家來を出して置きまして、兩眼に涙を浮べた傳内兵衛、兩手を支へて勘兵衛にむかひ傳内七人の子をなすと雖も、女に肌は許すといふ莊子が言葉、三十年來連添ひし妻とは申しながら何うも打明け難き次第ゆる、それとなく離縁を致したのでござる、

鈴 木 主 水

御身なればお話し申すども、決して遠慮はない譯、實はこの中から當榊原家に毒虫がござつて、斯様々々云々の次第、拙者をば既にこの程暗殺を致さんどまで計つたこととござる、若しもこの儘に彼れ等を捨て置きましたらならば、名家の榊原家も事に依つたら斷絶いたすまいにも限られず、これに依つて彼の姦佞の曲者十名以上はあるやうに思ひます、彼れ等を悉く斬殺して、拙者は切腹に及ばうといふの考へ、その故を以て、何落度なき女房を離縁たやうな次第俸水は小笠原殿に預け置きましたれば、彼れが身は大丈夫でござります、何卒妻の瀧江は、御身が爲めには妹、御厄介ながら宜しくお願ひ申す、若し手前が亡くなりましたらば、逆ながら御回向下し置かれませうやう、お願ひ申して置きます」最前より逐一の話をお聞いて居りました勘兵衛は「ア、恐れ入つた傳内殿、成程御有理な次第、イヤ勘兵衛少しの思慮もなく、只御身に對し、不足がまじき事を申して、誠に何うも赤面の至り、イヤ分りました、委細承知

を致しをした、立派におやりなさい、ア、君家の爲めに命を棄て
る忠臣は幾らもある、お勸め申す、立派におやりなさい、誠にお邪
魔を致した、左様ならば傳内お歸りか勘兵、ハイ、拙者立歸るでござ
る傳内、然らば前町に家來の市助が居りますから、彼れが居らぬと不
都合でなりませんが、お呼び下さるやうに勘兵、イヤ委細心得た、氣樂
な老爺さんだ、勘兵、衛はその儘家來を伴れて戶外へ出ました、丁
度この門向ふに小間物屋がございます、その店の端に腰をかけて、
市助は呆然して居ります、勘兵、コイヤ市助、市助、ヘエ勘兵、用事は済んだ
早く歸れ、と言ひ置いて、此方は沙止の屋敷へ立歸つて参りました
瀧江どののは玄關に出迎ひを致しまして、瀧江お歸り遊ばせ、して良人
にお會ひ下さりましてござりますか、如何でござります、勘兵、喧まし
く言ふ、物事はヤイ、言ふものではない、コレ奥や、酒肴の拵
へをして、瀧江にも一盞飲ましてやれ奥方して貴郎如何いふお話で
ござりました、勘兵、ア、何うも可かん、七人の子をなすとも、女に

肌を許すナといふ言葉がある、ア、傳内兵衛はわらい、眞の武士ぢ
や、彼れが本當の忠義者だ、ア、何うも感心ぢや瀧江、して兄様、妾
の身体は勘兵、イヤ宅に居れ、一良人が女房を離縁といふのは世にある
例は、大体其方が悪い、瀧江、何が妾が悪いとござりますか、勘兵、何が悪い
と言つて尋ねるのが悪い、全体貴様は心得が違つて居る瀧江、で、妾
に何が落度がござりますので、勘兵、ア、ある、其方は第一三度飯を喰
ふであらう瀧江、ハイ勘兵、ア、それが悪い、ア、小便をして大便を
する事もあるたらう瀧江、妾は大概毎日大便は一度、斯う年齢を老り
ますると、小便には何度も参ります、勘兵、ア、それが悪い、何うも甚
だ不都合である、第一貴様は頭髪を結ふたらう瀧江、女は皆頭髪を結
ひます、男でも然うでござります、その頭髪を結ふのが悪いとさ
りますか、勘兵、可けない、ア、何しろ貴様の面が氣に適らぬと言ふの
ぢや瀧江、ヘエ、最う貴郎連添うてから三十年にもなるのでござりま
す、勘兵、ア、三十年が百年でも、貴様のやうな奴は氣に適らぬとい

水 主 木 鈴

ふ、それゆゑ離縁をしようと云ふのぢや」この時側より奥方は「貴郎、瀧江さまは泣いて在らつしやいまする勘兵エ、ッ不埒な奴だ、先方の言ふのは一々有理だ、彼れ此れ申すと、貴様も離縁を致して仕舞ふぞ」と取付く島がない勘兵衛の容子に、何うやら氣狂ひになつたのであらうと、奥方はじめ瀧江も暫時は呆れて顔を見て居りましたが、瀧江は何うも考へが付きません、そこで早々にこれから草履を穿いて戶外へ飛出したが、彼の番丁の小笠原十郎右衛門の屋敷へ参りをするに瀧江「お頼み申します 執次、ドレ……ア、誰方でござります瀧江「ア、此方に主水が居りますのでござりませう、妾は鈴木主水の母でござります、何うか忤に合ひたうござりますので、然ら申して下さいますし 執次、ハイ宜しい……鈴木さん、貴郎の阿母アさまが入らつしやいました、これを聞いて主水も驚いた、この塾へいつも来るのは、若黨が来るとか、偶には阿父様も、この小笠原とは兄弟同様の間柄ですから、参ることもあります、何の御用で阿母アさまが

水 主 木 鈴

お出でになつたのであらうと、訝りながら出て参りましたが主水「オ、これは母さまでござりますか、何卒此方へ」と當家の四疊半の室を借受け、寄宿を致して居りますから、これへ案内をして参りました、書生のごとで、別に何にもありません、机に本箱箱古道具その他にはチヨツとして煎茶道具ぐらゐがありますのみ 主水「サア阿母アさん、お茶を煎れました、召喚りまするやう 瀧江「イエ茶どころではない、大變な事が出来たので、妾は阿父つアんに離縁をされました 主水「エ、ッ、如何いふ次第で 瀧江「サアそれは斯うく、斯ういふ譯で、何うも妾にも考へが付きかないので、それで兄さんに行つて貰つたのだが、それでも未だ譯が分らない、これく、斯様々々このことである 主水「成程、イヤ宜しうござります、私が一應これから参りました、父に面會を致しました上、また何とかしまして、その次第を申し上げます、あなたはこの儘外伯父様の方へお歸りなすつて居て下さいまし 瀧江「然うかエ、それぢやア妾は兄さんの方へ歸つて

鈴 木 主 水

から頼むよ主水宜しうござります、何卒脇坂様のお屋敷にお待ちを願ひます、早速先生にお暇を戴いて、父の許へ参りますから」と母を還して置いて、その身は小笠原十郎右衛門の前へ出まして主水「ッ」と母が参りました、宅に少々用事が出来ましてござります、事に依りますと、今晚一夜は宅に泊るかも知れませんが、お暇を頂戴いたしたうござります、十郎「ア、奴僕ではない寄宿生だ、ア、宜しいども、何うか歸つたら傳内兵衛殿にも宜しく申して呉れ、大分長らく會はぬから主水「ハイ、申傳へますのでござります」とその儘で出掛けやうとする、小笠原は「ア、チロイと待て、今チロイと聞いたが、母が参つたといふ話であつたが、如何いふ事だつた主水「エ、先生、御承知なら申上げます、實は母が離縁になりましたので、外伯父の勘兵衛の許へ歸つて居るといふ事でござります、只今母は還しました、私はチロイと父の許へ尋ねに参らうと思ひます、十郎「ア、それなら拙者も参らう、何か他の用かと思つたら、夫婦の

鈴 木 主 水

離別などいふ事は、容易ならざる事である、拙者も参らう、暫時待て」と小笠原十郎右衛門急にこれから支度を致しまして、何しろ天下直参の八百石、身分ある方ですから、早々家來を兩名ばかり御伴れになりました、主水と同道の上、傳内兵衛の長屋へやつて参りました、未だ長屋へは一二間間隔のあるうちに、主水は先立つて父の長屋へ駆込んで参りました、主水「阿父様、只今傳内「ム、主水か主水、エ、小笠原の先生がお出でになりました、傳内「ア、然うか……、一サア何卒此方へ」と早速出迎ひをする、兄弟で言は、傳内兵衛は兄弟子ではあります、此方は陪臣、先方は直参、殊に八百石の大身です、先づ上座に通して、一別以來の挨拶了りましたが十郎「さて鈴木氏、只今承はつたところ、御家内を御離縁をなされたさうだ如何なる事情のある事かは知らぬが、お互ひに五十の坂を越して、妻を離縁をするといふのは、甚だ穩當しくないので、拙者は敢て啄を容れることはあるまいけれども、大府主水も心配をして居る、依

水 主 木 鈴

つてお伺ひ申しに参つたやうなことであるが、何うかア元々にな
 ることならば、永いことはござるまい、と申して、人間の壽命は分
 らぬものだが、雪まで保つ花はない、百歳以上の壽命といふものは
 珍らしいもので、最う初老も過ぎたといふ年齒で、何が氣に適らな
 いで離縁を爲召されたのちや傳内イヤ小笠原氏、御深情の段有難い
 が、實は今根來勘兵衛も参りましたから、その次第を述べて返し
 したやうなことで、主水備は次の室へ遠慮いたせ」と我子主水を次
 室へ出して置いて、そこで小笠原にむかひ傳内實はこれく、斯様々
 々」と一部始終を物語る、小笠原十郎左衛門はこれを開き十郎、
 ウ威程、それならば御離縁をなさるのには御有理でござる」と感心し
 て居る、この時袂を開けて這入つて参りました主水「父上、傳内、コリ
 ヤ、控へ居らぬか主水、主水イヤ、今か次室にて承はりました母を御
 離縁の儀はそれにて分りましたが、只今のお話の模様で見ますれば
 松笠、押原を始め、確かに彼れ等は人数何人と云ふことは分ります

水 主 木 鈴

まいが、十名以上はあるとの仰せ、然らば阿父上御一人にては如何
 と心得ます、就きましては及ばすながらこの主水も……傳内、黙れ、
 若年の其方の手を借りるやうな傳内兵衛ではないわい、コリヤ首尾
 よう参らば好いが、若し遺損じて、この傳内も亡くなり、其方も死
 んだならば、この鈴木の家名は誰れが立てるぞ、御家に忠義の爲め
 に命を棄てる傳内兵衛、其方は鈴木の家を立てるやう、先祖代々の
 家名を潰してはなるまい、父が死なば、その後二代の忠臣と云はれ
 ねばならぬ、先生の御供をして早く歸れ、十郎右衛門殿、忤の御教
 育は、御自分ならではなりません、何分にもお願ひ申上げます」父
 子の言葉を聞いて、手を拱いて居た小笠原十郎右衛門「ア、この人
 にしてこの子あり、傳内殿の御心中、お察し申す、主水、父御の言
 葉を背いてはなるまい、拙者と共に歸られよ」と父子の間を引分け
 伴歸る十郎右衛門、主水は心中に一つの考へのあります事か、何
 にも言はず、師匠の供をして立歸る途次、父は彼の悪人を殺すとい

水主木鈴

ふ然らば拙者は一つの考へを以て、根を断つて葉を枯らすの道理、彼のお裏へ廻つて、お秋といふその女をば殺して了へば御家安泰、彼の淫婦の爲めに、御前のお心が亂るゝに極まつたりと、年積は漸く十七歳、未だ角結の身ながら、心の確かなる者ですから、その晩のうちに支度に及びまして、奥御殿に斬込むといふ、主水光信苦心のお話し、チロツと一ト息。

第二回

さて主水光信は、立歸つて参りましたが、母にはこの事を言はれず、多分外伯父が何とか押へて置いて下さるであらうと、氣にはなりませんが、歸つて訪ねにも参りません、只その身は姦婦を殺して、御家の安穩を祈るの外はないといふ考へです、夜人の寝静まるを窺ひまして、一彼の榊原家の庭内へ忍入り、「何うせ夜分は廁へも行くな事があらう、その場合に至つて斬殺して了へば、事の済むこと

水主木鈴

假令押原等の逆中を殺すといへど、姦婦が生存へて居るうちは、御前のお心を蕩かすに違ひない、彼れさへ殺せば、御前は御敗心を避ばすであらう」と、これは好い所へ目を着けましたので、毎晩忍んでは行きますすけれども、折悪しく彼のお秋に出會ひません、然るに或晩のこと、小笠原十郎右衛門の隣屋敷は、佐々木大和守と仰しやつて、二千石のお旗本、その屋敷の馬部屋から火が出ました、「火事だ」といふので大騒ぎとなりました、小笠原家では寄宿の門人が十名ばかりもございますから、何しろ血氣盛んの若者、事あれかしと思つて居るところへ、隣家の火事、江戸の名物は火事に喧嘩だといふ位か、「ソレ行けッ」といふので、道具を着ける者もあれば、木剣を携へる者もあり、隣の佐々木の屋敷へ来て手傳ひを致しました、何しろマア番丁邊の井戸は深うございますけれども、水を汲上げて運ぶ者もあり、竹刀を以て打壞す奴もあり、そのうちに佐々木家も二千石の屋敷のこととございますから、大勢の家来もあ

鈴 木 主 水

れば、長屋に住んで居る者もありません。消防夫の来る間に、到頭馬部屋一軒を打壊して了ひました。○ア、鎮火して先づお目出度いとて、用人、誠に御隣家の方、御親切に有難うござります。と小笠原から来て呉れました門第共に禮を述べました。尤も小笠原の内門第ばかりではない、近傍からも来て呉れました人には、皆々に禮を言つて居る。小笠原の門人は鼻高々として引取つて参りました。甲「如何だ、山本、小倉、何うも面白かつたナ。乙「よ、面白かつた」と皆々話をして居る。とこゝろへ或一人の門第「イヤ各々、御苦勞だつた、スツカリと鎮火をさせたことであるが、若しも彼處からやられたものなら大變だ、堪つたものではない、如何だ、皆な一盞飲まうではないか、そこで中間を呼んで、一盞冠が有りますから、別にお荷と言つてはございせんが、賞合はせました乾魚か何かで飲み始めました。甲「如何だ、今夜は誰れが一番に目を覺した。乙「それは僕が一番早く目を覺して飛起きたんだ。丙「イヤ拙者だ」と何しる最う二

鈴 木 主 水

十歳から二十四五といふ若武士ばかりですから、皆腕自慢をして居る。酒が廻つて来るに従ひ、追々管を巻く者もあれば、中には詩を吟じて居る者もあります。甲「オイ、それは然うと鈴木が居ないではないか。乙「ア、ホソに、主水氏が居ない、よく寝るぢやアないか、丙「この火事に寝て居るやうなことはない筈だ。甲「ア行つて見たまへ、寢て居たら起して来るが好い、何うも不都合だ。熱酔つた奴が二人、主水の部屋へ出掛けて参りました。甲「オイ鈴木さん、オイ鈴木君……見なさい、熱く寢て居るア、鱧鮫はよく寢るといふが、何うもすいさが寢るとは可怪い……オイ鈴木、よく寢て居るなア」襖を開いて見ると、頬被をして居る。甲「可怪いなア、鈴木君、頬被をして居るナ、中間共が吉原の長屋を素見すぢやアあるまいし、頬被とは如何だ、鈴木君、起きたまへ」枕元を見るといふと頬被をして居る。甲「アッ鈴木は赤い毛が生ゑて居るぞ、如何したんだらう」

鈴 木 主 水

よく見るとその筈だ、櫻欄帯に頬被をさせて枕をさせ、行燈の
 鞘を抜いて、それを横に寝かして、蒲團を着せてあらうといふ爲に
 でございます。甲「チェイとこれを見たまへ、作物だ、鈴木、馬鹿
 にして居やアがるせ、箒と行燈を名代にさして置くのだ、不在中は
 ろきに御苦勞さま、それゆゑあんどう致しましたか、乙「何を言つて
 るんだ、甲「マア見たまへ、鈴木、行燈名代をさせ箒名代をさせて居
 やアがる」と喧々騒いで居りますから、小笠原先生は出掛けて参り
 まして十郎何だ、如何したのだ、甲「イエ鈴木が居りませんので、誠
 に相済みませんやうな譯で十郎、マ、ウ左様か、マア可い、若い者ぢ
 や、捨て置け」と仰しやつて、その儘先生はお歸りなすつた、他の
 者も皆な熱酔つて、そのうちに寢て任舞ひました、その跡へ密と
 歸つて来たのは鈴木主水、隣家の火事は知らなかつた、窓から這入
 つて、行燈は元の通りに納め、箒は片傍に投り出して寝みました、
 そこで翌朝になりますると、早くから起きて顔を洗ひ、皆々は食事

鈴 木 主 水

にかゝりましかが、甲「鈴木氏、主水「イヤ誰方もお早う、甲「ア、ア、誰
 方もお早うなんて、君は餘程寢坊だナ、主水「誠によく寢ました、甲「人
 を馬鹿にして、昨夜の火事を君知つてるか、主水「コレ、申談言つては
 可けない、火事なぞが……、甲「申談をこるか、隣の佐々木の馬部屋
 から火が出て、馬部屋を到頭打壞して仕舞つたんだ、主水「ヘー、甲「
 君は不都合だナ、幾ら隠したつて可かぬせ、鈴木「昨夜は到頭露頭を
 した、貴公行燈の鞘を名代に置いて、櫻欄帯に頬被をさせて置いた
 が、如彼いふ事をして、君は何處かへ密そり忍んで出たのだらう、
 何處へ行つたんだ、ハツと驚いた主水は、忽ち顔色が變つた、主水「實
 は面目ない話だが、先生には何うか内證で、甲「マアそれは可いが、
 何處へ行つたんだ、主水「大きい聲では申上げられぬが、實はこの近傍
 の去る大名のお姫さまが、僕に惚れたのだ、甲「エ、エ、主水「此間附
 文をされて、最初の間は僕も断つて居たけれども、ツイ女の方から
 色々申して参るので、この間も拙者は九段の坂まで来ると、端なく

鈴 木 主 水

もその娘さまに出逢つた、すると拙者の両手を握へて、雨の降るは
と道る文に……甲「コソ、妙な聲色を使つて、何處で芝居を見て
来たんだ、主水「イヤ芝居ではないんで、本當の事だ、で、ア切なる
情に觸されて、僕もその儘に打捨つて置くといふ譯にもならず、そ
こでア遂には密會ふてるといふやうなことで、甲「何うも色男は違
つたものだなア、然う惚けられた日には堪つたものではない君惚話
を聞かしてその儘では済まぬぞ、何か奮りたまへ、奮りたまへ、主水「
イヤ奮ります、ぢやア今晚お蕎麥を、甲「蕎麥なんか仕方がね、な
んか圓鶏か鶏肉でも奮りたまへ、主水「イヤそれ位なら奮つても宜し
い」と話をして居ると、奥の室から十郎「主水、チョコッとお出で、甲「
ソイヤ、好い後は悪いせ、乳繰つた報いだ、遂にお小言を頂戴する
であらう」と傍から冷かして居る、主水は胸に徹へました、呼ば
れる儘先生のお居室へやつて來ました、主水「エー先生、何か御用で
さりますか、十郎「ア、主水、前に進め……お前は十三の年歳から私の

鈴 木 主 水

許に來つて、はや五六ヶ年、大分成績も好い、二十歳の坂を越すま
でには、免許を渡さんければなるまいとまで、私は考へて居る位
若いうちは過失はあるものではあるが、修業中といふものは、餘程
注意せぬと可かぬぞ、酒を飲む者も修業中は禁酒をし、或はその他
に娛樂があらうとも、目を慰め心を慰めさせること云ふ事は、業が終つ
て後の事ぢや、修業の中に左様な事をしてはならぬ、この邊からは
遊里と云つても遠いが、また他に遊びに行く所もあらう、が、夜遊
びは好くないことぢや、何處へ参つた昨夜は、ア有体に申せ、昨
夜の出火に其方の居らぬは、不思議と心得たが、門人も仰々しく騒
いで居つた、行燈或は箆に名代をさせて、外出をするなどいふの
は、人に依つては巧みにやつたと賞める者があるかも知れぬが、甚
だそれは宜しくないことぢや、有体に申せ、主水「イヤ何事も御承知の
上からは、決して虚偽は申上げません、實はこの間お供を申して、
父が屋敷へ参りました時に、父の言葉に依りますと、押原右内、

水 主 木 鈴

また彼れに味方をする松笠を始め、お家の悪人を滅ぼしたいと云ふ
 ことでござりました、で、助太刀をと申しても許して呉れません、
 依つて退いて考へまするに、假令彼れ等を殺したればとて、これ等
 は枝葉でござります、肝腎の幹なる者は、彼の秋と申す淫婦でござ
 ります、彼れが爲めに御前のお心が狂うて居られるのでござります
 から、彼れさへ亡きものにせば、所謂根を断つて葉を枯らすの道理
 この中から毎夜神原家へ忍んで参り、疵ひ居りまするが、折悪しく
 も彼れに出逢ひません、既に昨晩も先生を始め一同の門人方の寢床
 に就かれるのを待つて、當お屋敷を脱出でまして、曉方に至つて立
 歸つて参りましたやうな次第でござります」と胸中を打明けて物語
 を致しますると、小笠原先生は大いに御感心いたされまして十郎ア
 、左様か、ア一谷めたのは拙者が過失、若年の身の其方、好い所へ
 考へを着けた、併し主水、それでは考へは好いが、爲す事が拙ない
 漸う其方は義正流を卒業せんとするまでの腕前、假令夜中とは言へ

水 主 木 鈴

ど、榊原公も十五万石の大名、宿直の武士もある、若し過つて其方
 が一命を棄てるやうなことがあつたら、それこそ父の心志も無にな
 であるあらう、然りながら一旦其方の決心、止めは致さぬ、近寄つて
 彼の秋を斬らすとも、彼れの一命を断つ工夫がある、今日から一週
 間のうちに教へて遣す主水ア一有難い仕合せにござります十郎これ
 は我義正流の外に此方が編出した錆付の手裏剣といふものである、
 即ち手裏剣の先に毒薬を付けて彼れに打込みなが、手裏剣のことゆ
 る、五間十間離れて居つても打てるであらう、敢てその場に臨み刺
 貫さぬでも事は済む、そこでその手裏剣が身体に中らば、假令即座
 に命終らすとも、身体に毒薬の廻る時は、早晚命を棄てるに極つた
 ものぢや、これは容易ならぬことゆゑ、決して人には傳授をせぬの
 であるが、汝の忠義に愛で、特別に教へ取らせることであるから
 左様に心得よ主水ハ、ツ、ア一有難い仕合せにござります、何分御
 教授の程を願ひ奉つる十郎宜しい、これは秘密に教へるのであるか

ら、他の者に物語るなよ」と口止めをなさいました。これから七日の間に、彼の鎧付の手里剣といふものを、先生は教へることになり、位なことは、直分るのでございませう。段々世の中が開けて参りまして、別に醫者でなくとも、藥劑師でなくとも、ホミカだとか硫酸だとか、或は硝酸だとかいふやうな毒藥を以て、人の身体を苦しめ、或は命を取るやうな事のあるのは、誰れでも知つて居ますが、往昔はこの藥劑などの事は、なか／＼と素人には知つた者はございませぬ、小笠原先生はそれを教へるのですが、これは何々を如何するといふ事を一言申せば事は済みますが、その手里剣の打法といふものを教へるので、これも一ツの術ですから、七日位では中々變はられないといふのは、これ何にも知らない人の言葉で、主水は年齒にも似合はず、擊劍も出来れば槍術或は柔術も皆修業をして居ますので、大概な事は分つて居る、この小笠原先生といふ仁は、實

に多藝な方で、殊に射術もお出来なさいまして、又弓術も日置流といふのを教へてお在でなさるのでございませぬ、主水は皆それ／＼習うて居ります、そこで僅か一週間のうちに、この手里剣の術を悉皆傳授を受けましたので、これから支度に及んで、彼の柳原家の御庭内へ忍入りましたところ、今日は牧野越前、川越大和様を始め四名のお大名がお出でになりました、甲冑の程からの御酒宴、柳原公も自慢の愛妾彼の秋といふのは、よく踊を踊りますので、彼の踊なごをば、餘興に御覽に入れるところから、御來客の方々は大喜悅、彼れ此れ夜の亥刻頃はひままで御酒宴でございませぬ、尤も主水は例の如く亥刻頃はひまから忍込み、お奥の様子を見ますといふと、大層な騒ぎ「へ、ア、今宵は悪い折に來た、出直さうかし」とは考へました、が、築山の蔭に身を潜めて、様子を探ひ居りました、十五日の月は見々と明に渡る、然りながら御庭前には月夜にも拘らずお雪洞が處々、踏いて居ります、主水は松蔭に身を忍ばせて、窺ひ

水 主 木 鈴

居る所へ、二名の女中を伴れて、廊へでも参るものと見なしまして、お廊架をバク／＼と急足に来るのを見ると正にお秋、天の與へと主水は、用意の手裏剣取出し、狙ひを定めて置いて、發矢と打った、狙ひ違はず彼れが胸板に中って、「ふ、いッ」と言ふ悲鳴と共に其處へ倒れた。「アレ曲者いッ」と女中の呼はった聲に、奥室に居られた人々は、何事の起りしかと、お騒ぎに相成つたが、御愛妾のお秋をのに手裏剣を打つた者があるといふ知らせでございすから、「ソレッ」といふので、御近習の方々は、おッ取刀で庭へ飛下りました、この時御家老に伊藤大和といふ方がございまして、最う六十以上の御老体、この方も同じく、おッ取刀で庭へ飛下り、足袋蹴足のまゝ駈來つて、不圖御覽なされると、前髪彼の主水の姿、大和は何か心に領づきながら、ピタリッとして其處に立止まつた、ところへ跡からバツ／＼と追掛けて参りました近習の輩、「御老人、曲者は如何いたしました大和イヤ曲者は此方へ参つた近習ハ、ア、彼方ではござい

水 主 木 鈴

ませんか大和イヤ、此方へ参つた、左へ廻れ近習お認めになりませぬか大和如何にも認めた、イヤ何うも年齒は老りたくないもので昔であるなら此方も、東海道五十三驛を九日か十日の間、一日に十六七里、日着であれば二十里の道は歩いた者ぢやが、何分年齒を老ッては、充分歩むことも出来ぬ、何うも身体が疲勞てならぬ、其方共早く参れ、左の方へ逃げた、その園池の方へ廻つたやうぢや、近習「長まりました」と若者は「ン、ン、ン」人の居らない方へ駈出して行く、跡から來つた者は、太息を吐きながら近習如何でした御老人、お認めになりましたか大和ア、確かに認めれた近習「ヘー、何のやうな奴でござりました大和左様、身の長は何うしても一丈以上もあつたらう近習御申儀仰しやッては可けません、そんな人間が……大和イヤ確かに認めれた、拙者も當年六十五歳だが、未だ眼鏡をかけたことはない、腰の廻りなどは五六尺もあツタナ近習「ヘー、大和二王とも云ツつべき大の男子であつた近習「ヘー、如何なる姿

鈴 木 主 水

をして居りました。大和「然うぢや、黒装束に丸縫の帯を締めて、手には十七八貫目もあらうといふ鐵才棒、近習老人、御申儀を仰しやッては可けません。大和「イヤ、決して虚偽は申さぬ、頭は法師に致して薬鐘頭ぢや、先づ往昔西塔にありし辨慶も彼んな者であつたらうか知らんと思はれる位ぢやツた」老人の言葉を聞き、何れも近習の人々は、呆氣に取られ、何がなんだか譯が分りません、鳥鷲々々いたして居ります、そのうちに此方は早速お醫者方が参りました。その當時は何か怪我があると、お醫者が二派に分れました。さいますして、内科のお醫者は脈を取って藥湯を備ゆる、外科の醫者は外科だけに、それぐに治療を加へる、どころがお秋は、如何なる毒藥であるか既や身体に廻りました、當今でも口中へ飲んで胃中へ下る毒藥よりは、注射器を以て注射などを致したものは、願る治療が難しいもので、毒藥が皮下に廻つて來るが爲めに、苦悶も別段強く、お秋は非常に苦悶の様子でありました。が、醫者方の手當もそ

鈴 木 主 水

の効を奏せず、晩方に至りまして、終に命畢つて仕舞ひました。サア家中一般大層な噂となりまして、御愛妾に對して斯かる事を仕出奉りました者は、何者であるか、これは誰れであらう彼れであらうと、悪人連中は額を築めて相談をする、先づ當家中でも、傳内兵衛の外はあるまいといふので、その晩鈴木の屋敷へ忍びの者を遣し、様子を探らして見せした。が、別に彼れはその夜出たやうにもない、何うも分りません、色々噂を爲合せて居りますこととございます。然るに傳内兵衛は、當夜の事を聞き感心いたしました。「ア、未だ日月は地に傾ちぬ、お家の忠臣は拙者一人と思つたは大いに過失、未だく當家には忠臣あり、他家から來た者であつたならば、彼の者に害を加へる筈はない、ハア、何人であらうか知らん」と考へて居ります。すると第三日目のこと、師匠小笠原十郎右衛門から暇を貰つて我家へ歸つて参りました。は悴の主水市助「エー、旦那様、若旦那様がお歸りでござります、傳内オッ然うか……、サア此方へ通れ、久振りぢや

水主木鈴

やのう主水「ハイ傳内主水、先づ喜んで呉れ、一柳原家の事を思ひ、心を勞して居るは、拙者一人と思ひしが、然うでなく實は一昨夜斯うく、新様の次第」と話をするのを聞いた主水「光信は「ア、父上、甚だ申し兼ねて居りますが、一昨夜忍入りまして、彼の愛妾の一命を断ちましたのは、即ち拙者、その次第は新様々々にござります」これ聞いて手を拍つて感心をした父の傳内兵衛「さては主水、汝であつたか、ア、よく致した主水、この上ながら私も御父上のお側に居りました、一向悪人の舉動に心を注ぎたいと考へます、今日は先生よりお暇を貰つて立歸つて参りました傳内、イヤ慥くまで汝が覺悟を致した以上は、最早致方がない、先達ては未だ此方の考へが熱さなかつた、我命畢つた後に、汝に向後の事を托さうと心得たことであつたが、人は一代名は末代、この上からは父子の者が覺悟を極め、お家の安泰を圖るであらうと、父子は是に評議を凝らして居ります、また悪人の方に於ても、始終傳内の舉動を窺ひ居りました

水主木鈴

たが、この間から作の主水が歸つて居ると云ふ事を知り「ハ、ア、さては彼れ等父子の者の所業であらうか知らん」とまたこれに目を着けるやうな事になりました。○「エ、お頼申します市助、ドレ……市助「ハイ」執次の市助から参りましてござります、何うかこのお手紙を件の手紙を開いて見ると、七軒丁の中屋敷の留守居、兄弟の如くにして居る、彼の親友中村久馬からの手紙、今宵夕景より何うか御越し下されたい、月次の釜は十八日でござるが、繰上げて今晚に致しました、何卒お出でを願ひたいといふ文面でございます傳内「イヤ委細心得た、参るでござると宜しく申して呉れ市助「畏りました……エ、お使ひ、御苦勞さまにござります、主人承知いたしましたと申し居られます。○「ハイ、立歸りまして左様に申しませう」と言ひ置いて使ひの者は立歸りました、跡に傳内兵衛、彼の書面を熟と見て居ると、作の主水は「阿父上、中屋敷からのお手紙で傳内「ア、一が何う

水 主 木 鈴

も可怪い、この書は偽筆ぢや主水「へー、偽筆でござりませうか、傳内「ム、ウ……」と暫時考へて居りましたが、彼の竹田でも或は應擧でも、それを誰れが偽描たからと云つて、その書の風が如何であるから偽だとか或は真だとか、一目にしてこれが真偽の分るやうなものなら、誰れもその欺手段を喫ふ者ではござりませぬ、分らないから時々欺まされるので、けれどもその偽物か真物かと云ふ事を知るには、真物と偽物と二ツ列べると直分ります、椀林輩は紙幣などには扱ふことは餘りござりませぬから、只一枚これは五圓紙幣だとか或はこれは百圓紙幣だとか言へば、へー、これが然うでござりませぬかと言つて見るやうな形です、けれどもさて真物と偽物と二ツ列べて、何方が偽物何方が真物かといふと、椀林輩が見ても分ります目安を置いて見なければ、判然するものでない、また傳内兵衛は始終書面の遺取をして居る中村とは、兄弟も只ならぬ間であるから、傳内主水、これを見よ、能く書いではあるが、筆意が違ふ、これは

水 主 木 鈴

必らず彼の悪人共が、計略を以て吾れを誘出すものと見ゆる、計略れると見せて圖るといふのも一つの計ひぢや、所謂計略である主水、父上、然らば私もお供を致しませうか傳内「ム、參れ、で、其方は斯様にせよ」と是で父子は相談を致しまして、日が暮るのを相待つて當お長屋を出ました、必らず彼れ等の待つて居る道は、これであらうと云ふもので先方が考へて居るやうと思ふ所を、段々と歩いて來る、が、別段に變りはない、彼の筋違居附を越して、御成街道を丁度天神下までかゝつて參りました、すると片傍の所に中間が一人立ッて居る、いま來かゝつた傳内兵衛の姿を見ると、ハク「ッ」と向ふへ駈出した、此方は傳内兵衛、すでに板倉公のお屋敷の前を廻らうとする折しも、前に來つた一人の武家、夜中にも拘らず深く笠を戴いて居ります、いま傳内兵衛と摺違ひさまに、武士は凡て左避といふのを、右に來つて鞘をカチリ當てた武士「コリヤ、無禮であらう傳内「イヤこれは失禮を致しました、御免下され武士「ナ、ナ、甚だ

以て無禮な奴である」と云つて、るうちに片傍より現れ出でた一人、この兩名にて傳内を挟み、斬込んで来る奴をば、体を懸した傳内兵衛、兼ねての覺悟、大刀の柄に手が掛るよと見せしが、向つて来た一人を横に拂つた一文、何かは以て堪るべき、頭顛倒と打倒れたそれと見るなり片傍の木蔭より現れた十二三名、前後左右から斬込んで参りなした、背後に目がないとは言ひますけれども、此處です、その考へがないと、斯ういふ時には、甚だ危険であります、或は背後に木柄を取つて置かねば如何だとか云ふやうなことを申しませんが、戰場にて往來をする時には、敵は左右にもあり前後にもあるそれをば逃れるには、彼の近世の坂本龍馬先生の言つた通り、太刀を抜いて前に向ふ者は、前ばかり見て居るから危ないとは此處です、彼の傳内兵衛が敵と打合つて居る、ところへ後馳せに駆けて参りましたる主水、一刀を引抜くや否、後袈裟に敵一人を斬つて棄てた、一曲者は「ソレ加勢があるぞ、氣を付けろ」と言ひながら、尙も劇し

く斬込んで来た、此方は義正流の達人、見返りの傳法、前に向つて居る敵に渡合ひながら、背後よりかゝるを斬つて棄てるといふのが此の仁の妙で、看るく、間にそれへ斬つて落す、けれども然らう口で言ふやうに、人が斬れるものではないと言ふ者もありませんが、それは畢竟する業の足らない人の上に云ふことで、名人が人を斬るやうに、逆も榎林證が口を以て述べられるものではありません、主水は三名斬棄てた、その間に此方は八名斬つた、前後十一名、残り二三名の曲者は、ドシ、進出しました、何しろ非常な騒動でござい、ます、烈割に斬られた奴、或は腕のない者、首の飛んで居る者もあ、らうといふ、それを一々断息を刺して廻つた、首を刎ねてある奴には、断息にも及ばぬ、刀の般血を拭うて鞘に納め、板倉公のお辻番の方に來つて傳内御免下され辻番、ハイ、これは今晩は好いお天、氣でござりました、辻番所の役人は戦慄して居る傳内、手前は梅原の藩、鈴木傳内兵衛と申す者、只今七軒丁の屋敷へ罷り歸らんと存じ

水主木鈴

まする途中、盗賊でありませうか、或は試斬りでありませうか、無断で斬込んで参りましたから、武士の意氣地、己むなく斬棄てましたやうな次第、御近傍のことゆゑ、お届け申し置きます。何卒御検屍を下し置かれませうやう辻番「イヤこれは御念の入りませうことござります」可憐さうに辻番の老爺「は職々慄へて居る、その間に此方は姓名を述べて置いて、その儘立歸つて参りました、早速この事を一目附へ届出しました、公儀に於ては町掛りでござりますから早速町奉行より検屍が下りました、姓名などを記した物は、一人も持つて居ないのは、彼の連中の仕合せか、將た又柳原家の仕合せか、何處の者とも相分らず、彼の斬られました十一名の曲者は、御法通り取棄てと云ふ事になりました、そこで傳内兵衛は如何かと言ふと、これは正當防衛で、斬込んで来る者を斬棄てましたのでありませうから、構ひないとは申しながら、少し他に差支へもこれあり、惜しい家來ではある、けれども永の暇を出した方が好からうと言ふ

水主木鈴

のが、老臣伊藤の言葉、そこで親子諸共永の暇となりませうか、始めてお悟り遊ばした、殺された者は彼の押原黨の連中にて、逃歸つた者などの姓名は分つて居るが、これは畢竟彼の連中の死骸は、町方の手にて處分されたのでありますから、何處の誰れと云ふ事が分らぬ、俗にいふ「雨降つて地かたまる」の譬喩で、柳原家は是に於て納まり、遂に傳内兵衛親子の者は、浪々の身の上と相成りましたが、別に他に行くべき所もなく、廻町七丁目に來つて、道場を開くことになりました、柳原家浪人鈴木傳内兵衛といふ看板を掲げ、義正流の稽古を始め出しました、さて斯う落着が付いた上は、彼の妻の瀧江は、兄根來勘兵衛の方に預けて置く必要もないから、傳内兵衛は之れを引取りました、素よりこの傳内兵衛といふ仁は、これまでに、開いて居る先生でありますから、追々門人も入門に及び、殊に舊藩からも衆まつて來る、石るく、間に道場は盛大となつて参りました、何うもこの世の中には「釋迦に提婆」と申す言葉の如く

一方に一人の先生が出来る、果してまたその向ふを張る者がある
 同じこの越町の五丁目には、その當時一刀流の指南を致す筑波三平と
 いふ者がありまして、矢張り町道場を開いて、チヨツと二百名ばか
 りも門人がございます、その位あれば先づ結構です、當今私學校
 を開いても、百名以上の生徒があれば、生活は立って行くもので、
 二百といふ門人があれば、先づ盛大なものでございます、ところが
 俥内が門戸を張りますと、何しろ人間が温厚篤實、至つて物利かい
 質、殊に多藝な仁で、撃劍ばかりではない、軍學のお講釋をなさる
 或時は槍術の話もすれば、又火術の話もなさる、門人に取つては頗
 る利益で、暫くの間は大層門人が増へて参りました、然るに彼の筑
 波三平の門人等が時々途中なで出逢ひますと、甲「イヤ服部君、
 何處へ行つたのだ、乙「エ、チヨツと其處まで、甲「這回道場開きを
 した鈴木の方は如何ですナ、乙「イヤ如何どころぢやアない、好い先
 生だなア、神原家の忠臣で、この間天神下に於て、十一人といふ敵

を斬つて棄て、尤も御子息が手傳ひはしたが、八人といふ人を殺し
 た、これも忠義の爲めだといふ、なかく大したものので、拙者もこ
 の間から通學して居るが、その教へて下さる親切さ、實に日々に腕が
 上達するやうに思はれる、して筑波はこの頃如何だ、甲「サア、彼の
 仁は妙な人で、ヤレ生魚を持つて来た事がないとか、イヤ菓子折
 盒を持つて来たことがないとか首つて、賤しい事を言ふ客な先生だ
 乙「フウソク、それには引替へ、ア一遍傳内先生の許へ行つて見ナ
 折々は茶菓子を出して、お茶を下さる、吾々が辨當でも喫べて居れ
 ば、お茶など時々下さるのだ、それにお茶も番茶ぢやアないよ、
 チヨイとしたお茶が出るので、甲「然うですか、ム、ウ……」と詰ら
 ぬ事が噂になつて、二人減り三人減り、彼の筑波の道場の門人は、
 追々減つて来る、此方はそれに引替へ、鈴木の方の道場は、ますます
 盛大と相成つて参りました、「小人閑居して不善を爲す」といふ言葉
 の通り、三平は我道場の門人の減るのを見て、「一番鈴木といふ奴は

鈴 木 主 水

出會ッて見やう、五十以上の老体、何程の事やあらん」と今日しも
 立派に打扮ち、態々鈴木の道場へ出掛けて参りましたが、玄關にか
 りまして、三平頼まう市助「アイノ……誰方様で三平「エー、淵者、こ
 の近傍に道場を開いて居ります筑波三平といふ者で、先生の御高
 名を慕つて参りました、これを聞いて執事の市助は、奥室にこの事
 を申入れますと、傳内兵衛は早速出迎ひを致して座敷へ通し傳内、
 サア何卒此方へ、お初にお目にかゝります、未だ當處へ道場を開
 きまして日數もありませぬので、御挨拶にも出ませぬところ、却つ
 て御訪問に預りました、甚だ恐縮、サア何卒お進みを三平「イヤ只お
 訪問申したばかりではない、一本のお手合せを致さうといふ者へ、
 傳内「イヤそれは平にお断り申す、御自分と拙者とは、流名が違つて
 居ります、他流試合といふものは、お互ひにその聲價を落し、殊に
 勝負といふ噂の立つのも、甚だ不都合で、素より拙者は老人の身、殊に
 進も御自分様にお相手を致す程の腕もござらぬ、宜しく何卒その儀

鈴 木 主 水

はお断りを申上げます、三平「然らばお立合は出来ませぬか、傳内「平に
 他流試合はお断り申す門人となつて御稽古をなさる方なれば、失禮
 ながら御指南は仕つることとござるが、他流試合の儀は断然お断り
 を申す、承知をして呉れない、取合はぬ奴には叶はない、三平も
 致方なく、暇を告げ、悄然と立歸つて來ましたが、何か事はあるま
 いか知らん、考へて居るうちにその當時に麴町の八丁目、鍋島
 甲斐守様のお屋敷がありませぬ、一ツにこれを甲斐坂と名づける處
 へ、夜々妖怪が出るといふ噂、これ眞の妖怪であるか、或は人のな
 せる所業であるか、その邊は確乎なりませぬが、この妖怪の出ると
 いふ噂を聞いて、筑波三平この妖怪を退治んとして失敗を取り、却
 ヲて傳内兵衛に腕前を顯され、これが遺恨の基となつて、遂には市
 ケ谷月桂寺ヶ原に於て、果合に及ぶといふ、彼の三平妖怪の爲めに
 苦められると云ふ講談は次回に申し上げることと致し、チロツと一
 ト息。

鈴 木 主 水

この甲斐坂に毎夜妖怪が出て往來人を苦しめますが、その妖怪は他のものど違つて、折々これが爲めに殺される者があるが、首は宛然及物を以て切つたやうに、必ず首を斬つて仕舞ひ、さうしてその首を喫ふものか、その處にない、一最う甲刻過ぎて日が入らんとする時分からは、更に人通りもないので、頗る評判が高い、筑波三平はこれを聞いて「エ、一番その妖怪を退治んければならぬ、これさへ退治たんなれば、必らず我名前は上るであらう、然ある時には一ト度傳内に取られた門人も、當方に立歸つて来てその怨恨を晴らせるであらう」といふ考へを起しました、そこで或晩密やかに彼の甲斐坂に來つて、夜の闇けるを待つて居ります、丁度子刻も思しき頃はひになると、遙か向ふの方から、ノソリノソリといへば顔は少々黒みがつて居ります、赤い顔で、一頭髪といへば棕櫚

第三回

鈴 木 主 水

の毛の如き被髪、身には斯う大口のやうな物を着て、衣物は茶縹で宛然夜着か蒲團にでも仕たら好からうといふやうな、地合は分りません、格子縞の衣物、長やかなる大剣を佩み、猿田彦が渡御の時、先に立つて歩いて居る者のやうな姿で、鋒のやうな物を小脇に挿込み、何のことはない芝居の暗争場に出る山の神を見るやうな有様です、妙な奴が來たわい、さてはこれぞ變化ならん」と三平は大剣の柄に手をかけながら躍り出で三平「ア妖怪、確かに承はれ吾れは當處に道場を開いて居る、筑波三平といへる者である、汝夜々當處を徘徊なすがゆゑに、往來の人の妨害となる、依つて吾れ汝を退治んとして來たのである、左様に心得よ」と名乗を掛けて置いた、スパーリ斬込んだ、彼の曲者はヒヨリと体を躲すといふと、小脇に挿込んで居りました、録の柄を以て、ハツと拂ひ除けた、三平は一つの道場を開く位な先生ですから、弱くはないが彼の柄で拂はれるといふと、一身体に徹へるばかり、アル、ハツと擦へて、其處

鈴 木 主 水

へ挫と倒れた、起上らんとする三平の腕腹を、彼の石街を以てボツと突くと、「ム、ッ」と悶絶をして仕舞ひました、そのうちに夜もガリリと開けて参ります、往來の者は「オイ、こんな處に倒れて居る」不思議といふのはこれです、悶絶をした者が、子刻から曉方までその儘に居たならば、最う活を入れやうが、如何なる名醫が来て薬湯を與へやうが、蘇生をするものではないのです、當てられたのが子刻といふ頃はひだのに、夜が明渡つて、通りかよりの商人が「武士、旦那」と呼起すと、ムク／＼と起上つた三平、四邊を見ると、日が出で居る、立止まつた町人、旦那如何なすつたのです、旦那三平、ウ、イヤ身共は昨夜泥酔つて、此處へ倒れたと思つたが、それ儘寢て仕舞つたと見ゆる人、イヤ旦那、然うぢやありません、まい、昨夜は例の妖怪にやられたんでせう、この甲斐坂に出るといふのですから、貴郎は何處の方かは存じませんが、この江戸といふ處は、活馬の目を抜くといふ位ゐな奴が居る處です、一箱根から東に

鈴 木 主 水

は野暮と怪物はないなどい言ひますが、今この甲斐坂には妖怪が出て、天下の直參、旗本、さては大名の家來、その他浪人などが此處に來つて、酷い目に遭ふ奴が幾らもあるのです、矢張りその一人でせう、ア早くお歸りなさい、人が顔を見ると見苦なうございませう、言はれて筑波三平は、面目なげに落ちる大劍を拾ひ鞘に納めて、悄然と歸つて來たが、今夜こそはと思ひ、晝の間に体を休めて置き、同じく亥刻といふ刻限に、甲斐坂へやつて來た、今日は少し曇つて、今にも降出しさうな日和、今晩こそはと、一刀の鯉口を寛げ、待つて居りますと、果して例の刻限になると、ノッリ／＼やつて來た、それと見るなり、側へ進寄つた三平、「汝妖怪、昨晚は酷い目に遭はした、サア、三平が太刀の味ひを知れつ」と言ひながら、真劍を抜いて斬込んで參る、彼の妖怪は前に向つたと思ひますと、飛込みさま、彼の手にせる録を以て、利腕を一つ打つた、打たれて何かは堪るべき、三平又候一刀を取落し、起上ら

鈴 木 主 水

うとする所を、袂と腰に手をかけて、二三間も向ふの方へ取つて投
 げた、投着けられて、驚きながらも起直り、見ると晃々と光る眼で
 赤い顔に白い齒を出して、ム、ツとばかりに睨付けて居るその恐る
 しさ、ブルン、と身体も慄へるばかり、驚いた三平は、その儘一
 生懸命、立歸つて来た我道場、三平開ける、開ける、表戸を開ける
 この聲に弟の勘藏は、「エー兄上ですか三平、オ、いま歸つた勘藏へ
 エ何うも大層お顔色が悪うござりますが、變化退治は如何なりまし
 た三平、ソイツ、静かにしろ、戦々慄へて風邪でも感いたものと見
 て、寒くてならぬ、少し熱もさして来たやうだ」と言ひながら、そ
 の晩からドンと寝込んで仕舞つた、「犬虚に吠ゆれば、萬犬實を傳
 ふ」の例ひで、三平は「ト晩は夜が開けてから町人に氣を付けられ
 一ト晩はまた變化の爲めに驚いて逃歸つて来た、それが爲めに大熱
 で寝て居るといふ噂を立てられ、ますく、三平は面目なく、この頃
 は病氣と偽つて外出もせず自邸に就床で居る、これを聞く近所の

鈴 木 主 水

者は、さては怪物に祟殺されるであらうなといふ大層な噂、その
 他天下の直參、旗本であるの或は大名の家來であるのといふやうな
 者が、或は三日目又は五日目ぐらゐに、この甲斐坂に於て、取つて
 投げられた者もあり、中には首を咬切られて死んで居る者もあると
 いふ、鈴木傳内兵衛の道場へもこの噂が高うなりました、甲「杉本君
 噂を聞いたか、乙「う、聞いた、何うも怪しからぬ事ではないか、甲「
 サア行つて見やうではないか、乙「イヤ、君子は危きに近寄らずだ、
 甲「君は何でも引込思案だから可けない、何うも世の中に立つて名
 を揚げやうと思へば、少しやア斯う危険な事も爲なくつちやア可け
 ない、危ない橋も渡つて見なければ、名の揚るものぢやアない、一
 つ今晚は行つて見やうではないか」と杉本、根岸の二人が勧める
 ころから、いま一人田村愈三といふ男、「それぢやア拙者も行かう」
 と都合三名連れにて、當處を出たのが未刻過ぎ、半藏御門外の玉川
 といふ料理屋に登つて、盡から飲み始めました、甲「何でも君、戦

水主木鈴

争は兵糧が第一だ。乙如何にも然うだ」といふので、何しる壯盛り
三人は酒を飲んだ上に、飯の五六人前も喫つて、勘定をして出たの
は戌刻半亥刻前、彼の甲斐坂へやつて参りましたのが、最う子刻頃
で、今に例の變化が出るであらうと、待つて居るところへ、例に依
つて彼の大きな山神を見るやうな奴、ノックと出掛けて来たが
「ソイヤ變化が出て来た」と言ひながら、第一着に飛込んで参つた
田村倉三といへる者の腕首を取つて向ふへ投着けた、續いて杉本
根岸が引抜いて斬込んで来る奴を、引摺いではうり投げた、先に投
げれた田村は大刀を拾つて、また再び斬込んで来る、この時彼の曲
者は、腰なる大刀を引抜き、ヤツと拂つたその途端、田村の首はス
ハリ飛んだ、根岸、杉本の兩名は、その儘に致して、プーイッと
逆出した奴を、乗込んで参つて、同じくスハリ、到頭三人ながら
首を斬つて仕舞ひました、その儘で三つの首級を提げて、彼の妖怪
は何處へ去つたか、姿は見えずなりました、一夜が明渡りまするど、

水主木鈴

彼の甲斐坂を通りかゝつた者は、「ソイヤまた武士が殺されて居る」と
驚いて見ると、三人ながら首がない、誰れだ彼れだと噂のうち、紙
入の中に名前を記してあつたのは、四ッ谷鹽町に住居をして居りま
する、彼の御家人の田村倉三、そこでこの事を通掛りの者より、田
村の宅へ知らせせてやりました、田村の宅からは、早速人が来る、
に舟先生の許へといふので、鈴木傳内兵衛の道場へ、この事を申し
て参りました、そこで傳内兵衛も捨て置かれませんでした、彼の死骸
の側に來つて見ると、怪物に咬切られたと言ふ、これは齒で咬切つ
たのか、或は刃で斬つたのか、分らぬやうな者は武士でない、成程
それも糸か打紐のやうなものなら、齒で咬切つたのか、
か、よく切れて居れば、間違ふかも知れないが、如何な怪物にもせ
よ、人間の首を咬切つた跡が、刃物で斬つたやうな事になつて居ら
う筈はない、さてはこの三人の首は正に刃で斬られたに相違ない
者へましたところから、この先生留時の間、燕と見てお在で遊ばし

水主木鈴

たが「よ、ウ、これは變化ではない、何か武士の悪戯で、變化となつて試斬りでもするものと見ゆる」と見極めました、そこで検屍を受けて、死骸はそれぐの屋敷へ引取ることになりましたが、此方は傳内兵衛、宅へ歸つて参りますると、主水を呼びまして傳内「ア主水、實に怪しからぬ事が出た、到頭田村を始め三名とも殺られて仕舞つたが、今晩は一ツその變化退治に行かうと思ふ、主水「阿父さん、それはお止し遊ばせ、何うも怪しからぬことで傳内「イヤ然うぢやアない、何うも此方の考へるのに、それは變化ではないのだ、主水「へエ、では何でござりませう傳内「人間に相違ないと思ふ、今日までは噂に聞いて居つても、然のみ意にも留めて居なかつたが、三人までの門人を殺されたとして見れば、この儘には捨て置けぬ、兎角世に變化なと、思ふのは、發心の畏怖からだ、辻の地蔵が高入道に見ゆる事もあり、棕櫚箒が鬼に見ゆる事もある、これ等は皆な恐怖して居る爲

水主木鈴

めぢや、定めて甲斐坂に出る當人と雖も、通常の姿で往來をするのではあるまい、何か假面でも被つて居るといふものか、鬼に角異つた姿をして、そこで悪戯に試斬りでもするのであらうと思ふ、依つてこれは或は太平の御世に高祿を貰つて、何事も爲すこともなく、遊んで居る奴が幾らもあるで、御家人か旗本のうちで、遊んで世を送る奴等の所爲でもあらう、若し左様な事であつたら、第一には將軍家の御不徳にもなるし、また往來をする者の迷惑にもなる譯だから、異見を加へて改心をする奴なら重疊、若し改心の出來ないやうな者なら、天下の爲めに殺して仕舞はう、が、必らず爾は來るのではないぞ、此方一人参るから、與方の瀬江どのも側より瀬江「何うか左様な事はお思止りを願ひます、如彼やつて悴も心配を致しませぬし、また妾も心配でなりませぬから傳内「イヤ、然うでない其方の知る事ではない、一旦凭く決心をした以上は、他人が止めるから斷念るといふやうな此方ではない、凭く言はれて見ますれば、

水 主 木 鈴

妻子の者は止めることも出来ませんから「それでは成るだけお氣を
 お付け遊ばすやうに」と注意をされましたが、さて傳内兵衛は腹帯を
 して、身輕に打打ち、草履を穿いて、その夜亥刻頃にはいふ刻限
 を計つて、道場へ出ました。僅か二三町の間、隔つて居ります
 彼の甲斐坂に來つて、片傍の樹の根盤に腰うらかけて待つて居りま
 すると、果して子刻も過ぎるといふ頃は、彼方からノック來た
 のは、例の山神の姿を見るやうな男。「ハ、ア、推量に違はず、悪戯
 をするのに妙な姿になつて居る」と思ひながらも、傳内兵衛は熱と
 見て居ります。所へ彼の曲者はやつて來たが、突いて居ります。誰
 鈴を横に置いて、誰れか來らぬかと、左右を見て居る。が、誰れも
 來ない、怪物も手持無沙汰で欠伸をして居る。仕済ましたりと横合
 より、ツカ／＼と出でたのは例の鈴木傳内兵衛。「曲者、汝は如何
 なるものなれば、當所に來つて真民を害めるか、ア其方は落士で
 あるか、浪人であるか、但しは將軍直參か、何にもせよ甚だ不都合

水 主 木 鈴

なことである、左様な悪い戯をするものではない、早く立去れ、速
 かに立歸れ、この一言を聞いて、彼の曲者は片傍に置いたる鈴を
 おツ取つて、リツ／＼と線出しながら、傳内兵衛を目掛けて、サッ
 と突いて參つた。「心得たり」と此方は太刀を抜いて丁と受け、彼れ
 が鈴の真正中を、スパーリ斬落した、ヤツと言ふなり此方も太刀を
 抜いて、チャリンとばかりに打合はせた、丁發矢と打合つたが、此
 方も然者、傳内兵衛は「斯かる腕のある人間を殺すといふのも惜し
 きものである、願はくば取押へ、異見を加へてやらうと、今しも左
 の手が隙くや否、例の起倒流の柔術、彼れが側へ入身になるとその
 儘、脇腹を望んで一つ當てた、アツと言つて仰さまに倒れたるを、
 大刀を投捨て引起し、ム、ツとばかりに活を入れ、息吹返す顔を見
 ると、實に何うも面は眞紅で、汚ない顔でございませ、彼の者は目
 をキヨロ／＼剝いて居るを、熱と打睨めながら傳内兵衛は「イヤ其
 方は何者である、吾れはこの近傍に道場を開き居る、柳原家の浪人

鈴 木 主 水

鈴木傳内兵衛と申す者である、この中から良民に害を興へ、武士の首を斬りし者は其方であらう、姓名を打明ける、何者であるか、この時彼の者は、潜然と涙を落して、思はずもその處に兩手を支へ、男ア、先生、今日までは我手に立つ者は一人もなく、高慢自負の餘り、實に拙者恐縮の外はござらぬ、拙者は出羽山形の浪人にして、井上牛太夫と申す者でござるが、實は手前は常陸國笠間に於て成長ました井上六郎左衛門といふ者の子でござつて、永年の間浪人をして、出羽山形に参り、暫しの間山形侯に仕官を致し居りましたが、仔細あつて浪人を致し、その後といふものは劍道修行に廻り居りました、したが、何れに於ても我手に立つ程の者はなく、仕官に及ばんとすれど、或は百石二百石、又は五十石なきといふ小祿を以て抱へやうといふ、父の臨終の際の遺言にも、牛太夫よ、武家は五百石以上ならでは武士とは言はぬぞよ、大名に仕官をするなれば、五百石以上

鈴 木 主 水

で仕官をせよ、成るべくは小身大名に仕官をすな、然りながら徳川には付くナ、徳川は先祖代々怨恨ある家筋であると申されました、それから後には薩摩國或は黒田、細川と九州の大名を訪れて見ました、が、先方に眼のないのか、拙者に運のないのか、抱へやうもして呉れせん、その不器不手が固まつて、この江戸表に参り、青山六道の辻に假住居、些か亡父が遺し置いた金子もござるがゆゑに、別にこれといふ家業をせずとも、また仕官に及ばずとも、五年三年食ふことには困りません、それ等が爲めに、晝の間は酒を喫つて寝ね夜になつてア、往來をするに、晝の間は酒を喫つて寝ね出た狸が出て化けたといふ噂を聞いたを幸ひに、往來なす徳川直参の者には怨恨あるゆゑ、彼れ等を斬倒し、首をその儘に置かば、刀を以て斬つたといふ事が分るがゆゑに、首は悉く携へ歸つて、人知れず土中に埋め、或は墓原へ棄てたのもあります、それが爲りに切口は綺麗だが、變化が咬切つたであらうといふ噂の立つが面白さ

鈴 木 主 水

に、毎夜この處に参り、或時は取つて投げ、いよく敵對ひ來り、少し骨しい奴と見る時は、忽ちに首を斬つて棄てました者、これまでに數十人、然るに御身のやうな豪傑に出逢つたのは、井上平太夫が運の盡でござる、サア鈴木氏、一人を殺さば、その身命を取られるは天下の掟、助からうとは存じません、速かに我首をお勿ね下され、傳内イヤそれは大きに井上心得違ひである、必らず然ういふ事を言ふナ、徳川家が氣に適らずば、他の大名に仕官をする時節もあらう、また仕官をせずとも、足下ぐらゐの御器量あらば、町道場を開いて、その得意とする流名を人に傳へ遣すならば、流名も弘まり従つて名も揚る道理、その餘暇を以て、先祖の訪吊を致されたらば死したる祖先は草葉の蔭にて喜ばれることであらう、依つて速かに敗心いたさずばなるまいと色々といひ聞かせましたが、なか強情の半太夫、從ふ様子もない半太イヤ何と仰せられても、我命あらん限りは、人が斬りたくなり殺したくならず、吾れ死なば再び

鈴 木 主 水

人を殺す事もあるまい、慈悲でござる、情けでござる、足下のやうな豪傑に首を斬つて裁けば、千僧萬僧の供養、名僧智識の引導より吾れ等が爲めには結構なりと頑として動かさない、仕方がないから彼れに細をかかけて、傳内兵衛は、早々これを引立て、その當時南方の町奉行濱田志摩守の許へ参つて、この次第を述べました、濱田志摩守は當人を受取り、牢内に繋いで置いて、この事を早速大目附へ申入れることになりました、そこでこの事を城中へ申出して、評定と云ふことになりましたが、この井上平太夫は、當今から申せば人命犯人殺の罪のある者でござりますすがゆるに、これは到頭獄門にも處すべきのところ、武士のことゆる格別を以て、斬罪と云ふ事になり、首級を懸さすに置かれたのは、上の憐愍、そこで傳内兵衛の方には諸人の愛ひを救ひ、飽くまで彼れに異見をして、自から殺さす、役人に引渡したるは、誠に隠密の致方、元榊原家を浪人致したのも忠義の爲め、この頃に至つて多くの門人を集め稽古をするところ、

水主木鈴

なか／＼感心なもので、これを以て召抱へに相成るも決して不都合
 はあるまいといふので、老中松平伊賀守の發意に依つて、遂に榊原
 家に於ける五百石といふ元高を以て、四ッ谷鹽町に屋敷をたまはり
 將軍直參と云ふ事になりました、與方の歡喜、主水の喜悅は如何ば
 かり、榊原家の元の御藩中方は、實に結構な事でござるといふので
 追々祝ひの品を持つて参り、門前市を爲すの有様、然るにこの事を
 聞いた筑波三平は、「イヤ思々しい奴、さては先達てのは變化ではな
 かつたか、井上平太夫といふ浪人であつたか、ア、惜しい事をした
 此方が彼れを取押へたならば、その功に依つて、將軍直參にもなれ
 るものを、思々しい事である」とは思つたが、腕前は勝れて居るわ
 勢ひはあるわ、なか／＼鈴木に抵抗することには出来な、只残念と
 切齒を致して居るとのみでございます、兄を思ふ弟の勘藏は、機も
 あるならば、彼れに害を與へ、兄の怨恨を晴さんものをと考へて居
 る、思はずも小一年、茲に主水光信は明けて十八歳、劍術は最うこ

水主木鈴

の頃は小笠原へ折々通ひ、父の道場を開いて居る時分には、宅で代
 積古の一ツもして居りましたが、直參旗本と云ふことになりました
 から、其の身も何や彼やと見習をして置かねば、父の家督を相続し
 たしました時に、また殿中の用事も達せまいと、そこで行儀萬端を
 の作法の稽古に、この當時牛込の矢來下といふ處に住居をして在ら
 つしやる小山半齋といふお同朋にて七十餘歳、この仁は元祿年間の
 彼の吉良上野介と云つても可い位な仁で、式作法を辨へて居りま
 して、詰らぬお同朋ではありますけれども、物職でございしました
 この仁の悴が當時毎日登城をして御用を達して居りまして、今は自
 身は隠居の身の上でございます、此仁が折々來つて教へもし、また
 此方からも出て行つて習ふといふ、今日しも主水は中間の市助を伴
 れて、彼の小山の許へ参つた歸途、牡丹畑といふへかゝつて参りま
 すと、黒木綿の紋付には、瀧織の袴を穿ち、長大小刀を打込んで、
 朴木齒の下駄を穿いて、ガラリ／＼とやつて來た一人の武家、行違

水主木鈴

ひさまに主水の腰なる大剣に向け鞘當をした、ハツと主水は驚くうらに武士待てッ、白晝鞘當を致して無禮な奴だ、主水「これは失禮を致しました、拙者は避けん」と致して居りましたのでござるが……武士、黙れッ、貴様が避けて居たのを此方が當てたと言ふのか、怪しからぬ事を申す奴、見れば髪形といひ、供人を伴れて居るからは、相當の身分のある者であらう、姓名を名乗れ、主水「イヤ、姓名を別に名乗る程の者でも……武士、黙れッ、姓名のない者が現世にあるか、其方が名乗らぬければ、拙者から名乗ってやる、貴様は四ッ谷に住居をする、鈴木傳内兵衛の梓主水であらう、主水「して拙者の姓名を御存じの御自分には武士オ、麴町五丁目に住居をする筑波三平の弟勘藏だ、汝等父子には遺恨あり、今日の鞘當、尙更以て勘辨相成らぬ、サア果合の勝負を致して呉れん、卒さ來い」と着て居る羽織を脱ぎまして身構へに及んだ、流石の主水、背後の方に退り、羽織を取って脱ぎ捨て、手早く一刀を引抜き、主水「市助、必らず怖へることはない、

水主木鈴

此方は飽くまで禮を盡して詫びるといへど、先方より斬込んで來る上は仕方がない……サア身不肖ながら主水がお相手を申す」と當年長ッて十八歳、旗本中に於て評判の高い主水、此方は二十三歳、血氣壯んの若者、處は何しる牡丹畑、互ひに丁々發矢と斬結んで居る、「ソーラ喧嘩だ、武士同士の果合だ」と物見高いところの江戸表、見るくうちに黒山の如く人が集つて参りました、片傍にあつた市助は、助太刀もならず、手に汗を握つて見て居る間に、稍暫時渡合つて居りましたが、彼の主水の力や勝りけん、十七八合も打合はせなかと思ふと、躍り込んで彼れが利腕をスパイロ「アッ」と言ひ、さま勘藏は、背後さまに倒れる奴を忽ち近寄り、その首を斬落した、主水の般血を拭つて一刀を鞘に納め、主水「サア市助、暫時の間その死體の番を致し居れ」とこれから當處の辻番所に來つて、事の次第を述べ置き、市助を伴れて悠々と己が屋敷へ引取りました、サア世間の評判が高くなりました、とてころが筑波三平、現在の弟を殺さ

鈴 木 主 水

れて見れば、今は彌増す無念、逆縁ながら舎弟の仇敵を討取り呉れんと、改めてこれより決闘状を附け、茲に一つの騒動を惹出す、市ヶ谷月桂寺ヶ原の果し合といふお話し、次の回に委しく申し上げます。

第 四 回

さて人間の状態は、災禍が幸福となり、幸福が災禍と變する事ありますもので、傳内兵衛親子は御家の爲を思ひ、色々盡力を致しましたが、遂に悪人を滅ぼして後、功ありながら永の御暇となり、永年廻町に浪宅を構へて居ります間に、彼の井上といふ發狂同様の亂暴人を取押へましたが爲めに、將軍家の直參となつて、四ッ谷町に屋敷をたまはり、同じ五百石とは申しながら、陪臣とは事變り天下の直參、別段にこれといふお役もございせんから、これまでの門人も來つて稽古を願ひ、また旗本のうちでも、武藝を好む者は

鈴 木 主 水

來つて入門をするといふやうな譯で、別に道場を拵へまして、御指南役も同様、従前に勝つて盛大に暮らして居ります、或日のこと〇「エお頼申します、お頼申します」二三度聲をかけた者があります、家來共は何處へ参りましたか居りません、傳内殿は今日は門人も來ず、退屈の餘り、書院に來つて軸を懸け替へ、或は花瓶の水などを入替へ、座敷の裝飾をして居ります、頻りに玄關にて案内を乞ふ者がありますが、誰れも居りません様子ですから、自ら玄關に來つて御覽なされると、見馴れぬ中間も付かず町の者でもない、無頼漢の子分ども云ふやうな男が、文匣を携へて立って居ります、〇「エ、鈴木様のお屋敷は此方でございますか傳内、鈴木は當方だが、お前は何處から來た、〇「エお手紙を持参いたしましてござります、若旦那主水様は在らつしやいませうか傳内、主水も居ります、何方からお出でだ、〇「廻町から参りましてござります、御返事を承はりましたうござります、傳内左様か、此方へお渡し」と

鈴 木 主 水

女匣を受取つて中を抜いて見ると、鈴木主水殿へとある、裏を見ま
 すと左封、筑波三平とあります、ハッと驚いた傳内兵衛、伴の名
 宛ではあります、差出人は波筑三平ですから、早速糊封を解いて
 讀下して見ます、舎弟勘藏を牡丹畑にて撃たれ、心外に相心得
 る、これに依つて武士の意氣地、果合勝負つかまつりたく、今晚月
 夜を幸ひに、市ヶ谷月桂寺ヶ原に於て、真劍勝負いたしたく、子刻
 の時計を合圖に御出張下されたいといふ、所謂決闘状、莞爾笑つた
 傳内兵衛、「イヤお使ひ御苦勞でござる、委細承知いたしましたとお答へ
 下され、〇へエ、それで宜しうござりまするか傳内、返事は口上
 だ、委細承知した、お指圖の場所へ罷出づるであらうと申して下さ
 れ、〇畏まりましたとござります」と使ひは立歸る、彼の番面はその
 儘懐中して自分の部屋へ這入り、「ア、さては過日悴主水の爲めに殺
 された勘藏の怨恨、子を思ふ親心、弟を思ふ兄の了簡も異りはない
 彼れは弟を殺ひれて残念に思ふならん、吾れまた二十歳未滿の悴を

鈴 木 主 水

真劍勝負に遣ふことは出来な、こりやア拙者が参らう、彼
 の三平を斬殺せばそれまで、萬一不運にして彼れが及にかゝつて、
 吾れ相果つるども、悴が跡にあれば、鈴木の家名は嗣ぐであらう、
 この番面の我手に入りしは幸ひ、これは拙者が行くに限る」と自問
 自答、早速硯引寄せ、詳しく書面を認め、右の決闘状をその中に入
 れまして巻納め、机の抽斗に納ひまして、その日夕景の御飯も済み
 機嫌よく臥房へ入ることになりましたが、亥刻少々廻りといふ頃は
 ひに、寢床を立出で、支度に及んで傳内兵衛、彼の市ヶ谷月桂寺ヶ
 原へ乗出して参りました、丁度十六日の月は見々と朗々、波つて居る
 何しろ名代の原廣い處でございます、その以前は月桂寺といふ七堂
 伽藍のお寺があつたのを、取拂つた場所でございまして、これを俗
 に月桂寺ヶ原と名づけます、何せ真劍勝負に参つた身体、卑怯者の
 筑波三平、一人ではあるまい、必らず助勢があるに違ひないと思ひ
 なから、前後左右に眼を配り、段々來て見るといふと、未だ誰れも

水 主 木 鈴

来て居らぬ様子「さては早かりしか、子刻の鐘を合圖と申ししたが、
 ゆる参ッたが、未だ子刻にはならないか」と思ふ折柄、遙か遠音に
 開ける鐘が、ホウーンホウーン「ハ、ア、丁度子刻ぢや、最上三平に
 は参るであらう」と松の根盤に腰うち掛け、待つて居りますとこ
 ろへ、
 御十字に絞取り、取立を高くと取上げ、その上より人目を避ける爲
 めか、羽織を着て居ります彼の三平「オ、其處に居るは鈴木傳
 内殿ではござらぬか傳内イヤこれは絶えて久しく御面會も致さぬが
 筑波氏でござるか三平ア、今日使ひを以てお知らせを申したのは、
 賢息主水殿に宛てた事でござつた、然るに御自分が此處まで御出張
 に相成りましたる譯は傳内然れば、貴所よりお送りには相成つたる御
 書簡が、圖らず拙者の手に入りました、宛名は倅には候へども、御
 急のやうに存じ、可憎倅も不在でありました、宛名は倅には候へども、御
 たしたる處、過日御舍弟勘藏殿と倅主水どが、社丹知に於ての立合

水 主 木 鈴

遂に倅の爲めに勘藏殿が撃たれしは、兄の身として残念なるがゆゑ
 に勝負どの書面の趣、一應御有りのやうには候へども、御身が弟を
 思はれるのも、拙者が倅を思ふのも、兄弟親子の情に於ては、敢て
 異なるものでござらぬ、子に代る父の傳内、不肖ながら今宵の相
 手を任つらんと、それゆへ道々推参いたしたることとござる三平成
 程、イヤ親の名代を子が勤めると云ふ事は聞きましたが、子の名代
 を親が勤めるといふのは、近頃珍らしい話、併しながら問答は益な
 し、折柄罷越して、立合勝負を申入れたる砌、他流試合は謝絶するとの
 お言葉、珍らしい其劍勝負といふので、實に此方に取つて喜びの至り
 試合、時刻移り妨げあつてはならぬ、傳内殿支度をさッしやい傳内言
 ゃア時刻移り妨げあつてはならぬ、傳内殿支度をさッしやい傳内言
 んにや及ぶと、此方も羽織を脱ぎ捨て、下緒を取つて裨に絞取る間
 に、はや三平の方は、支度は充分と見せ、懐中より致して手拭を取

出し後顔巻、彼の大刀を抜いて、用意の構身へに及びました。此方は心静かに背後へ飛退つたる傳内は、「卒さ來れ」と抜合はせ、丁々發矢、暫時の間は斬合つたが、餘程腕前が遠ひます、充分斬込ひ腕はありながら、傳内の心裡では「吾れも今は天下の直參、無禮討は構はぬやうなもの、彼れも町道場を開き居る先生、願はくば胸打ちを以て彼れを押へ、誠めて置いたならば、國家の爲めにもなるべきもの」と思考へました。總て立合は遠慮勝ち、此方は怨恨ある傳内兵衛、件主水は亡弟の仇敵と、色々考へます。此方は一生懸命、劇しく斬込んで参ります。到底及はぬ、そこで三平も然る奴です。此方から見れば、三四間は離れて居たものが、五間十間ハツと斬込むと見せ、傳内の受ける呼吸を圓つて、彼方へドシと進出した。傳内、車性でもらう筑波三平、決闘状を附けてこの處へ罷出でながら、敵に背後を見せるといふ事があるか、返せッ戻せッ」と追込んだ。此方は何しろ三十臺の血氣狀ん、此方は早や五十を過ぎ

ての老体、尤も立合の間は、一刃術といふ術がありすから、老若の差はあります。三平から見れば、三四間は離れて居たものが、五間十間と段々後れて参ります。傳内返せッ、待てエッ」と呼はりながら一丁ばかり追込んで来る。彼れは松樹の下を潜つて逃げる。それを追行く、どころを松樹の上に乗れて槍を持つて構へて居た三平の門人富田喜助といふ奴が、二間の長槍をかぶつて置いて、上からアッ突いた。狙ひ違はず傳内の肩口へ、四五寸ばかりも突込んだ。アッと不意を打たれて倒れる所へ、この聲を聞付けたか、取つて返した筑波三平、「傳内覺悟に及べ」と言ひながら、スパーリ斬込んだ。突傷一ヶ所斬傷一ヶ所、重傷を負ひし傳内兵衛は「ヤア卑怯なり未練なり」と呼はりながら、ドツと倒るゝを松樹の上から下り來つた。富田「先生、三平オ、富田、御苦勞であつた」と二人掛りて一人を殺し、得々然たる有様。此方は齒を咬緊り、無念々といふうちには、

水主木鈴

終に傳内兵衛は息は絶果て、仕舞ひました。然るに彼方の松樹の上
 此方の松の樹から、三四名の門人、各々長槍を携へて下りて参りま
 した。が門人先生、先づお目出度うござりました。三平「イヤ各々御苦勞
 實に何うも拙者は怨恨がこれで晴れたといふやうなものでござる、
 御覽下され、義正流の達人どの平生の高慢も、思くなりませすれば實
 に哀れなものでござる」と息の絶れた傳内の髪を掴んで引廻し、
 弟の怨恨である、足を上上げて蹴倒し、或は痰唾を吐掛けて喜んで
 居る。お話かはって此方は主水光信は、今宵寢床の裡に居りました
 が、何うも胸騒ぎがして寢られませぬ。主水「ハテナ、今宵のやうな心
 持の不快、晩はない」と剛へ参りました。が、大便秘は通じない、小便
 と雖も、の些か主水「何うも心持が不快い」とまた再び歸つて参り
 寢床に這入る、寢られない、そのうちに「ウー」と鳴るのが子
 刻、同時に奥室にありませぬ時計が、チン／＼と子刻を報じた
 主水「ア、最う子刻、阿父上が兼ねぬ、仰しやうした、ア、何とかいふ

水主木鈴

藥は陣中で用ゐるもの、心持悪しき時分には、これを服れば精神が
 爽快になると仰しやつて、一度戴いた事もあつた、お藥でも戴いて
 少し氣を晴らさう」と我居室を出て、親父の寢所へ参り、襖越
 しに主水「阿父様、阿父様……ア、熱くお就眠なすつて在らつしやる
 御覽あそばせ」と襖を開いて室内に這入り、行燈の燈火は薄暗くな
 つて居る、父の枕許に來つて見ると、此は如何に眠の聲、主水「オヤッ
 阿父様は何處へ行らつしやつたであらう」とそこで剛へ参つて見る
 居ない一室隔つて向ふが母の寢所、「若しや母さまとお話でもして居
 られるのではないか知らん」と母の寢所へやつて参りました。が主水、
 母さま「瀧江「ハイ、主水か、主水「阿父様は瀧江「イヤ、お在でよはな
 い、主水「如何あそばした、今お部屋を見ましたが在らつしやいません
 剛へでもと存じ、参つて見ましたが居られませぬ、瀧江「如何したのだ
 今頃、主水「私は氣分が不快いござりまして、それゆゑお藥を戴き
 たいと思つて参りました、在らつしやいませぬので、瀧江「ハテナ」

水 主 木 鈴

と忽ち起上ッて、座敷は廣うございませぬが、それぐ調へて見たが
 居りませぬ、母親の瀧江の何となう心配、瀧江お薬は阿父様の
 手匣の裡にありはせぬか、併しなから夜分になつてお姿の見ねの
 は不思議である」と母子共、彼の傳内兵衛の座敷の裡を見て居る
 うちに、机の抽斗が少く開いて居る、若しやお紙入の中にでもと
 抽斗を開いて見れば抑も如何に、主水殿、傳内といふ一通の書面
 驚いた主水は「母さま、父上よりの御書面でござります、瀧江おや、
 如何したのだらう」といふので、披いて見ると、ハッカリ落ちたの
 は、例の決闘状、鈴木主水殿へ、裏には筑波三平、中を讀下して見
 ると決闘状、そこで父の手紙を取つて、行燈の燈火で讀下すと、斯
 かる書面が参つたが、其方は未だ若年、若し汝をして彼れが爲めに
 殺されなば、鈴木の家名は何者が嗣ぐ、依つて此方は老人のことゆ
 え、爾に代つて市ヶ谷月桂寺ヶ原へ参り、首尾よう三平を斬殺さば
 天下の憂ひを除く道程、萬一運拙なくして、彼れが爲めに我命終り

水 主 木 鈴

なば、其方我家名を嗣ぎ、家の榮えを見るやう願ひ、年老れる母の
 身には、汝充分に孝養を盡し呉れよといふ、念の入つたる書置でと
 さいます、主水母さま、御覽あそばせ、斯様な次第、瀧江「アそれは大
 變な事になりました、何うしやう主水、主水何う斯うは申して居られ
 ません、子刻の時計を合圖といふのでござります、今鳴りました
 のは子刻の時計、また寺の鐘も子刻を報じました、今から参つても
 間に合はぬことはござりますまい、私はこれより現場へ参り、父上
 に助勢を致し、彼の曲者を討取ります、跡をお願ひ申す」と言ひな
 がら、寢衣の上、羽織を着け、股立を取上げ、草履穿く間もあらば
 こゝろ、足表洗足の儘飛出した、驚いた母親は「市助、左内は居るか
 市助」と給人の寺本左内、中間の市助を呼起しました、兩人はこれ
 を聞くと、「ソレ、主君の一大事」と左内は大剣を佩み、お玄關にある
 槍を擔ぎ、中間市助は、平生挾して居る木刀では間に合はぬと、盛
 所にありました、横割を引摺いで、後に續いて駆出した、主水は宛

然、市を飛ぶばかりの勢ひ、彼の月桂寺ヶ原に來つて、月明りに透かして見ると、向ふの方に四五人の者が、何か物語りをして居る様子、何者ならんと思れば、これなん見覺ぬのある筑波三平、及び彼れが門人共でございますから、主水「ヤ、其處に居るのは三平ではないか」と聲をかけた、此方は回首つて見ると、兼ねく、怨恨ある主水でございますから、三平「オ、此は幸ひ、父傳内を殺したる上に、梓主水までこの處に來るといふのは、實に此方の爲りには何よりの都合ッ、各々、油断をするナ」と言ひながら、皆々左右に分れる、主水は驅來つて見れば、此は如何に、般血に染みたる唐紅、父の死骸を見らるや否、非常に驚きました、併し父の死骸を見て居る間合はありません、主水「さては三平、汝が爲めに父は殺られたることであるか、さ亡父の仇敵、覺悟に及べ」と言ひながら、一刀振りかぶり、斬つてかゝつた、主水は何しる非常の勢ひ、兼ねて義正流の見返りの傳法といふ手を以て、前なる三平と斬合はして居るうちに、背後から

乘込んで來た一人の門弟、市原太助と名乗る者を、後さまにスパーリ、斜に斬つたるその手際、肩口から致して横腹へ、斜かひに斬り落した、血煙立つて倒れる、前にあつたる彼の三平は、この勢ひに驚いたか、躊躇して居る間に、また斬込んで來るその早業、父に懸る主水の勢ひ、此は叶はじと逃出す、主水「待てエ、返せエ、返せエ」と追込んだが、彼れは逃足はやく、主水は五六面ばかり後れて居る所へ、先に傳内を殺したる富田喜助といへる奴、また槍を捻つて來るのを、一回首つて置いて、槍の中央を斬落し、亡父の仇敵と知るや知らずや、手許に寄るなり、同じく彼れが利腕を斬り落した「ア、一之」と倒れる奴へ乗しかゝつて、首を發矢と打落し、一ト息吐いて向ふを見る間に、最う三平の影は見えず相成つて仕舞ひました、主水「待てエ、三平」と呼はつて居る所へ、家來の左内と彼の市助の二人が「若様々々」と呼はりながら、乘込んで來る、この聲を聞いて、この場に來合はせて居りました三平の門人の輩は、此は叶は

しとや思ひけん、路を分れて逃出したることわざいすから、主
 水は足指なして残念がりましたが、仕方がない、兎に角父を殺した
 者二人まで、此處で討取りました、そこで夜の明けると、父の死
 骸に取着いて歎いて居りました、仕方がない、やうく左内に父の
 死骸の番をさせ、市助を供に伴れて、組頭川添相摸守の許へ、この
 事を届けると、早速筑波三平の浪宅へ彼の麴町に來つて見ると、逃
 足はやい曲者で、昨夜一度宅へ歸つたものか、但しその儘逃去つ
 たものか、最早居ない、素より當人は浪人の身で、弟勘藏は先に殺
 され、妻の不在者、そこで目附役人が出張の上、町役人と立合をし
 て、この家は關所、筑波三平は八方へ手當になりましたが、皆目分
 りません、また傳内の死骸は、悴主水に下し置かれましたが、深川
 の淨心寺へ埋葬しました、門弟二人の死骸は、千住骨ヶ原へ棄てると
 云ふことになりました、母の流江の悲歎は大方なりませんが、出來
 たる事は致方がございませぬ、改めて主水は敵討の儀を願出しまし

たに付き、御老中評定の上で、特に道開御證文といふものをたまは
 りました、よく皆道開と云ふことを誰れしも言ひますけれども、こ
 れは敵討の免狀ではない、詰り番所關所その他何處を通行しても苦
 しからぬといふその御許可なのですが、主水にたまはりましたのは
 何處に於て仇敵に出逢はうとも、立派に仇討の出來るので、將軍御
 直筆同様の品でございませぬから、平常人の貰へるものではございま
 せん、流石は天下直參の旗本なればこそ、この御證文をたまはつた
 のでございませぬ、そこでそれ、召使ひ居りまする家來には暇を出
 し、母は脇坂の藩根來の許へこれを預けることに致しまして、只家
 來の市助のみを供に伴れて出立、門人或は旗本など、多くの人が見
 送り呉れます、迎人も人を殺した奴が、繁華の地に居らう道理もな
 い、必らず淋しき處を往來して居るであらうといふのが主水の考へ
 珠に御宗旨のことですから、甲州の身延山に參詣をして、中仙道へ
 と路を變へまして、段々驛々或は城下なを充分に取調べました、が

水主木鈴

何處へ参りまして、三平に似たやうな者もございませぬ、今日しも美濃國加納といふ處まで出掛けて参りました、尤もこの加納へ来るまでの間に、餘程暇取りました、それは寺々を参詣をして、亡父の法事をしたり何か致して居りました、少し月日が遅れて居ります、さて加納の棒鼻に酒肴一膳飯などいふ看板が出て居ります、誠に庭前の綺麗な宅で、田舎の飯屋にしては、上品に出来て居ります、主水市助、空腹に相成つた、食事をしやうではないか、市助「左様でござります」と其の宅内へ這入り、暫時の間休息をして居ります、下女が「旦那方、御酒を差上げませうか、御飯に致しませうか、主水「左様、酒は餘り嗜まぬが、一ト銚子だけ持つて来て呉れんか、下女「はい、お銚子へは、主水如何な物が出来るか知らぬが、都合に依つて何うも飯も一緒に欲しいと思ふ、下女「はい、畏まりました、とござります、そこで醋の汁、鰻、尤もこの美濃邊は、鰻の安い處ですが、併し東京や大阪で喰べるやうに、逆も旨しい料理は出来ま

水主木鈴

せん、ハ、と音がして、殿と間違へさうな鰻、海のない國ですから、川魚は多うございまして、三三種の肴を持つて来た、市助は少々飲めますから、彼れに附合つて、二三杯も主水は飲みました、彼は食事となりました、と、こゝろが座敷を見ると、先づ六七十位、あちらか、釀を定めて熱く見れば、八十も越して居やうか、近付いて見れば九十餘り、熱々見ると百の土を越して居やうといふ、年齢の数の分らぬ老爺、細身の太刀を傍に置いて、小さな猪口で舐める如くに、ナビくと酒を飲んで居ながら、熱と主水主従に目を着けて居ました、餘程酒が廻つたものと見ゆ、老人「ア、向ふに居られる若い武家、失禮ながらお言葉をかけます、御自分遠御主従は、江戸の方のやうぢやが、江戸か、主水「はい、これは御老人、御尋ねに預かしまして、仰せの通り江戸の者でござります、老人「ア、何うも身体の拵装が江戸のお方らしい、失禮ながら徳川家旗下でござりますか、將軍御直参か、主水「はい、不肖ながら徳川家旗下でござりまして、老人「ハ、

ア然うか、お旗本かナ、御家來を伴れて劍道御修行か、贅澤なもの
ぢやナ、但しは神社佛閣を御参詣でもなさるのか主水「エー仰せの如
く、不調法ながら劍道修行に廻りまするもので老人「ハ、ア然うか、
修行といふのはナ、業を修めるのぢや、大身かは知らぬが、僕を伴
れて往來をするやうではならぬ、學問をするには益雪といふ事があ
る、何も錢のないのを自慢ぢやアないが、益を築める夏の夜、雪
來ねて燈火に代へる冬の夜、然ういふやうに苦學むといふのが即ち
修業ぢや、武術でも軍學でも、修業する者が軟かい物を身に纏ッ
て、僕を伴れて、旅宿に泊つて修業をするやうでは可かない、ハ、
、、、悪口を聞いてお氣に觸へられナ、年老といふものは、色々な
事を言ふものぢや、併し御流名は何を學ばッしやる主水「ハイ、義正
流を學びました老人「ナ、義正流、ム、ウ、珍らしい流義ぢや、好い流
義ぢやが、多く弘まッて居らぬ、神陰流であるの一刀流であるのと
いふやうな流義は、大層世間に弘まッて居るが、義正流といふもの

は、山形家に於て編出した流義、誠に結構だが、多く先生家がない
マア私は江戸へ參つてから、然うぢや、殆んど二十年からになるが
ム、ウ、江戸に小笠原十郎右衛門、鈴木傳内兵衛と云ふ者があつたが
義正流を學ばッしやるからには、その兩名を御存じであらうナ主水「
ハイ仰せになりました小笠原十郎右衛門は拙者が爲めには師匠、ま
たその鈴木傳内兵衛と申すは、手前の實父にござりまして、私は同
名主水と申しまする者で老人「エ、ッ、ナナニ……マア此方へ參ら
ッしやい、其處と此處とに離れて居ては話が分らぬ、參る筈ぢやが
老人の身の御無禮をする、此方へお出で下され、御家來その香を此
方に持ッて來るが好い……ア、珍らしい人に出遇うたことぢや、お
幾歳ぢやナ……ナニ十九歳、ム、ウ、若いナ、然うか丁度お身が生れ
た自分の前後であつた、御身の親父に會つたのぢやが、して傳内殿
はお壯健かナ主水「ハイ、父はこの程歿しました老人「ナ、死んで、病
死であらう、で、幾歳だつたナ主水「エー漸く五十五でござりまして

鈴 木 主 水

老人「五十五、ム、ウ乃公とは半分遠ふ主水「へエー、失禮ながら先生は老人「ハイ、私は神免重助と云つて、當時大阪に住居をする者ぢや私は當年百十歳になる主水「へエー、先生の御高名は兼ねく、承はり居りましたが、ア、御壯健なことで重助「ハイ、父「母の手許にあつた時分の事は知らぬが、十五歳で父の手許を別れてから、今日まで風邪感いたこともない、この四五年前までは、齒が一本も脱けなかつたが、二三年前から齒が二三本脱けて心持がわるいが、未だ眼鏡は要らぬ、して小笠原は如何ぢや主水「ハイ、先生は相變らず盛大に致して居られます重助「ム、ウ、お前の父は國許で亡くなつたか江戸で亡くなつたか主水「未だ先生は前々のお馴染で御存じはござりますまいが、父は一度仔細あつて榊原家を浪人を致し、その後將軍直參と相成りまして、四ッ谷鹽町に住居を致して居りましたのでござります重助「ハ、ア、それでお前は先刻將軍直參だと言はれたのか、ム、ウ、ナア出世をしてても命がなくなつては叶はぬ、神免重助は斯か

鈴 木 主 水

る老人となり、行く所は私有家、錢もなければ金もない、親もなければ子供もない、その替りに身体は無事ぢや、また諸方を廻つてナ或道場に食客をし、また静かな寺があれば、其處の厄介となつて、神官も坊主も學者も武家も皆朋友ぢや、ハ、ハ、ハ、氣樂な身体ぢやア主水「エー先生、諸方をお廻りになりませうが、お住居といふものは重助「ない事はない、大阪の堂島に道場を開いて居る、門人もチマツと四五十名はある、また寄宿生も十名くらゐは居る、その中には代積古をして呉れる者もあるから、先づそれに頼んで置いては、愆く歩いて居る、で、マア年のうちに二月三月くらゐは大阪へ歸り、正敷行當り盤蓋と共に草枕と、倒死をするのも困るから、マアく世話をして置けば、門人も私が死んだら、大阪の道場から送葬くらゐは出して呉れるであらうといふ胸算なのだ、主水「へエ然うでござりまするか、世間をお廻りに相成れば、色々先生方にも重助「ア、出會ふ、それも他流試合は時々だ主水「然らば承はりますか、筑波三平と

申します者にお出會ひになりは致しませぬか重助筑波三平、一刀流
を使ふ男ぢやナ主水「ハイ、先生御存じでござりまするか重助、ハ、居
る所も心得て居る主水「ア、有難い、市助、三平の所在が知れた、ア
、有難うござります、して先生、何處に居りまするか重助、ハ、筑
波三平に會ひたいか主水「何處に居りまするか、何うかお教へ下し置
かれませうなれば、主水有難き仕合せにござります重助言はぬ、
には言はれぬ主水「ヘー、それはまた如何いふ次第で重助「その筑波
三平といふのは私が倅ぢや主水「エ、一ツ」ハツと驚いて主水は、
時神免の顔を見て居ります重助「ハ、ハ、ハ、ハ、若いな、主水「先
生、先刻のお話では、子も親もないと仰せられ、今また筑波三平を
御自分の御子息と仰しやるのは、如何の次第で重助「だから若いと言
ふのぢや、コレ神免重助といふ名は何故命けた、備も武藝に心懸け
て居る人間、我日本に流義は多くありと言ひながら、吉岡無二齋の
家に生れ、宮本武左衛門殿に養はれ、清正公御盛んの頃はひに、武

術の名人は武藏正名であると云はれた、その宮本正名が門人、神免
の二字を戴いて、神免二刀流といふ、宮本先生老年に及んで、その
流名の神免の二字を戴きしこの重助、假令我子があらうとも、流名
の違ふ一刀流を何ゆゑ學ばして置かうぞ、伊東彌五郎友景入道一刀
齋が編出したがゆゑに、彼れを一刀流といふ、また我二刀流は、今
も述べた宮本先生、肥後國阿蘇ヶ嶽阿蘇明神に祈誓をかけ、右劍左
劍の二本の太刀、天地陰陽大極兩儀、阿蘇の構備と名づける、即ち
二刀流ぢやわい、我流名を他人に指南する者が、若し實子であらう
が養子であらうが、その子に他流を學ばせる者があるか、馬鹿者め
備の親の傳内は、病氣で死んだものではあるまい、イ、ヤ驚くな、い
ま汝は筑波三平の所在が知れたといふと均しく、躍り上つて喜びし
その眼中に、涙を合ちしは、正に三平の爲めに傳内は撃たれ、その
敵討に出で居るのであらう、ハ、ハ、ハ、ハ、驚くな、百歳の年を老ッ
ても、未だ老態はせぬわい、その様に心を焦つやうなことで、迎

も本懐成就覚束ない、殊に其方は義正流といふものを學んでも、未だ印可皆傳には渡るまい、と云つていま一度江戸表へ立歸つて、小笠原十郎右衛門の許にあつて、また稽古をするといふ譯にもなるまい、誰れか師があらう、我目で見つた所に於ては、この老人の神免に打込める腕はあるまい、ムウソ、幸ひ此處に棒千切が二本ある、木劍には及ぶまい、竹刀には及ぶまい、サアそれを以てこの神免に打込め、この重助に勝つ腕前があるならば、仇敵の所在へ案内をしてやる、吾れに勝つ力なくんば、到底知らしてやつても益はない、到頭備は反撃ぢや、サアそれを以て打込め主水「ハ、フ、御老人有難うござります、御免あそばせ」と飛降りたる主水は、支柱にでも致してありましたか、海部九太といふ物を取つて、手拭を以て鋸を作り、打込まんとする奴を、神免重助は「サア來い」と片手には彼の支柱、片手には扇子、二本を以て起上つた、料理屋の老爺は驚きました、「ソラ、武士同士の盃の献酬はこれが因る、此方は十藝の若武者

士、此方は彼苦茶の老爺、喧嘩にはなるまいと思つて居たが、こんな事になつて來た、これが何方か殺されやうものなら、檢屍を受けらやうな騒ぎとなり、利けに料理代も貰へない、詰らぬ事だ」と吐いて居るうちに、打込んで參つた主水の太刀、神免重助は拂つて置いて、二度目に打込む奴を、ガツキと受け九十字止め重助「何ぢや主水、この十字は破れまい主水「ア、心外……重助「ソレ、この老爺の老爺に勝つてぬやうでは、仇敵は討てぬぞ、私はいま一年ばかりは諸方を廻るが、先刻も云ふ通り、年のうちに二三ヶ月ぐらゐは、見廻りの爲めに大阪の堂島の道場へ歸ることであるから、必ず訪ねて來い、仇敵の所在を知らせてやる、それまでの間は我二刀流を學んでも益はない、義正流では天下の三人衆、その一番が汝の亡父だ、第二番が備の師匠の小笠原十郎右衛門、いま一人は尾州犬山の城主成瀬半人正殿の家來、尾崎右膳といふ者である、この右膳の許へ參り、姓名を名乗つて入門をせよ、兄弟弟子の間柄、他人のやうには

鈴 木 主 水

扱ふまい、其處で修業を致して、彼の右膳に免狀を貰つたならば、大阪へ來よ、先づそれまでの間は仇敵の事は忘れて、稽古を致すが可い、未だ二年三年に死ぬるこの重助ではない、とは言ふもの、人間は老少不定、萬一に重助現世を去らば、留守居の門人に申付けて置いてやるから、尾崎の免狀を持つて大阪へ参りなば、筑波三平の所在を知らしてやる、ア、不慮な者ぢや、父に死別ての艱難、市助とやら、爾も忠義の道を忘れず、始終主水の事を頼むぞ、ア、今の立合に少しく空腹になつて來た、老爺、飯を持つて來い、喜主、エ、喧嘩にならうと思ひました、納まりましたか、重助、ナ、喧嘩ぢやア、ない、ア、飯を持つて來い、老爺さんは悠々然と食事をして、主水主従に別れを告げ、飄然と立去る、流石の主水も、暫時の間神免の後姿を拜んで居りました、が、心中に「先生の言はれる事であるが、筑波三平と一騎拵ならば、負けやうとも思はぬが、何か先生にお考へのある事と見ゆる、父上と兄弟弟子とあれば叔父も同様、此處は

鈴

木

主

水

美濃國、尾張國は隣れる處、跡へ戻るやうぢやが、お訪ね申さう」とこれより主従兩名、尾州犬山に來つて、修業をするといふ、主水尾崎右膳の道場修業のお話。

第 五 回

エ、徳川家康公は、後れてお出來なすつた御子息の中に、御三家といふものをお造しになりまして、その義直公、頼宣公、頼房公といふ、これが尾張、紀伊、水戸家の御先祖、皆お附家老をお遣しになりまして、既にその中には紀州家の安藤でありました、或は水戸の中山でありましたの申します、皆附家老でございました、尾州家に於きましては、尾州犬山に於て三万五千石、成瀬隼人正と申しまして、これは頗るお家柄でございますが、維新後は華族に列せられた位でございまして、陪臣にして陪臣にあらず、殊に藩士の城持といふものは、日本全國の内に多くはなかつたもので、これは犬

鈴 木 主 水

山城といふ城をたまたまはりましたが、折々は本藩の人と権威争ひをする者などがあつた位でございすから、好い御家來が澤山ございまして、中にも彼の尾崎右膳といふは、三百石を戴いて、成瀬家に於ては、なか／＼威勢のあつた仁でございす、御子息はございませんで、一人の娘を持たれ、名をお糸と仰しやつて、頗る標致美し養子にならむと言つて望む者も澤山ある位、けれども親の目に止まる者もありませぬものと見えて、未だ養子の御相談もございません、なか／＼右膳は壯健な御仁で、一般の人々に彼の養正流を指南をする、名古屋から別段に好んで當家へ入門する者も澤山ある位でございす、或日のこと玄關先より、家來を伴れた一人の若武士がやつて参りました、主水「お頼申します、執次「イ、レ……誰方でございます、主水「ア、右膳先生は御在宅でございませうか、執次「イヤ如何にも先生は在宅であります、して貴郎は主水「手前は江戸表から参りました、鈴木傳内の伴主水と申す者でございす、何うかお目通を願ひ

鈴 木 主 水

たい「そこで早速執次の門人から、この段を奥室へ申入れました、すると右膳先生は「オ、傳内殿の御子息が参られたとか、サア此方へと申せ、して一人か執次「イエ御家來を伴れまして、右膳「然うか、此方へ案内を致しました、右膳「サア何卒此方へ……それでは御挨拶が出来ぬ、お進み下され、主水「ハイ、これはお初にお目にかゝります、傳内「が、主水にござります、右膳「これは、前年江戸表へ参りましたが、此方から御訪問を申す筈のところ、御用繁多に付いて、お伺ひ申すこともならず、却つて御先方よりお訪問に預つて、一兩度お目にかゝりました、お屋敷へ参らぬことゆる、御身には面會いたしませなんだ、先づ御壯健で、よく来て下された、如何でござる、傳内殿「は先づ頃御直参になられたといふ話も承はつたので、書面でお祝ひ申した位、その儘に相成つて居るが、相變らず御壯健でござるか、主水「誠に恐れ入ります、實は父は歿しましたので、右膳「イヤこれは怪

鈴 木 主 水

しからぬ、何日頃であつた、御通知があらば、早速お吊詞状も差上げらるべきにして、永のお病氣でありましたか、主水「イヤ變死を致しました、右膳「ナ……」主水「お話し申すも涙の種、實はこれ、新様々々」と筑波三平の爲めに殺された一件、敵討に出た一條、美濃の加納に於て、神免重助に巡遇ひし次第等を詳しく物語りました、主水「その神免先生の御指圖に依つて、御當家へ参つた譯でござるが、何分とるか不肖の主水ではありませんが、未だ劍道未熟、他流へ入門いたしませんの、残念、亡父生前のお馴染たりしその間柄を以て、何うか御當家に於て御指南に預りたいと考へ、厚皮しくも参上いたしました、譯でござります」と涙と共に物語をして居る、右膳は貫泣を致して、右膳「ア、左様か、イヤ有理な次第、修業中は傳内殿には色々お世話になつた事もある、その萬分一の御恩報じに、及ばすながらまた御相談も致さう、縁容御逗留下され、今のお話で見れば、實に無念に思はれるであらう、けれども何處に居るといふ、その居所の分らぬ

鈴 木 主 水

者を探すのでもなし、實に武士中の正直者といふ評判のある、神免先生の言はれた事には間違ひはあらず、當家に於て御修業の上、彼の大阪へお乗込みになれば、早速その者の所在も分るでもありませうから、只修業が肝腎、何うか永く御逗留下されたい、これから酒肴の用意、女房の挨拶、娘糸の挨拶、市助もその座に列なつて、「何分お願ひ申す」とあつて、お盃を頂戴いたしました、これから一室座敷を借受けて、主水は其處を住居と致し、市助は他の中間と同時場所に住まはして貰つて、水も汲んだり使ひにも行き、色々手傳つて居ります、これで追々稽古も出来るであらうといふ、右膳殿の考へ、とところが前にも伺ひ置きましたる通り、多くの門人が居りますから、それ、に紹介して、右膳此仁は鈴木主水殿と申して、我兄弟子の御息であるから、各々方もまたお稽古に預るやうに、といふ挨拶でござります、主水は恐縮をして居る、他の門人も「若年ながら尾崎先生の兄弟子の御息であるが、お腕前は如何であらう

水 主 木 鈴

か、といふので、立合うて見る、なか、若年に似合はしからぬ
前、皆門人衆は感心して居ります、と、此ころが茲に同じ犬山藩に島本
準太と申しまして、これが親父は島本平左衛門と云つて、當家にて
百石を戴いて、重く用ゐられて居つた仁です、嚮にこの父は亡くな
りました、が、準太は當家の門人となり、十四五歳の頃はひから、入
門して居りました、が、擊劍の筋も好く、先生も子供の時分から取立
つた弟子のことゆゑ、誠に可愛がり、この準太なれば、天晴れの者
に、なるであらうといふので、別段に先生は目をかけておやりなさ
る、から、他の者等は「島本は先生の最負だから結構、事に依ると彼れ
を當家の養子にでもなさるであらう、お糸さんと夫婦になるのか知
らん」と云ふやうな事をツイ言ひます、けれども尾崎先生は何も糸
の養子にすると言つた譯ではなし、只子供の時分から稽古に来て、
永年の間手許に居りますから、先づ當道場にては、高弟ともいふべ
き者です、だから自然先生は氣を付けておやりなさる、それを他の

水 主 木 鈴

者は如、む、了、筋、もあり、羨、む、考、へ、もあり、かた、く、する、所、から、先生、が
島本を最負になさると、養子になさるのだらうといふやうな噂を致
して居りました、これを聞くに付けても島本は「當家のお糸さんは乃
公の女房、この宅の養子になるのは乃公だ」と獨りで極めて居る、
と、ころがこの頃になつて、江戸表から主水がやつて参りました、何
うも男振は實に俳優にも少ないといふ位で、否味の無い顔色の白
い、誠に美麗な男、そこで口数は利かず、腰が低うて道場へ出ると
立合ふ人々には「何分宜しくお願ひ申す」といふ有様で、立合をし
て見ると巧い、サア評判が高くなつて來ました、甲如何でせう、流
石は江戸將軍の御直參は別です、何となく上品ではありませんか
當家の若殿様上は美麗です、乙、イ、エ、何うして、名古屋の大
殿様よりは立派でござる、ツてねな事を言つて居る、その評判を聞
く度に、準太は頬に障つてならぬ、忌々しいとは思ひますけれど
も、別に彼れに喧嘩を吹掛ける譯にもならず、その儘日を送つて居

やア、それこそ大變です。お糸、然う言つて呉れると、嬉しいけれども、少とお前の前では言ひ悪い事だけれども……お安、構ひませんぢやア、ござりませんか、何を仰しやつたつて笑ふことぢやア、ござりませんか、お糸、然うか、それぢやア、言ふけれども、羞かしながら、妾は想ふ人があるので、お安、オヤ、これは驚きました。お糸、ソレ御覽、然う言つて笑ふではないか、お安、イエ、笑つたんではござりません、なんの笑ひますものですかね、お安、お嬢さん、然うでござりませう、貴嬢も最うお十七、妾などは、お屋敷へ上つた前の年でござりましたが、十六の年の三月のお節句に、一人情夫があつたんでござります、夫婦になつて約束をして、間もなくその情夫に死別、それから一生、亭主は持つまいといふ考へで、御當家へ上つたのでござりますから、妾はホノの終りの初物、夫婦となつては、慕しは致しません、ホノの十六の難遊びより、二月三月は楽しんで暮らしたことでありましたが、貴嬢お好きなお方とは、誰れでござります……ア、分りました、估て、

見ませうか、江戸のお客様でござりませう、國星を言はれて、ハッ、と、お安、ソレ御覽、あそばせ、估りましたらう、序でに、手筋をねねお嬢さん、お糸、安、厭だね、左、難な事が分りましたか、お安、へ、分つて居ますとも、彼の位、お男に惚れない奴があるものですか、お惚れ遊ばせ、澤山お惚れ遊ばせ、御有りでござります、お糸、お安、お前そんな事を言つたつても、彼のお方は、將軍の直參、だ、と云ふ事を聞いて居ます、然ういふ御身分のあるお方、阿父様は、御當家の御家來、よく考へて御覽、御公儀の御連枝、だ、とはいふもの、先づ名古屋の主公様は、將軍様の御家來も同様、その御家來の、また家來の成瀬様の御家來が、阿父様ぢやア、ないか、して見りやア、お前陪臣だ、先方様はお食祿は何れ位、お取りなされるかは、知らないが、將軍様の御直參だから、釣合はぬは、不縁の元、その上、妾のやうな見、苦い不敏者は、迎も與さずとして、戴くといふ事は、出来な、だから、妾は心配をするんだわね、ね、お安、お安、それは、お嬢さま、要らぬ御遊

慮でござります、女の中に厚皮しいのは幾らもござりますが、よく
 通常の者は妾のやうな多福のやうな者、醜面のやうな者ッていふ
 やうな事を申しませうけれども、斯う申しては失禮ではござりますが
 御當番犬山藩は勿論、この尾張六十万石の御城下には、貴類ぐらゐ
 御座致美しのお方は、最一人とないのでござりますよ、お糸、エ、
 ア冷かして、お安、イエ本當に、先方様だッて木や竹ぢやアござりませ
 ん、屹度これはお話が出来ませう、妾がこれからお取持をしませうが
 併し只口で言つたところが、ハア然うかと仰しやるものぢやござり
 ません、貴類お艶書をお書き遊ばせ、思ひの丈を充分にお書き遊ば
 せ、そのお艶書をお持ッて参りまして、若し先方で何と仰しや
 るやうな事がありませうならば、そこで妾はチャンと開き直ッて、
 議論を致します、お糸、何だねお前、議論だなんてお安、イエ屹度妾が
 調へて御覽に入れます、お糸、この道は別でござりますよ、お書、遊
 ばせ、アアお硯を持ッて参りませう」と只主思ひのお安が、車輪と

なつて、硯の墨を磨流して前に渡す、氣心に羞かしくもあり嬉しく
 もあり、總て認めたりましたがお糸、安、これを見てお呉れ、斯うい
 ふ鹽梅に書いたら好からうか、お安、ハイ、チョイとお見せ遊ばせ……
 成程、お見事な筆跡でござりますね、よくお書き遊ばした……ハ、
 ア、これは可けませんね、此處に「ヨ」を斯うお入れ遊ばせ、イ、
 エ、此處は斯うお書き遊ばせ」と附文の指圖をする奴もなないので
 原稿に修正を加へて、漸く出来上りました、多分これならば及第を
 するだらうと、試験前に生徒が、文章を作るやうに、漸く消書が出
 亦上りましたから、これをお安は、彼の主水の部屋へ來
 て見ます、主水は机の前に坐して、頻りに書見を致して居りま
 す、お安、鈴木様、御退屈で在らッしやいませう、主水「イヤこれはお安
 の、毎度お世話になりませう、お安、アノ市助とんは何方へか、主水「ア、
 今、お塾所の方へ、何か用か、お安、イエ、居りませんければ結構で、大
 層お學問をなすッて在らッしやるが、お肩が凝りませうね、主水「イヤ

日々劍術柔術、折々には先生の弓を借受け、射場へ参つて弓を磨くから、その割合には肩も張りません。お安「なかく、御勉強でござりませぬ、朝も晩も……アノチヨイと、これは何といふお書物で、主水「これは七巻といふもので、お安「イヤ、こんな物を貴郎が學びになるのでござりますか、主水「こんな物とは如何だ、お安「イエ、これは質屋の學問で、主水「馬鹿な事を言つては可けない、これは軍學だ、お安「ヘー、軍學と申しますと、主水「困るなア、戦争の學問だ、お安「ヘー、戦争の學問、お武士といふ者は、なかく、お學問にも骨の折れまするもので、宅の先生が仰しやつた事でござりますが、治に居て亂を忘れずと言つて、太平だからと申して、一途んで居ては可けない、武藝の稽古をせねばならぬ、太平であつても何時戦争があるかも知らぬからと仰しやいました、これは貴郎が戦争の學問で、主水「イヤ、威心ちや、門前の小僧習はぬ、経讀むといふ譬喩の通り、女も先生の宅に使はれて居ると、その考へがある、ナア人間は好い交際をせねばならぬ、

のちや、威心々々、お安「イヤ、そんなにお賞り遊ばすと恐れ入ります、オヤ、大層細密く書いてござりますか、主水「イヤ、書いたんではない、版に刷つたんだ、お安「然うでござりますか、マア本當に細密く奇麗でござりますね、と色々書籍を彼方を細け此方を披けて居るうちに、彼のお糸よりの艶書を、書籍の間に挿んで、爲不知態、お安「邪魔を致しました、と出て行つて仕舞つた、主水「輕卒しい奴だ、喧しいといふは、婦女の常だと申すが、構はず彼方此方と書籍を披けて、オヤツ何處かへ葉が抜けて仕舞つた、分らなくなつた、悪戯をする奴、と小言をいひながら、書籍を披けると、中が厚くなつて居りますから、さては葉が此處に這入つて居るのだと、見ると「戀ひしき花の御君様、憶る、身より、とある艶書、主水「ハ、ハ、ハ、何を致すか彼の女馬鹿な奴もあるものぢやアないか、彼のやうな妙な面をして、附文をする、これだから困る、畢竟する拙者だから可いけれども、何うも困るなア彼の馬鹿者には……ハ、ハ、ハ、可笑い眞似をする奴だ、

と笑ひながらも、これが娘の糸の艶書と知りましたならば、無論突返しも致しませうが、素より下女ぐらゐの附文を取上げて、如何しやうといふ考へのない主水「二應中を披いて見てやらう、如何な事が書いてあらう」と面白半分封目を切つて、段々讀上げるといふと、文章の趣では彼の下女ではない、詰り當家の娘お糸が送つた艶書、一驚また一驚、流石の主水も彼の艶書を机の上に置いて言葉がない、時暫艶書を見入つて居るところへ市助若旦那、今日は好い山薯を貰ひなすつたので、マア一生懸命に拵へて持つて参りました、マア御覽あそばせ、お樂みぢやアござりませんか、この薯蕷汁、貴郎のお好きなのでござります、殊にお宅に居りまする九斤鶏の大きな卵や入れましたので、マア召喚れ、御飯のお菜よりは、この儘でナロツとマア御退屈凌ぎに召喚る方が宜うござります、主水「オ、市助怪しからぬ事が出来た、市助「ヘエ、何でござります、主水「その障子を閉て、此處へ進め……今ナ、此處の下女に安といふ女があるたら

市助「ヘエ、居ります、そりやア面白い女です、顔容は妙な牡丹餅の餡掛を見るやうな顔容をして居ります……主水「コレ待て、牡丹餅の餡掛とは如何だ、市助「イエ奇々妙々な顔容で、彼奴ばかりは面の裏表が分りません、畢竟するマア譯の出る方が表だらうと思ひますので、主水「コレ、悪口を言ふナ、市助「けれども、罪のない女で、輕な事はかり申して居りますが、彼れが畢竟顔容が醜いから、後家を立つて居れますので、普通の女で見ると、未だ三十前後、随分色氣もありませうが、主水「ところが可笑い、下らない話をして今歸つたそれも好かつたが、彼女が立去つた後で見ると、書籍の間に斯様な附文を置いて行つた、市助「畜生、彼の三平二滴、彼んな面をしやアがつて、若様へ附文をするなんて、厚皮しい奴ですナ、だから世の中は油断は出来ません、主水「サア、私も然う思ふ、そこで如何な事を書いて越寄したか、愚みに讀んでやらうと、實は開封いたしたのであるが、市助「ヘエ、して如何な事が書いてありました、主水「ところが全

く彼女の附文ではない、當家の娘のお糸の、吾れに附文をした
のた市助「エ、一ッ……」主水「彼の安は全く使ひに參つたのだ、これが
安の飽書であれば、披いて見ても決して苦しうはないが、糸のよ
飽書であつて見れば、これをこの儘には捨て置かれぬ、と言つて、
悉く閉封したものを、返すといふ事も出来ない、それが爲めに大き
に心痛をする譯ぢや、市助「これまでの間に、斯様な事の経験はな
いか市助申儀仰しやッちやア可けませんそんな、事の経験があつて
堪りますものか主水「何とした事であらう、偏の智慧を借らねば、私
に考へが着かぬ市助「左様でござりますね、仰しやる私だつてそんな
事は馴れませんから、何うも今更にお安を呼んで、封緘は切つたけれ
ども、これは返すなと云ふやうな事を言つたら、彼の女のこと
すから、大變です……」オ、斯う遊ばせ、お指圖を申上げるも恐れ
入りますか、先づお嬢さまにお會ひ遊ばすと仰しやれす、と先方
では戀か叶つたと思ひ、喜んで貴郎を、御案内をさせう、そこで

お糸さまに貴郎がお目にかつて、誠にお心志は有難いが、貴郎も
親掛りの身の上、私も修業中、今更縁を結んだといふことになれば
不義淫奔、武家屋敷にて不義する者は、手討になるといふ位なるも
の、して見れば尙更以て濟まない、何卒これは断念めて下さるやう
修業の妨害になりますから、斯う言つて、貴郎が眞實を打明けて
決して貴郎を嫁ふのではない、修業中の妨害である、いよく業が
成つて江戸表へ歸るやうな事になれば、改めて妻にも申受けませう
と斯う仰しやい、何も契約するのでござりません、そして延ばし
て置くも、一寸仰びれば尋どかいふ譬喩もござりまして、また月日
の推移るに従ひ、變つた風も吹き、何にか御思案も付させう、そ
の間に斯様申せば如何でござりますか、若旦那のお姿が美麗だから
と言つて、迷ふ位ぬな浮氣な女で見ますれば、これが一年二年と延
びる間には、また何にか先方の了簡も變りませう、それとも先方が
眞實貴郎を慕ひ、またお見受け申しますれば、彼れだけの御縁致、

貴郎が奥さまに遊ばしても、決して恥かしくはないお嬢さまです。か
ら、改めて媒介人を以てお貰ひなさる時節もあれば、お貰ひなすつ
ても構はぬではござりませんか、兎にも角にも今此處のところは、
一寸遊ばれに、只修業中だから不義は出来ぬ、修業中に女と淫奔を
するやうでは、逆も業は遊べられぬ、巧く一ツ瞞着してお仕舞
ひ遊ばせ、なんでも此處は直接にお出でなさる方が、一番宜しから
うと思ひます。主水「成程、これは市助、好い所へ考へを付けた、然ら
ばさうしやう、ア何分私が開封したのが過失だ市助、然うでござり
ます、さう遊ばせ」と主従は此處で相談をいたしました、夕飯も済ん
で日暮といふ頃は、廊下を密やかにやつて来たのは、彼の下女の
お安でござります、お安「御免をばせ、若様お一人でござりますか」
来た、また来たと思ひながら、机に傍置つて居りますと「お安、御
免をばせ、ア先刻貴郎御本を御覽あそばしたか、主水「ア、見たよ
お安、彼の中の物を御覽あそばしましたか、お安「ア、拜見した、安どの

私に考へた事もあり、チミツと何うかお糸どのにお目にかゝりたい
と思ふのぢや、お安「ハイ宜しうござります、今晚亥刻頃は、ひに妾がお
迎ひに参りますから、何卒入らつしやつて下さいませ、やう、主水「ア、
お目にかゝつて色々申上げな、御書面の返事もしたく、お安「有難う
ござります、宜しうござります、有難うござります、
こんな嬉しい事はござりません」と獨り吞込んでお安は、早速娘の
部屋へ戻着けて来て、惘然坐つて居る娘の背後から、肩をポンと叩
いて「お安、お嬢さま、お糸「ア、何だ、お安「ア、嬉しいぢ
や、アありませんか、本當に貴嬢お嬉しいでせう、お糸「譯も何にも言は
ないで、只嬉しい〜ッて妾にや、ア分らない、お安「イエ、今晩鈴木様
入らつしやいます、お糸「ア、ア、ア、またそんな事を言つて、嘘だよ、お安、
イ、エ、嘘ぢや、アありません、本當です、少しも間違ひはござりま
せん、亥刻の鐘を合圖にお出でになりますから、その思召しで、本
當にお嬉しうござりませう」と顔を覗き込まれた娘の糸は、ハツと

顔を赧くして、何事も言はずに差俯向いて居る。お安「サア、最う程なうお出でになりませうから」とお茶お菓子酒の用意までもして、チヤンと娘の部屋の次の室に列べた。迎ひの爲めに掛けて参りました。お安は「サア鈴木の旦那様、安でござります」片傍に寢床は敷べてあります。未だ燈火の下にあつて、書物を見て居た主水は、「オ、安どのかお安「サア入らッしやいまし、御案内を致しませう……イ、エ、最うお奥は引けました、旦那様はお就眠でござります。主水「左様か、然らば同道いたさう」とこれが不義淫奔をするのなら、常人も遠慮がありますすけれど、腹の中では異見を加へてやらうといふ考へです。別段に恥かしい事もない、彼女の案内に件れて、廊下を段々やつて参り、安は先に立つて障子を開き、お安「サア、お入り遊ばせ」主水は彼女の案内に件れて其處に通り、主水「ア、これはお糸どのでござるか」と言ふ間に、お安「サア、先づお茶を一つ召喚れ御酒の用意」といふので、お安は其處へ出しかけましたから、主水「ア

、實は修業中で、少々考へる事もあつて、熱酒を致して居る。何うかお酒の儀は御免蒙りたいお安「オヤ、お堅いぢやアとござりませんか」主水「イヤ酒の儀は平にお断り申すお安「然うですか、それぢやア緩容お話し遊ばせ、妾が居りましたは、却つて不都合、媒介人は背の口とやら、ね、御免あそばせ」と笑を含んで安は、次の室へ立去る。お安「ア、安、お前が居て呉れなければ」と体裁懸さうに娘は、お安の跡を追掛けました。お糸が呼止めたのを、更に聞かぬ態をして、お安は立去る。跡に二人は顔を見合はせて居るうちに、お安はしさが増りましたから、お糸は何事も言はず、差俯向いて居ります。主水は漸く前に膝を進めまして、主水「さてお糸どの、今日は安から御書面を拜見いたしました、誠に怪しからぬ譯で、實拙者は彼女が申す戯を申して居りました、そのうちに立去りましたから、彼の安が悪戯を致したものと思違ひをして、書面を拜見に及んで見るといふと御自分の書面、開封に及んで後は取返しもならず、實は心配の所へ

の上にも宜しからぬこと、改めて主水が御相談、またか断りかたぐい
 罷出でましたのは、斯様な次第、お糸の悪しからずこの儀は思召
 されて下さるやう、と言はれて娘のお糸は、下女の安からの話には
 最早承知をして、今晚は忍んでこれへ来て呉れるといふ約束、嬉し
 喜んで迎へて見れば、豈圖らんや思ひも寄らぬ斯かる言葉を聞いて
 は堪りません、怨めしげに主水の顔を見て居りましたが、起上つて
 彼方へ行かんとする、裳を押へた主水は「イヤ糸の、何處へお出
 でに相成りますか、お糸、ハイ可うござります、お放し遊ばして下さりま
 せ、女の身の恥かしい、斯様な事を申上げまして、御承知がないか
 らと言つて、この儘に居られるものではござりません、何うかお放
 し遊ばして下さい、妾の身は……主水「イヤそれは可かぬ、失禮なが
 らそれは貴殿の御勝手と申すもの、我望みを遂げない以上は、淵川
 へ身を投げやうとか、自殺をしやうとかいふやうな事は、世の中に
 幾らもある例ひ、だが貴殿が此處でお死になさるからとて、それ

家来の市助が歸りましたから、心配の趣を彼れに相談を致しました
 誠に御身のやうな方から、假令申儀にも彼のやうに御親切に仰せ下
 さる段は、主水身に取りますして、辱なうは候へども、御承知の通り
 未だ修業の身の上、殊に御身の父君は、吾れ等が爲めには師匠、七
 尺去つて影を踏ますといふ位、の禮義ある、その師匠の娘と不義淫
 奔を致しましては、世間へ申譯がござらぬ、またこの事露顯を致し
 ますれば、當家には居られませんが、然すれば折柄修業を致し居りま
 する身の妨害にもなりませぬ、拙者といへば未だ定まる妻のない身
 体、少くも身に望みあること、その望みを遂げましたならば、何れ江
 戸表へ立歸り、その時にはか一人娘のこと、何と言はれませうかは
 存せねども、御縁もあらば拙者の許へ頂戴いたしませう、また人を
 以て御相談を致し、先生御承知の上からは、不肖の拙者の妻に申し
 受ける時節もござりませう、決して心を無にする譯ではござりま
 せんが、若し斯様な艶書を他人に讀まれる時に於ては、お互ひの身

はならぬ、お止まりなさい、お望みを遂げさせ申さうといふやうな事は申されぬ、いま事請を申したのが、お分りに相成りませぬか、實は拙者の身の上を、未だ最う一ッ打明けてお話し申さねばならぬ事がござる、お糸どの先づお坐りあつてお聞き下さるやう、いま御身と不義淫奔をする場合ではござらぬ、申し兼ねる事なれど、拙者は亡父の仇敵を報じんければならぬ、敵討をせんければならぬ身の上でござる、お糸エ、一ッ主水「サア、左様な大望を抱へた身の上ゆゑ、只今はお言葉に従ひ兼ねぬ評、これまで打明けし事はなけれども、御身だけは他人と思はぬ拙者の了簡、誠貴嬢が女房となつて下さる了簡なら、真人たるべき者が大望を抱へて居る、然るに只色戀の爲めに溺れたとあつてはなりません、眞の御親切があるなれば、共に精進潔齋の上、神に祈り佛に念じ、本懐を遂げさせて下され、當家に於ていよいよ業成り、本望を遂げました上からは、必ず改めて貴嬢を妻に申受けるといふ、誓紙なり證文なり認めますから、こ

の處はよく聞分けて下され」と怒り述べられて見れば、流石戀に迷ひし娘の糸も「それなれば主水様、斯様な拙ない者ではござります、が、思召しの御用の濟みましたならば、屹度貴郎は妻を妻に、主水「如何にも申受けませう、親の許さぬ不義淫奔は天下の罪人、お互ひに罪人とはなりともない、誓しの間の御辛抱を」と段々話を致して、到頭この女を此處で承知をさせ、一宗は夫婦と契約をして、今や立去らんとするところへ、襖を開いて出掛けて来た彼のお安「左様な約束でありますなれば、話證文、證文代りに妾が此處で承はりませう」とある、改めて約束を致した主水は、我居室へ立歸つて来たは好かつたが、彼の鳥本準太なる者が、戀の叶はぬ意趣返し、遂に鈴木主水の身に災禍を及ぼすといふ、主水光信犬山立退きのお話と相成りまするが、チヨツと一息御免蒙ります。

鈴 木 主 水

さて主水は、彼の糸と契約を致しまして、その後は相違ちず稽古をして居りますか。尊卑に拘らず、男女の情は別なものでございまして、男子の方は一旦契約をして仕舞ひましたから、先づこれで宜しいとすれば、別に糸の事は心に懸けて居りませんが、お糸の方は、此仁が未来の良人と思ひますれば、何かに付いて注意を致します。折々主水の部屋へ参りまして、衣類などが脱ぎ捨てゝあれば、それを稽んで置くといふやうな有様、自分は何の氣なしにやるのではございませぬが、二三度と斯様な事が度かさなりますと、他人の目に觸れます、他の門人は主水は通常の門人ではない、師匠の兄弟の子であらうしやるから、親族同様のものといふ考へを有つて居ります。そのですから、假令娘のお糸が、主水の食事の給仕をさせようともそれ等に心を留める者はありませんが、烏本単太は糸は自分の妻と自分で定めて居る、その女がです、その後には稽古に参りまして、辨當な心を持つて来る日もあれば、都合に依つて先生方で御飯を

鈴 木 主 水

くこともあります、けれどもお糸は、何處で風が吹いて居るといふやうな顔容をして、殊に物も言はず、それに引替へ主水の世話は、始終安なり糸なり二人が、交るゝして居りますから、何となく氣に障つてならない、己れも鏡を見ぬ人間ではなし、吾れは醜男にして、主水の美男であるといふ事も分つて居る、また主水の方は、吾れより剣撃も能く出来る人間にて、智慧のある賢い男、彼れとなく此れとなく、己れより主水の方が、勝つて居ることも知つて居るので、爲めに尙更癪に障つてならない、機もあるならばと窺うて居る、さて當家へ主水が参りましてはや一年、これが初心の男ではな、亡父傳内兵衛の居る時分から、相當に教へてもあつたし、殊に小笠原十郎右衛門の許に於て、切紙を貰ひ目録まで貰つた隨前ですから、なかく出来て居る、それが一年の間、一心不乱に勉強いたしましたから、その業の進歩な事といふものは、實に感心なものでございませぬ、そこで右膳先生も、早く免狀を渡して、希望を遂げさ

せてやうたいとは思召したが、物には順序のあるもので、先づ御自身
 の道場の高弟と致した者は、例の鳥本準太でございます。如何に
 師匠の權とは言ひながら、準太、お前には免状を與ふことは出来ぬ
 が、主水には免状を與へるといふやうな事になりましたならば、彼
 れに偏僻心が出るであらうから、そこは多くの弟子をお取立てなさ
 る先生、注意いたして居りますから、今日は主水、準太の兩名をお
 招きに相成りまして、右勝時にお前送兩名は、他の者に擡で、勉強
 たしたゆゑ、明日は幸ひ日柄も宜しいから、兩人に印可を致さうと
 思ふが、併し兩名に免状を渡すといふ事は、これまで例のない事
 ある、依つて明日は準太、主水の兩名に立合を申付け、勝利を得た
 者に印可を渡しませす、若し敗れ取りました者も、必ず恨まぬやう
 その者は尙一層勉強して、假令一月二月は遅れても、免状を取ると
 いふ氣になつて貰ひたい、よく御前試合からして遺恨を合んで、そ
 の相手を殺すなどいふ事は往々あることだが、然ういふ事のない

やうた、これは何も御前の験れの試合と言ふでもなし、同門同士の
 事である、詰り兄弟であるからして、よくその邊の所は考へ違ひの
 ないやうに致すやうに」とと悩々申渡しに相成りました。これは主水
 に言ふのではない、先生も見えて居る、主水は渡す免状ではあるが
 準太が後に恨まぬやうにといふ、言はよこれは豫防です、主水はよ
 く分つて居ります、準太はそれが分り兼ねて居る、「委細長まりま
 してござります」と双方お請をして返りましたが、サア翌日は主水
 と準太との立合、これを見ずんばあるべからずといふので、近頃入
 門をしたハンの初學の門弟も、皆な早天から詰寄せまして道場は充
 満、女の身の見ることは叶ひませんが、何卒この立合を見たいと思
 ひましたに依つて、窓の所へ踏臺を持つて参りました、彼の下女の
 お安を伴れてお娘のお糸は窓の間から見て居る、鳥本準太はその様
 子をヤロリと眺め、「ハ、ア、今日はお糸どのが来て居るナ、ロ、今
 日主水に打勝つて、一面は醜いがこの準太の腕前の勝れた所を見

鈴 木 主 水

せてやらう。併し普通の立合では勝つことは出来な、道具外れを打つて、主水に一ツ傷を付けてやらう」と豫てその前日から仕組んである鐵の棒を竹刀の中に入れて勝れて太い竹刀、先軋も至つて堅固なのを着けてございます、尤も素面素籠手の立合でございすが、顔巻だけはして居ります、そこで腕でも挫折らうといふ考へ、双方前に進出でた、先生は高き所に據を敷いて、控手と坐して居らつしやる、右膳「サア、兼ねて昨日より申開け置いたが、兩名は決して勝つとも負けるとも怨恨には思はぬやうに」と仰渡しに相成つた、兩名長まりましてござる」とあつて、向ふを見ると、白木の三方の上に免狀が載せてあります、さては彼れを貰へることであるかと思ひながら、双方はヤツと起上つた、互ひに正眼に位取りをして居りました、が、懸てボン／＼打合はせる間に、主水は七八合の打合ひのうち、彼れの竹刀の鏝際の所を、バチーリ打つた、只さへ持重りのある重い物を持つて居た準太、主水の爲めに鏝際を打たれまして、籠手に

鈴 木 主 水

痺れが廻りましたか、バツリと落した、先生はこれを見て右膳待て、チヨツと待て、今の勝負は分らぬ、最う一應吹めて立合ふが好からう」とこのことでございますから、主水最負の門人は顔を見合はせまして「ア、先生は私だ、正に獲物を打落したに依つて、鈴木先生が勝利といふ事は、誰れが見ても分つて居る、それに最う一應立合へい……何うも先生は可かぬナ、先生は餘程鳥本を最負になさると見ゆるが、不都合な事ではないか」と喧々言つて居る者もあり、お糸は「如何いふ譯で阿父様は再びの勝負をおさせになるのであらうか、敢て鳥本を最負になさるからといふ譯でもないに」とこれまた窓の外で不思議に思つて居ります、が「十人寄れば十腹」とやらで、中には鳥本最負の者もありまして「ナア流石は先生だ、近頃参つた者と、永年お仕込みになつた者とは、彼れ位ゐの差別があつても可い、這回は鳥本が勝つだらう」と思つて居る、そのうちに又候改めて立向ひ、ヤツといふ掛辭諸共に打込んだ、二三合打合はし

鈴 木 主 水

て居るうちに、同じ呼吸を以て、這回もドヤヤ鳥本の竹刀を打落した、鳥本も打落されて無念の様子、主水は先方が降参たとは言はないけれども、獲物を打落して置いて、一打込むと云ふことは卑怯に心得、ワツと顔を見て居りますと右膳、主水、その竹刀を此處へ持てい、主水「ヤツコ、これは……」右膳「此處へ持て、主水「へエ……」右膳「誰れかある、主水の竹刀を此處へ、コレ」小川「その竹刀を此處へ持て」小川「源吉といふ十七八の若者、ワツとツと駈来つて、彼の準太の脈がる竹刀を取上げて、先生の前へ持つて出でました、右膳先生手に取上げて御覽なすつたが、ハツとばかりに準太を睨付け、右膳「ヤ、準太、此處へ出よ、準太「ハイ……」右膳「昨日も只今も汝に申付けたを何と聞いた、共に我門人ではないか、兄弟も只ならぬ間柄、誰れも勝ちたい、負けたい者はあるまいが、それが獲物の爲めに闘むところだ、汝は如何なる怨恨あつて、主水に傷を付けんと致したか、汝の生來智慧のないと云ふ事は、此方も承知を致して居るが、未だ

鈴 木 主 水

前回の當時から、我手に於て指南を致した其方、義正流といふ流名は、至つて竹刀を軽く使ふことを、日頃教へてあるのぢや、然るに先刻の立合、どうやら汝が獲物の爲めに苦しんで居るやうに見えたに依つて、先回の立合は止めて、二度目に立合はせられたことである、この獲物は何ぢや、成程竹刀の太いのを用ゐるといふ者もあらう、なれども斯様な重い竹刀といふものがあるか、何れの流派に用ゐる竹刀とて、竹刀の内部に鐵の棒を入れて置くといふ事があるか、汝これを以て主水に傷を付けやうといふ事は、言ふまでもない顔に顯れて居る、準太前へ出る、準太「ハ、ツ、右膳「サア、改めて竹刀を遣す、最う一應立合へい、心得違ひは人にあるものぢや、改めるといふに敢て答めはせぬ、いま一應輕き竹刀を以て立合へ、主水も決して遠慮には及ばぬぞ、充分に打て」主水は穩當しい仁ですから、何事も口外へは出しませぬが「何で彼のやうな鐵の棒を中に入れて此方に向つたのであるか、馬鹿野郎もあるものだ、」

番打倒りしてやらうと思ひながら、再び竹刀を取つて其處に向ひ
 ました。が、以前に勝る主水の勢ひ、坐列ぶ門人も呆れ返つて見て居
 る。そのうちに双方起上つて、ボクと打合つて居る間に、主水も
 惜い奴とは考へました。が、彼れが身体を打つて、傷を付けてもなら
 ぬと思ひ、また同じ所の隙を一つボカリー、先草が餘つて、持つ
 て居る準太の甲を打つた。竹刀を打たれてさへも取り落しましたの
 に、いま彼れく甲を打たれては堪りません。準太は骨も砕けし思ひを
 なして思はず、準太降参た右膝、勝負は見れた。準太、只今限り破
 門をする、出て行け、其方のやうな者は、決して門人ではない、我
 義正流といふ流名に、傷を付ける不埒者。この門人衆のうちには、
 準太に親族の人もあらう、舊友もあらう、御勝手の交際には、敢てお
 止めは申さぬが、今日限り右膝の道場は破門を致したからには、決
 して各方の兄弟弟子ではござらぬに依つて、念の爲りにこの儀申し
 おく。準太、ア速かに立去れ、誰れかある、彼れが木劍その他の

品々、速かに門前へ投り出して任舞へ」と言ふと、一生彼れがイケ
 圖々しい顔容をして威張つて居るのを、憎んで居た門人の輩。今日
 より鳥本氏は破門でござる、破門々々、破門でござる」と喧々言ひ
 ながら、準太の所持の品々を一つ纏めに致して、その儘門前の溝渠
 の中へ投つた。酷い奴もあるもので、ワツと一同は鯨波を揚げて笑
 ふ。笑はれても仕方がない、眞紅になつて鳥本準太は、その儘悄然
 立歸つて任舞ひました。が、跡にて右膝先生は「ア主水、改めて印
 可皆傳を致すでござる」とこれから彼の義正流の極意をお譲りに相
 成りました。毎度早上げる通り、劍術の立合極意の譲りなごいひ
 ますと、これは我柳生流の極意でござる。これは神陰流の極意で
 ござるなんて、竹刀を以てその極意なごを渡すなご云ふやうな事を
 申します。が、木劍や竹刀の先で教へた位で、決して皆傳といふ
 ものではございませぬ。巻物がありまして、それには皆故實が記し
 てあることで、それを免許して主水は、有難く皆傳を得ました。が、

水 主 木 鈴

これに就いて詳しく申上げたらうはございませぬけれども、申上げる様
 林も未だ劍術の死状を貰つたことがありませぬから分りませぬが、
 何しろ大變難しいものだからうでございませぬ、いよく、茲に皆傳にな
 りますと、主水は翌一日を休息して、當地發足の儀を願つて、その
 晩は先生からお盃を戴きまして、自分の居室に歸りましたが、翌日
 は先生にお暇を告げて出立といふので、いよくその支度にかゝつ
 て居ります、どころへ女中がやつて参りまして、「ア、鈴木様、お奥
 で召します」とある、そこで主水は奥室へ來つて見ると、一機嫌よく
 莞爾笑つて居る右膳先生、「主水、明早天は出立を致すか、大阪へ参
 りなば、神免重助先生に宜しく何うか申傳へて呉れるやう、さて鈴
 木殿は仕合者、非命の死は遂げられたなれども、其許の如き大丈夫
 の子息ありて、鈴木の家名は立派に立ちますが、情けないかなこの
 右膳は、見られる通り、實子といふは娘一人、誰れを養子に貰はん
 といふ者もござらぬ、が、最う娘も年頃でござる、等を養子になら

水 主 木 鈴

ならば、他家へ嫁に遣して置いて、孫の出茶を待つて、その孫に
 なりてこの家名を相續させたいと思ふのであるが、主水、御身本懐
 を遂げて江戸表へ歸りなば、妻を娶られるであらう、如何ぢや娘の
 糸を貰うては下さるまいか、主水は心中驚きました、と言ふのはこ
 の間の話を知られたのではなからうかと思つて見ると、有難う存す
 ると、早速お話をすると、いふのも物益かしく、何と返事をしたら好
 からうと、頭を垂れ、何事も言はず、羞俯向いて居る、右膳先生は
 「何分にも娘糸、教育も足りず、不來者ではござるが、ア、女
 一ト通りだけの事は教へてござる、殊に親の口から申すも異なる事な
 がら、容貌とても然のみ醜いといふにもあらず、何うか狂げて彼娘
 を妻に帯たる、事を御承知に預りたい、如何でござる」
 少しく否
 味交りのやうに述べる、この時主水は頭を掻げ、主水「段々どの師の仰
 せ、決して御息女を固辭み申すではござりませぬが、先年美濃の加
 納にて、神免先生にお出遇ひ申した節、先生の言はるゝには、本望

鈴 木 主 水

と違せんと思へば、一ト度尾崎家へ参つて修業をせよとありまして、これに依つて御當家へ参つたやうな次第、神免先生の申されましたにも、充分修業をせよ、然なくば甚だ危険であるから、彼れ三平の所在は言へぬとの仰せ、私の考へまするにも、三平一人を相手の勝負なれば、然のみ勝つ程のこともないやうに心得ますが、その他彼の爲めに助勢をする者もあらうと考へられます、斯かる場合でござりますからして、若し彼れの助勢の爲めに、反撃に相成らんも圖り難く、依つてお娘御を申受けるお約束を致しましたも、拙者の身に左様な事のこれありましては、甚だ都合、然ありては後々御養子をお貰ひなさるにも、また他へ身を寄せられるにも、大に妨障にも相成りませうかと存じ、少し躊躇いたし居りますのでござります、そのやうな事を考へて居つては、物事の相談は纏まり兼ねますから、甚だ厚皮しうござります、お言葉に甘へ、只今結婚の式を挙げまして、當地を立去り、私が本望を達して、再び立歸つて

鈴 木 主 水

参ります間、お預り置きの程を願ひたうござります、右腹ア、有型ぢや、それで此方も安心いたしました、と右膳殿も非常の喜び、また娘お糸の觀音は如何ばかり、天にも昇る思ひをなし、この間の約束はホノの私事、若しその場合となつて阿父様が御承知をして下さるものやら、如何あらんと、昨日まで今日までも、案じ煩ひ居りました、今日親から想ふお仁に嫁し付けよとのお言葉に、願つてもない身の仕合せ、只有難いと言つて顔を隠すより外はない、そこで先づ假りの祝言の盃も済んで、翌朝の鹿島立、主水は犬山を出まして段々急いで大阪表へ乗込んで参りました、別に道中異つたお話もございませぬ、堂島の重助の道場を訪ねて見ると、聞きしに勝る立派な道場、門戸の懸札には二刀流神免重助道場と記してあります、主水お頼み申上げます、執次「ドレ……何方から、主水、手前は江戸表から参りました、鈴木主水といふ者でござります、先生御在宅で在らつしやるなれば、執次「ハア宜しい、先づお上りなさい、お名前も承

はつて居ります、此方へスツと廻つて行らつしやると、その右を廻つた所に井戸があります、其處に色々履物もありますから、足を洗つて内玄關からスツとお上りなさい……先生、兼ねてお話のありました鈴木主水といふ仁が参られました、重助ア、然うか、此方へ通せしと言つてる所へ、主水は足を洗つて、家來の市助を玄關に待たせて置いて、室内へ通入つて來ると、成程鏢幕して、壘も破れ障子も處々に空が明いて居る、先生の居室といふは、八疊も敷ける座敷で、床には何者の筆にならしたか、怪しげな山水の軸が懸けてあります、本箱は五ツ六ツ列んで、机が振れてある、承塵には槍薙刀などが掛つて居ます、先生は怪しげなる衣物を着て、梅の土に座を占めて居りましたが、重助「サア、主水、此方へお這入り、主水「エ、先達ては甚だ失禮を致しました、重助「イヤ、私もその節は失禮、如何ぢや、犬山へ参つたか、主水「ハイ、尾崎先生よりも宜しく申上げ呉るゝやうとの御傳言でござりました、重助「ア、然うか、壯健か、主水「ハイ、至つ

て御壯健で、また私は、お庇蔭さまを以ちまして、免狀を頂戴いたしました、重助「ム、ウ、然うか、尾崎の免狀を貰へば、それでお前も義正流の先生ぢや、主水「併し兼ねてお伺ひを致し置きました、筑波三平の所在は何處でござりませうか、重助「筑波三平の所在、ム、ウ、疑ても覺めても忘れまい、實はナ、少々道が遠い、免狀を貰つた以上は、教へてやらぬと云ふ事は言へないが、餘程氣を付けなければ可けない、河州北條郡津山といふ處ぢや、主水「ヘ、エ、作州津山、重助「ム、松平三河殿、御家來家老職を勤める森島半平といふ者がある、これは越前家の家來で、なか、妙な氣質の仁ぢや、敵多の浪人者を集めて、先づ言はば浪人の梁山伯とも命ける、それは、鑿劍槍術或は射術、中には柔術家もあれば、馬術家もあるが、それは普前の浪人ではない、敵持もあれば金を盗んで立去りし奴もある、その中に三平は加はつて居るのである、依つて例令貴公は將軍家の道開御證文があらうと、當時越前家の御本家たる松平三河守殿の勢ひ、一横に車を挽いて

仇討はさせまい、依つて餘程注意をせねばならぬであるから、今乗
 込む事は待て、神免重助悪い事は言はぬ、彼れ森島が江戸表へ出る
 時か何かを考へ、森島の居らぬその留守番をして居れば重盛、また
 森島の供をして旅行をすれば、またその機会を考へ、餘程計略を廻
 らさぬと、仇討は出来兼ねぬ、先づ今のところでは、三十人以上は
 悪黨が集つて在る様子、それゆゑ私は注意をしたやうな譯である、
 氣を付けんければならぬぞ、主水ア、有難うござります、然らばその
 森島といふは、津山家の家老職で御家來でありますか、重助イヤ家來
 といふ譯でもない、彼れは表高三千石といふが、内高一万石も上げ
 て居るさうだ、己れの職分といふものは、家老職ではあるが、段々
 浪人を集めて、彼れ等の立合を喜んで、その中には今言ふ通り、
 人を殺して来て居る奴がある、若し敵討などと言つて乗込む者があ
 れば、その者を殺して反撃をしてやれ、然すれば皆安心をするたら
 うなと云ふ事を奨んで居る、餘程異つた人間である、ア可い、

暫くは此處に逗留するが好からう、主水は心中飛立つやうには思ひ
 ますけれど、肝腎の先生が慥く言はれるのでありますから、アッ
 と辛抱してこの道場に食客と相成つて居りましたが、實に一日千秋
 の思ひ、ところが日數一月は経ちますと、神免先生は「主水、
 アッ」と私にこれから畿内から和歌山、都合に依つては伊勢の大廟
 へ參詣をして、彼の五六ヶ國を廻つて來やうと思ふ、不在中は門人
 共と和好く遊んで居る、先づ四五ヶ月は歸らぬから、不在中は頼む
 ぞよ」と言ひ置いて、そこで支度と言つたところが、不斷衣も他所
 次も寝衣も旅行も同じことで、一蓋の笠を被つて、飄然と出て行つ
 て仕舞つた、アア妙なもので、今までは神免先生が居なされるからそ
 の人の止められる儘に、アッ辛抱して居ましたやうなもの、先
 生が居なくなつて見ると、不在中門人を相手に、吾れより遙か下つ
 た腕前、立合つても益なく、指南をするといふも面倒、只日々と思
 うて居るは、父の仇討、作州津山の森島方に、假令三十人五十人の

水主木鈴

浪人共が集つて居らうとも、過ぎし建久四ツの年、梅雨月の暗き夜に、十郎五郎の兄弟が、百万といふ人の集りど、一世上に噂のあつた彼の富士の根方今野ヶ原に乘入つて、諸士の別當一臈職、彼の工藤祐経が首級を上げた例にもある、吾れ曾我の兄弟よりは、力量は劣るといへど、孝道といふ上に就いては、豈夫彼れ等に劣るべき、必死となつて仇討をなさば、悉皆十萬石の三河殿の御家來が、吾れの向ふに立たうとも、希望の遂げられない道理もあるまい、これぞ我一身の臍を固むるところである、市助、如何ぢや、乗込まうではあるまいか」と主人の相談、市助とても忠義一途の正直者「若旦那が左様に思召すなら何條私とても猶豫の致されませう、曾我の御兄弟の御家來に、一鬼王、一團坐の兩名は、その討入りには、外れましたか私に御供を仰付けられませうは幸ひ、浪人の一人二人ぐらゐ、斬込めぬことはありませうまい」と主従二人は覺悟に及んだものと見なして、一門人衆には只住吉の御宮へ參詣を致すと偽つて、堂島を出で

水主木

これから姿を變へ、彼の作州津山に乘込み、却つて仇敵の計略にかゝり、主水光信が既に一命も危ふからんといふまでの騒動を惹起す、主水仇討失敗のお話してございませうが、一チロツと一ト息次の口。

第七回

水主木

主水、市助の兩人は、大阪の神免重助の宅を無断に抜出し、たが、彼の作州津山へ赴くには、當今で見れば山陽鐵道から播但へ乗替へるといふやうな、便利な旅行も出来ませうが、その以前は然うは参りません、主水主従は先づ陸地を播州路へ取つて、これから作州津山へ乘入りませうする心得にて、笠原と申す在所へかよつて参りませうが、大勢の百姓が箱の中へ何か獸物を入れて、上から繩搦みと致して搦いで行きます、主水は不圖これに目を着けまして主水「コレ、お前達は何を持って行くのだ、コレ、旦那、御覽なさいまし、

鈴 木 主 水

近頃珍らしい大きな狐でござります。主水「ハ、ア狐か、ナ、ツと見せて呉れんか。〇「ア御覧なさいまし」見ると、一方だけは格子に致しまして、矮狗か、その時分は今日ほど西洋犬は居りませんでした。が、唐犬或は水犬など、名づけましたやうな物を、飼つて置く箱でございます。その中に遺入のて居るのは、白狐でございます。温和しく座を屈し、頭を頂垂れて居ります。主水「ハ、ア、珍らしいナ、これは白狐だナ。〇「ハ、エ、左様でござります。主水「如何するのだ。〇「エ、且那、マア此間中からこの近傍に此奴の居る事を知りまして、色々々ア考へましたところから、陥罪で捕つたのでござります。マアこれを持つて廻りますれば、幾らか銭が集まるだらうと申す者もござります。が、お稻荷様だと云つてお賽銭を上げる位のは些かなこと。香具師にでも買りますか、然もなければ何處へ持つて行つて買りましたら、また銭にもなるだらうといふので、色々々ア相談の上で、これから持つて参るので。主水「然うか、そのお前の言ふ先づ香

鈴 木 主 水

具師といふやうな人に買れば、何の位に賣れるナ。〇「然うですな。この以前のは白狐ではござりませんでした。が、大きな狐を捕りました時には、十貫文に買れましたが、これは白狐でござりますか。最う少し高う賣れる胸算でござります。主水「十貫文といへば一兩餘りではないか。〇「ハ、エ、六貫四百文が一兩でござりますから、先づ一兩二分餘りになります。主水「ハ、ウ、それなればその倍價なら賣るか。〇「ハ、エ、こりやア珍らしい白狐といふのでござりますから、その位なら賣りませう。主水「ぢやア如何だ、三兩私に出すが、その狐を乃公に賣つて呉れぬか。〇「ハ、エ、且那如何なさいます。ハ、ア、且那は、大分顔色が悪いんで、瘡毒アお搔きなすつたんだナ、この白狐の舌を黒焼にするど、瘡毒が癒るとか言ひますから、それから考へ込んだんでせう。主水「マア何でも可い、乃公に三兩で賣つて呉れ。〇「で、且那、此狐を何處へ伴れて行きます。主水「何處へ伴れて行かうと私が勝手ぢや、併しその箱は添物に呉れぬか。〇「これは名主様の

鈴 木 主 水

宅に矮狗が飼つてありました。先達てその矮狗が死んで、箱が明いて居りましたから、それをマア借りて来たのです。依つて名主様のだから返さにやなりません。主水「然うか、それでは可い、何卒その狐を縛つて呉れ」と金子を三兩出して渡します。皆々は顔を見合はせて居りました。「大きに有難うござります」とそこで細繩で縛つた狐。主水は引立てやうどしませるが、坐して仕舞つて白狐は起たうともしませせん。斯う泣然涙を流して居ります。主水はこれを眺め「生ある物は、悲しき時には涙を流すのは至當であるが、また嬉しい時よりも、俗に言ふ嬉し涙といふ事がある、喜んで居るものと見ゆる」と思つて居ります。百姓は立去つて仕舞ひました。跡で主水は狐の脊を撫でながら主水「コリヤ、汝れも慙く白く毛が變るまでには、五十年とか百年とか、また二百年も三百年も、年限を経たものであらう。動物にして命を保つものは珍らしい、可憐さうなものぢや、何か食物の爲めに、慙くは生捕られたものであらう」と思ふ。マアこれから何處へでも行け、丁度今日は亡父上の御命日、放生會の心得である、必らずこの後はよく氣を付けて、人家近い所へ立寄つて、捕れはぬやうにせよ、マア行け」と細目を解いて脊を撫でやりました。毎度お話をする通り、陰毛と陽毛の區別があつて、斯かる狐などいふ動物は、二人の側へ餘り寄るものはございませんが、忍に感ぜたものと見えて、大きな猫のやうに、主水の足下へ頻りに頂を磨付けて喜んで居ります。全く別離を惜しむものを見ます。主水は「ソレ、人が来てはならぬ、行けよ」といふので、向ふへ放すと、一聲「ウー」と發した儘、ヒューッと、宛然矢を射る如く駆出して、姿は見なくなりました。このことと、さいます市助「若旦那、ア、好い事をなさいましたナ、成程仰しやる通り、狐が彼んなに白くなるまでには、なかく、百年や百五十年ぢやアござりますまい。主水「然うぢや、千年も命を保つた狐があると言ふから、彼れ等も矢張りその類であらう。市助「ア、結構なことぞ

鈴 木 主 水

と、思ふ。マアこれから何處へでも行け、丁度今日は亡父上の御命日、放生會の心得である、必らずこの後はよく氣を付けて、人家に近い所へ立寄つて、捕れはぬやうにせよ、マア行け」と細目を解いて脊を撫でやりました。毎度お話をする通り、陰毛と陽毛の區別があつて、斯かる狐などいふ動物は、二人の側へ餘り寄るものはございませんが、忍に感ぜたものと見えて、大きな猫のやうに、主水の足下へ頻りに頂を磨付けて喜んで居ります。全く別離を惜しむものを見ます。主水は「ソレ、人が来てはならぬ、行けよ」といふので、向ふへ放すと、一聲「ウー」と發した儘、ヒューッと、宛然矢を射る如く駆出して、姿は見なくなりました。このことと、さいます市助「若旦那、ア、好い事をなさいましたナ、成程仰しやる通り、狐が彼んなに白くなるまでには、なかく、百年や百五十年ぢやアござりますまい。主水「然うぢや、千年も命を保つた狐があると言ふから、彼れ等も矢張りその類であらう。市助「ア、結構なことぞ

水 主 木 鈴

「さりました」と主従は大きに喜んで、これから道を急いで、作州北條郡津山へ着なりました。これに乗込ひといふ譯にも相成りません。こゝで主水は木賃旅宿の信濃屋といふのへ泊合はせ、一日二日は逗留して居りましたが、亭主を呼んで、主水「御亭主、亭主、ハ、主水」大きに御厄介になりましたが、私は江戸在の者で、實は郷士の伴ぢやが、斯うやつて二人連れでやつて来た、此男は乃公の在下の近所の百姓の伴で、江戸で屋敷奉公をして居た男であるが、途中で逢つたところから、先づ故郷の者でもあり、お互ひに道連れになつて、慥くは参つたのであるが、實は最も永らく遊んで、懐裡もなくなつて来た。そこで乃公は屋敷へ奉公をするといふても、劍術は知らず、別に學問もないが、子供の時分から數年教はつて、易學は一ト通りは心得て居る、暫くの間、身過ぎ渡世、易者にでもなつて見やうと思ふが、この津山は易は流行るか亭主「エ、且那、易者さんといふ稼業も

水 主 木 鈴

好い稼業でござります、お出でになりませうなら、随分流行りませう。主水「然うか、それぢやア何うか、一ツ易者になつて往來をしたいものだが、一してお前の宅に斯うやつて木錢で宿めて貰つて居るのであるから、雜用も要らないではあるけれども、何うか、ア一ツ世話をして貰ひたいものだ、亭主「エ、イヤ宜しうござります、これから亭主に相談の上、笠竹から算木天眼鏡といふやうな物を、古道具屋を見廻つて買つて参りました。これとて、古道具屋を包みます。るには一番ぢやと、深編笠を着用いたしまして、人相家相手の筋の判断と、この津山の御城下を流して廻つて居る、今日は羽美原山は羽美原神社といふのがございまして、その御祭禮で多くの群集であります、主水も此處へ参りました。こととてございまして、賑やかなるところを見て「ア、田舎でも祭禮だなと、いふと、矢張り賑ふ、江戸の繁華には劣るではあるけれども、立派なものだ」と思ひながら、片傍の茶店に腰をかけ、休んで居るところへ、これも同じく深

編笠でございまして、長大小刀を打ち込んだる浪人風の男五六人、
 フロムやッて来たることございませぬ、主水は充分豫防を致して
 平素顔を見せないやうにはして居たのであります、正敷茶店で笠
 を着て居る譯にもならないから、脱いで居ったのです、ところが彼
 の浪人のうちの一人が、不圖主水の顔に目を着けて、その儘スツと
 行ッて仕舞つたことございませぬ、此方は一切氣が付きませぬ、
 その間に浪人の輩は、何か喧々話を致しながら取ッて返す、甲、ヤア
 大夫、只今立歸ッて参りました、何か喧々話を致しながら取ッて返す、
 へ行ッたといふが、大層早く歸ッて来なすつた、途中で何か事でも
 あつたのか三平、イ、エ、兼ねてお話ししたして置きました、江戸表の
 鈴木主水が参りました、半平、ナ、お話しした置きました、小作主水とい
 ふ、若手ながらも天晴れ出来る者ぢやと言ひなすつたが、それが参
 ったのか三平、エ、参りました、實は今羽美原山の麓の彼の神社の茶
 店に於て、彼奴の姿を見ました、そこでお屋敷の中間又助を殺し

彼奴の跡を尾けて行けと吩咐けて置きました、最う今に歸ッて来
 るでございませう、半平、イヤ、それはよく心付かれた、此方は森島
 宅に一同の者は、家来又助の歸宅を待ッて居りました、ことござ
 いませぬ、どこへ又助、エ、只今歸りました、三平、オ、又助、御苦
 勞であつた、如何だつた、又助、エ、御城下の大手通りの小間物屋で、
 彼奴は買物をして居りました、三平、又助、その背後で、それとはな
 く様子を見て居りました、丁度日が暮れて仕舞ひました、それか
 ら彼奴の歸るのを待ッて、跡に尾いて行きますと、御城下盡端の信
 濃屋といふ、至ッて汚ない木錢旅宿に宿ッて居ります、三平、然うか、
 道理で暇が要つたと思つた、ヨシ、それに違ひない、又助、ヘイ、
 それに違ひございませぬ、三平、ヨシ、サア、大夫如何します、半平、左様
 々、此處で名乗りをかけてといふ譯にも行かぬから、主水一人であ
 るか、また同行人があるかといふ事を調べんければならぬ、兎に角
 易者になつて居るのを幸ひ、一ツの計略を巡らして、彼れを撃ち取

鈴 木 注 水

ッて仕舞ふが好からう、拙者屋敷へは参るまい、この近傍に於ても
 森島の屋敷には、数多の浪人が集まつて居るといふ事を知つて居る
 者が多いから、事に依ると主水は、三平が居るか居らぬかは知らぬ
 が、数多の浪人が居るその中に、若しや居りはしないかといふ考へ
 を起して来たのかも分られ、それだから思ひも依らぬ所へ誘出さぬ
 と、何うも巧く殺つて了ふ事は出来まい三平イヤ、まことに御有理
 でござります半平、それぢやア城下の中村屋を呼びにやれ」とそこで
 御家老が一應會ひたいといふので、彼の中間の又助を以て呼びにや
 まりがした、その當時津山の御城下で、第一等といふ中村屋、これ
 へその趣きを申し入れますと、中村屋の亭主は、御家老様のお使ひ
 ですから、直に中間と同道してやつて参りましたが、玄關から通り
 御書院にて控へて居ります、暫時経つと「お待遠であつた、此方へ
 何卒お通り」との案内に仲れられまして、お椽側を座敷へ通ると、

鈴 木 主 水

御家老森島半平は「オ、お前が中村屋の亭主が亭主左様でござり
 ます半平初めて會ふが、實は少し仔細あつて、衆會をするのぢやが
 私の屋敷でも可かぬ、また料理屋といふものも、大きに不都合であ
 る、用途の屋敷では、表立ち仰々しくつて可かぬ、で、色々考へた
 ところから、旅宿をといふ事になつたのぢやが、お前の宅に當時客
 人は何人ほど逗留して居るか亭主へい、左様でござります、只今の
 ところでは御逗留のお客人は、五人ばかりござります半平、然うか
 何うせ表を開いて居る旅宿だから、今晩にも何人の客人があるかは
 知れぬが、逗留の客人は四五人といふ事なら、大きに頼み易い事で
 ある、その客を今明二日の間、何處か近所の旅宿へ轉らして貰ひた
 い、さうしてお前の宅を全体貸して貰ひたいのぢや、然る替りに先
 づ假へば八畳の座敷に四人六畳の座敷に三人と、悉く見積つたなら
 ば、座敷だけは残らず客が満るとして、晝飯料も宿泊料も皆私の方
 から拂つてやる、そこで茶代も相當に遣はすに依つて、遣だ無理の方

鈴 木 主 水

やうではあるが、何うか今明兩日の間貸して呉れ、またその入合せをしてやることもあるから亭主「何うも有難うござります、宜しうござります」と引さ受けました、自分も考へて見ると、假へば客が五人泊るといふ旅宿屋なら、飯も喫はさず蒲團は汚れず、それだけ錢を貰へるので、一只全体を貸渡すだけのことですから、別に世話も要りません、殊に御家老様のことですから、快よく承知をいたしましることでござります、中村屋の亭主は立歸つて参りましたが一、直に二階の客人を向ふへ轉つて貰ひ、奥座敷の客人を隣の方へ行つて貰ふといふやうな譯で、宅をスツカリ掃除を致しまして待つて居ります、と、ところへ二十四五名の浪人者が、ツロくどやつて來た、

「大きに亭主面倒であつた、何卒貸して呉れるやうに」スツカリ筆筒長持など、錠前の下りる所へは、錠前を下して、掃除が致してありませぬ、半平「ア、大分片付いた、これで好い、併し皆残らず宅を明

鈴 木 主 水

けて貰つては困る、一人だけは残して置いて貰ひたい、然うしないど勝手が分らぬから亭主「へ、御有理さまで半平「何うか金銀の類は皆持つて行くが好い亭主「へ、これが浪人ばかりなら險呑ですが、何しる御家老は評判の高い森島といふのですから疑ひませぬ、亭主を始め女房子供、皆出て行つて仕舞つた、残つたのは平助といふ三十恰好の男一人、その他は皆下女に至るまで立去りました、その跡で半平「時に平助「平助「へ、半平「貴様は御苦勞ながら、この御城下端に信濃屋といふ木賃旅宿があるが、知つて居るか平助「へ、心得て居ります、半平「彼處へ行つて、易者が居る筈ぢやが、何うかチロツと觀て戴きたいのである、當家の女房が三年越しの病氣、何うも醫者に診て貰つても、その病氣の原が分らぬ、事に依ると物の氣の祟りなどいふ事もあるから、一逼どうか觀て貰ひたい」と斯様申し、その易者を伴れて來て呉れ平助「畏まりました」と此方は旅宿の男のことでござりますから、紺の前掛をして下駄穿きでやつて來た

鈴 木 主 水

平助「へ、御免下さい」信濃屋の亭主は、丁度結界のうちに張合をして居りましたが亭主「エ、誰方です平助」私は中村屋から参りました亭主「ハ、ア、何處の中村屋さんで平助」田町の中村屋でござります、亭主「ア、然うですか、何か御用で平助」アノ奥室にお在でになりまする易者さんに、實は宅のお内儀さんが永年の間身体が悪いのですが頃ばり病氣の根が分りません、そこで一遍御面倒ながら先生に見て貰ひたいといふのでござりますから、何卒早速お出でを願ひたうござります」とある、そこで亭主は奥の室へこの事を申し入れますると、丁度市助と話をして、居た主水は「ア、何ですか、ハア、中村屋さんといふ、ヘエ、大家ですナ、ハ、ア、妙なこともあるも……イヤ委細心得た、参るでござる、市助「エ、留守をして居て呉れ市助」若旦那、不思議ぢやアござりませんか、あなたが流してお歩きなすつてさへ、呼んで呉れる人も少ないのに、態々大きな旅宿

鈴 木 主 水

から、木錢旅宿に宿つて居るあなたを、呼びに来るといふのは、何うも私やア……主水「サア、私も不思議には思ふが、マア行つて見やう、若しもそれが爲めに、何か此方の手藝を得ることがないとも限らぬ、恐れて居ては事が遂げられぬ、虎穴に入らずんば虎児を得ずといふ諺もある、用意さへして行けば仔細はない、心配をするナ」と家來を留め置いて、主水は彼の使ひと同道いたして、中村屋へやッて参りましたこととござります、すると平助は平助「サア、何卒此方へお上り下さいまし」と案内をして呉れましたが、何しろ表は五六間口の大きな旅宿で、庭も廣うござります、いま迎ひに来た男が案内をして座敷へ通す、藪所にも座敷にも人影は更に見えせん、主水は不思議に思ひながらも、案内をされたは六疊の座敷、敷物を出し煙草盆を當てがひましたから、その上に坐し、暫時待つて居る、當今の時計ならば、三十分も経つたと思ふ折しも、アッ！ッ！線り出して参りました袂越しの槍、主水はヒョリと体を懸すなり

スパーリ、側に有り合ふ小刀を抜いて、槍の柄中央を斬り落した、驚く途端に向ふの襖を蹴放して、一乗り込んで参った三四名、驚いた主水は背後に退りながら主水「此は怪しからぬ、吾れは當家の迎ひに依つて参つた易者でござるといふ、間に「黙れ、問答は無益である」と言ひながら、斬り込んで来た、流石の主水も、座敷の裡にあつては勝手悪いと思ひましたか、彼の三四名の立って居る前を突抜けたその早業、庭前に飛下り、石燈籠を木桶に取り、小刀を抜いて片手上段「サア来れ」と構へて居る間に、或は槍又は薙刀、刀を抜いて斬り込む者もあるがゆゑに、主水と雖も鐵石ではない、三四ヶ所の手傷を受けて、最う敵はしと思つたか、後飛びに築山へ飛上つたが、築垣に片手をかけながら、一ヒヨリと外に飛越した「ソレ逆す」と言ふうちに、血は滾々流出するも厭はず、遙か向ふへ駈出して参ります。ところへ通りかゝつたは三名の町掛りの役人、白晝に真

劍を携へ、身体股血に染まつたこの主水の姿、斯かる態を見て見送さう道理はござりませぬ「御用である」と呼はりながら打つてかゝつた主水「ハ、ッ、お役人に候へば、申し上げる儀あり役人「黙れ、お細頂戴に及へ主水「イヤ決してお敵對は仕つりませぬ、お願ひの次第がござります役人「申し上げる事があらば、一役所へ参つて申せ」そこで一刀を投出して、主水は怖けなくも、細目にかゝつて、當處の町奉行篠山彦四郎といふ者の白洲へ廻されました、さて白洲に於て訊問に預かりましたから、主水も今は包むに由なく、山主「私は江戸表將軍直參鈴木傳内兵衛の粹主水と申す者、父を撃たれて仇討筑波三平の所在を調べ候ふところ、御當處御家老森島半平殿が屋敷に、彼等の者潜み居る事を承知に及び、取調べの爲め罷り越したるに、今日思く、の次第、全く筑波三平の計略にかゝりしものと心得ます、依つて何卒道開御證文を所持の拙者、森島半平殿に仰付けられ、彼の筑波三平を手渡し下し置かれまするやう、お調べを願ひたい」と

鈴 木 主 水

ある、驚いたのは篠山彦四郎「るらい事が出来た、相手は將軍直參である、此方は森島半平といふ御家老のこと」と甚だ困りましたが彦四郎先づ御身の言はるゝ所は、眞實であるや將た偽りであるや、その眞偽の程も分り兼ねぬ、吟味中は兎も角入牢申付けから、左様心得さッしやい」主水も是に於て已むを得ず「委細承知いたしました」とお請の上、入牢に相成りました、奉行篠山彦四郎は頻りに心配をして居ります、ところへ下役の一人「申上げます彦四郎何ぢや、下役只今御家老森島様から、チヨツと面談の儀これあり、御苦勞ながら屋敷までお越し下されたいといふお使ひでござります」大變とは思ひました、仕方がないから早速支度の上、森島の屋敷へやッて来た半平「アこれは篠山氏、近頃なか／＼忙がしいお役でお暇もあるまい、態々使ひを以てお呼び申し、甚だ氣の毒、最う夜は御用の際であらうナ彦四郎ハイ、大抵調者は夕景までに致しまするが、臨

鈴 木 主 水

時調者がありますれば、夜中と雖も白洲を開きますることござります半平「ア、然うでせう、御苦勞だつた、時に今日召捕りになつた鈴木主水と名乗る曲者、彼れは全く偽者ぢや、決して將軍直參ではない、此方に怨恨ある者と見ゆ、拙者の屋敷に擊劍を使ふ者が築まつて居るのを幸ひ、筑波とやら三平とやら、譯の分らぬ名前を申し、拙者屋敷へ乗込ましたことぢや彼の村屋に於て吾れ、酒宴を致し居る所へ斬込んで參つた、遂に當方の家來共二三名は傷を付けられた者もあり、彼れも傷を受けながら御上の手に捕縛となつたさうだ、斯様な者をこの儘に捨て置いては、津山家の勢ひにも關ることだ、速かに彼れは斬罪に及んで仕舞ふが可からう、いま目附役の方へもその事を申渡し置いた、速かに彼れの首を斬らつしや」何うも如何に家老職とはいへ、政治の事は別物、町奉行の篠山は「ハ、ッ半平宜しいか、不承知とあるなら、拙者考へがある」この考へが極可けないので、當今は平民と雖も、大臣を相手取つて起

鈴 木 主 水

訴をばする、その結果、大臣が敗を取るなせよといふ如く、法律は正しうございませうが、往昔は食祿が餘計であるとか、頭が好いとか言ひますると、必らず壓制をしたもので、言はば町奉行といふ職を勤めて居りますすけれども、この家老に睨まれた日には、今日の身の上にかゝつて参りますすから、委細畏まつてござる」とあつて、悄然と屋敷へ歸つて来て、只終夜腕拱いて思案に及んで居りましたがお話かはつて主水光信は、牢内に在つて傷は痛む、最早十月、火の氣のない牢屋の内で、ボロリと涙を落しながら、吾れ親子は因果なる者はない、國の爲りに忠義と心得て、身を棄て、働いた事はある、一悪事をなした事は、一兎の毛で突いた程もない身の上が、斯様な事に成行くといふのは佛法の所謂因果縁因果といふものであらう、前世の悪の報いとかいふことは、何か空たる話のやうに思つたが、吾れく、の身の上はその報いの來たりしものかも知れぬ」と差俯向いて考へて居る、そころへオチンといふ音、見ると鏡前を開いて、

鈴 木 主 水

同檻とてでもない只一人の牢内、主水「オ、これは仕たり、御牢番でござるか」この時白髮の老爺イは手を取りながら老爺「サア、お出掛けなさい、主水「ハ、ア、夜分のお吟味でござるか、老爺「シ、ア、聲を立てると他に聞く者もありませう、何をお包み申さん、私は此間お助けを頼りました野干でござります、ハイ、狐でござります、主水「エ、一ッ……老爺「今日のお話を聞いて、實はお助け申しに参りました、この篠山彦四郎といふ町奉行は、悪い仁ではござりませぬが、家老の吩咐に依つて、貴郎の首を斬れと言はれませう、首を斬れば法を紊す、斬らねば御家老に申譯がなし、一筆を毒薬でも俯めた方が好からうといふので、今年監者の上田某といふのが参つてその相談をして居りますすまで、私は椽側で聞いて來ました、依つて牢番の寢て居るを幸ひ、鍵を盗んで参りましたが、假りに斯様な姿、サア、早く旅宿へお歸り遊ばして、御家來市助殿とお遊ばせ、道は私と御家共が御案内を致しませう」と夢に夢見る思ひの主水「芝居狂

言や小説など、狐や狸が人を助けたといふ話は聞いたが、眼前に
我身の上に見るといふのも不思議、これは猶豫すべき場所でない、
辱なし」と言ふも小聲、彼の狐の案内に依つて牢内を出で、信濃屋
の裏口から忍び込み、家來市助同道にて、遂に津山を背後に大阪表
へ立歸ることになりましたが、再び大阪に於て災難に出遭ふといふ
これからが主水銀麩のお話に移りまするが、チロツと一息御免
を蒙りまして次回に。

第八回

さて主水は、身体四五ヶ所の傷を受けまして、疼痛堪へ難い所を、
彼の白狐の爲めに助けられ、家來市助を伴れて、津山を立つて、日
の間は或は辻堂に忍び、又は宮の縁の下などに隠れるやうに致しま
して、夜中に至り往來を致し、漸く大阪へ立歸つて参りましたが、
懐中には金銭とてはなく、衣類と雖もその儘、大小刀は素より、只

市助が些か蓄へて居りましたる小費金で、先づ今日までの食事は致
して居つたのでございませう、大阪の市街に這入れば、神免重助とい
ふ立派な先生がありながら、これへ参るのも面伏、唯ある瀬河岸に
小屋を立て乞食同様になりなされたが、何うも風當りが強うござい
すから、そこでやうく長堀橋の南詰へ來て見ると、スツと斯う浪
納屋がございまして、その浪納屋の下は、風の當りも少なうござい
ますから、此處へ移つて、主従二人は先づ足を止め、お貰乞食とこ
そはなりましたが、市助は近所の米屋へ参りまして、些か使残りの
錢で、蕨を買つて参りました、一時に買ふと見符められますから、
俵を買ひ、或は蕨を買ひ致しまして、小屋の周圍を圍つて、吹揚げ
る川風を凌ぎ、迭爐を買つて参りまして、お粥を焚いて主人に備め
自分は粥の残りがあれば喰べ、また他様の軒に立つて、残物を貰つ
て、これで先づ空腹を凌ぐことになりましたが、そのうちに金創の
膏藥などいふ油藥がございませう、それを買つて参りまして、主の

鈴 木 主 水

傷へ付けてやり、介抱して居るうちに、十月の月も暮れ十一月となり、主人に備めやうとして居ります。丁度この夜の亥刻頃、はひでございませう、この長堀橋の南詰に住居をして、金物問屋で替屋五郎が、先年當家へ養子に参つたもので、この仁は以前は武家でございませう、いませんが、掻摘んでお話ししますと、元武家でございませうが、居であるの、或は天満玉造の與力であるの、同心であるのといふやうな仁の所へ参つては交際をする、今日しも玉造の與力本多喜十郎といふ仁の屋敷へ参りましたその歸途、夜も深けて丁稚の兼吉といふを伴れて、長堀橋の北詰から南詰へ渡らうとする、濱納屋に於ては、火の光「オヤ、これは怪しからぬ、餘所の濱納屋には違つて、銅であるの眞鍮であるの銀であるのといふやうな金ば

鈴 木 主 水

かただから、火の憂ひは少ないやうなもの、併し納屋は木で建つたものぢや、若し火事でも起された日には大變と思ひましたから、大概な人なら大きな聲を出す所ですが、そこは年齢も老つて居るし物馴れた仁ですから、五郎兼吉、静かに致し詰に待つて居れよ」と言ひ置いて、穿いて居りました雪駄を脱いで、足袋、跣足の儘、段々石段を降りて来たが、忍足に斯う進の吊しある所を見ると、顔色蒼白めた主水は、進の上に横に腹這つて居る、下男の市助は、鬚髯々ど生やして、迷戀の下をボカ、嫌いで居りましたが、主水「ア、何もう痛い市助、然うでござりますとも、ア何うにか出来ましたら、か醫者様にでもおかけ申したいとは思ひますが、然うやうて膏藥を貼つて置きましたら、追々癒るでもござりませう、併し若様、風が當りまして、若し破傷風とやらになつた日には大變でございます、ア、残念な事を致しました、ア今更言うて歸らぬことながら、私がお止め申しました時に、お出で遊ばさぬければ好かつたに、虎穴に

鈴 木 主 水

入らずんば虎の児を得ないなど、仰しやッて、お出でなされたのが
 全く此方の選の盡、併しながら御病氣全快の上からは、何でも一ッ
 手當を廻らして、本望を遂げんければなりません。主水「ふ、市助、言
 ふにや及ぶ、併し江戸に残したる母親が、不甲斐ない奴だと思召し
 もあろう、面目ないと思ふに付けて、口惜めいはこの身体、痛んで
 何うしても寝られぬわい。市助「ア、それが身体のお毒でござります、
 ア、何うかお粥が出来ましたから、これでも喫ッて、今晚は最うお
 寝み遊ばしませ、今に何うにかなりませうから」と話の切れくを
 聞いて居る五郎右衛門、何か思案を致したものと見えて、その儘元
 の處へ昇ッて来ますと、待つて居た兼吉「ア、寒い、旦那様、何を
 して居なすッた、密と跳足でお出でなすッたが、ハ、ア、お宅へ内
 證で總縁をお買ひなすッたナ、五郎馬鹿を言へ、誰かにしる辭に」兼
 吉といふ小僧は、慥面で我家の門口へやッて参りましたが、兼吉「へ、
 旦那がお歸りでござります、旦那がお歸りでござります、若者、ハ、

鈴 木 主 水

坐眠をして居た若者は、飛下りまして表戸を開け、若者「へ、御歸り遊ば
 しませ、五郎「ア、今歸つた、兼吉、早く寝るよ、兼吉「へ、五郎右衛門
 はその儘でズツと奥室へ通りました、恰愴な小僧ですから、旦那
 が何も言ふナ、このことでありませぬ、何事も言はず、その儘寝て
 仕舞つた、皆店の者も子刻前までは起きて居りましたが、旦那がお
 歸りなすッたといふのを聞いて、皆寢床を敷べて寝る、五郎右衛門
 もその晩はその儘臥りました、さて翌朝になりました、御飯が済
 んで仕舞ひますと、五郎「ア、ナ、エツと番頭を呼んでお呉れ、小僧「へ、
 ア、李兵衛さん、只今旦那が御用だ、仰しやいます、李兵衛「ア、左様か、
 と、李兵衛は奥室へ参りまして、李兵衛「へ、お早うござります、昨夜は大
 分お遅うござりましたが、定めてお楽しみでござりましたらう、五郎「相
 變らず本多さんと碁を圍ッて居まして、大きに遅くなりました、併
 し、李兵衛さん、お前御苦労やが、この襦袢屋へ行ッて下され、乞
 食が居る、李兵衛「へ、困ります、彼れは最う此間から度々追拂ひ

鈴 木 主 水

まするが、また出て来まして、最う五六日も居るんですが、子供が
 生れましたか大變に……五郎「イヤ、それとは違ふ、男の而も
 主従らしい李兵「ヘエ、また變りましたか、先繰りく入替り立替
 り、マア旦那様、仕方がござりません、彼處を一ツ荆蕨か何かで固
 うて置きましたら這入りませぬ、五郎「アそれは可い、彼れ等も住
 む所がないから、来て如彼やつて居るんであるが、同じ人間で如何
 いふ事をして居る事を思ふと氣の毒ぢや、實は昨夜私が見たのはホ
 從らしい、なんでも二三日前か四五日前にでも此方へ来たものと見
 ゆるが李兵「ヘエ、左様でござりまするか、五郎「何は兎もあれ、此處へ呼
 んで貰ひたい、丁寧に案内をして此方へ伴れて来て下され、李兵「イ
 旦那彼んな者を、五郎「ア然う無暗に蔑視したものであるまい、伴
 れてお出で、李兵「ヘエ、呼ますでござりまするか、主人の吩咐けに、番
 頭は庭下駄を穿いて降りて来て見ると、成程荒庭や庭で圍つて、中
 に主従が居ります、この兄背に市助は吃驚いたしました、が市助「お

鈴 木 主 水

邪魔さまでござります、暫時何卒お貸しなされて下さりませ、李兵「我
 様等は何時此處へ来たんだ市助「エ、實はこの間から、この西の方の
 河岸に居りましたのでござりますが、風當りが餘り強うござります
 ので、一昨日の晩から此方へ移轉しました、李兵「馬鹿を言へ移轉した
 なんて、マア何でも可い、宅の旦那がお前途に會ひたいと仰しやる
 此方へ来るが可いしてお前途は何だ、市助「ヘエ兄弟でござります、
 李兵「ム、ウ、兄弟か市助「私は兄でござりまして、これは私の弟で
 ござります、吾れく二人ながら斯うやつて放蕩を致しまして、物貨
 乞食になる位でござりますから、瘡毒を患いましたので、置物が
 出来て居るのでござります、李兵「ハ、ア、然うか、マア何でも可い、
 旦那がお呼びなさるから、此方へお出で、二人の者を促す、主水
 等も據なく番頭に伴られ、替屋の宅の左側は、火避地になつて居
 ります、その細き路を通つて、庭前へ廻つて参りますと、裏町ま
 でも通抜けやうといふ位の廣い庭前、縁側に進出でましたのは主人

の五郎右衛門にございます。五郎「サア、何卒此方へお通り下され。番頭、御案内を申せ。奎兵「フ、ン、五郎「何を笑って居る。奎兵「イヤ、結構でござります。妙な面容をして見て居る。主人の五郎右衛門は「サア、何卒此方へ」と丁寧な案内を致して座敷へ通しました。五郎「コレ、その蒲團では可かぬ。お政、その大きな方の蒲團を持ッて参れ。お政、畏まりました。ござります。と當年十六七に相成ります。妹娘のお政、といふのが、絹蒲團を携へて参りました。お政「何卒貴郎、此方へお通り下さるやう。五郎「コレ、誰れか来ないか。女「ハイ」と言ひながら、其處へ出て参りました。は上女中二人、宣徳の火鉢に、彼の櫻炭を入れて、二個持出します。オヤ、且那様は彼んな結構な緞子の蒲團を取寄せて敷かせなすつたが、且那は少し氣が狂つて居るらしい。と番頭は驚いて居ります。五郎「ア、奎兵「衛とん、最う用事はない。彼方へ行ッて、お政もお芳も皆彼方へ行ッてお呉れ。そこで娘も下女も次の室へ立去ッて仕舞ひます。と五郎「何うかお進み下さり

まするやう、さて初めてお目にかゝります。私は當家の主人、と言へば、嗚呼がましうござります。が、轡屋五郎右衛門と申します。者實昨夜は玉造の或屋敷へ参りました。好きな碁で夜を更かして、歸ッて参ります。と、貴郎方主従のお住居、氣の毒に思ひまして、ア、由あるお仁が今の境涯、人間の盛衰といふものは分らぬもの、彼んな所にお在でなされて、お身体の御養生も出来ませぬ。汚なうはござります。が、だッッ廣い手前の宅、一室二室はお貸し申しまして、別に此方に差支へはござりませぬ。先づお身体を第一番に癒して置いて、それから後に本望を……へ、へ、へ、お隠しなさるにやア及びませぬ。逐一承知を致しました。町人ながら轡屋五郎右衛門斯様々々の譯柄である。仰しやッて下さいましたならば、お力にならば申されませぬ。何かと御用を伺ひたいの了簡、どうかお隠しなくお話を願ひたうござります。主水「ア、御亭主、御深情の段辱なうござります。想く仰せられます。上からば、決して包みは致しませ

ん、手前等二人は兄弟とは偽り、これは家来であります。主従も斯様な身の上となりましたのも、両親の言ふ事を聞かず、放蕩を致しました身の果……五郎イヤそれは嘘です、決して貴郎方は然ういふ譯ではない、失禮ながら敵討……イヤその希望を遂げやうとして、却つて仇敵の計略にかゝり、手傷を負うてお出でなすつたに違ひない、ヤア、腫物の疼痛か金創の疼痛か、それ位おな事がナヨツと見て分らぬやうなら、失禮ながら活馬の眼を抜くこの大阪へ、田舎育ちの町人が、養子になつて、これだけの身代を持つては行かれませんか、私も最う五十の坂を越して居ります、旦那、如何いふ御身分だか、お打明け下さいまし、言つて悪いといふことなら、假令身体が舍利になるまでも、言ふ氣遣ひはござりません、何うか打明けて下さいませすやう」と懇切に尋ねられました、主従は顔を見合はして居りました、主水は身体の疼痛を忘れ、一問ばかり背後に飛退り、兩手を支へ、主水「ア、御親切は有難い、慙くまで仰せに相成るを

申さぬは却つて不都合、打明けてお物語を致しませう實は斯うく新様々々」とこれまでの我身の上神免先生の言葉に背き這回津山へ参つての失態等を、詳しく物語を致しまして、主水「それが爲め當地へ参り、この先の濱納屋に二週間ばかり居りましたが、何分風入が劇しいところから、二三日跡に御當家の納屋へ参りましたが、早く傷養生をして、仇討を致したいの考へ、五郎イヤよくお打明け下さいました、さては將軍家の御直参、そんな御身分の方とは存じませんでした、イヤ宜しうござります、決して娘にも奉公人にも、他言は致しません、御安心をなされますやう、早速お醫者を迎へませう」と是で奥の室の六疊と四疊半の二室を當て、主水主従の居室に致しました、杉山方齋、この仁を頼んで治療をして貰ひました、當今は全科醫と申しまして、全科卒業生が醫者になつて、或は内外科醫といふ看板が出て居ります、又外科であるの、小兒科であるの、婦人科であ

るのど、皆専門の看板が出て居りまするが、内科であるから決して
 外科はしないとは言へません、出来るのですが、そのうち自分がこ
 れを専門としておやりなされるのです、當今のお醫者は器用です、尤
 も任様も難かしいが、その往昔は本道外科と申しました、兩方を兼
 ねた醫者は少なかつたもので、よく往昔の人が、外科醫者として、科
 の字と科の字と間違へて申しましたのです、所謂これを外科と讀むの
 が當前ですが、讀方に依つて米偏と禾偏と間違つて、詰らぬ事を申
 したもので、そんな理窟は如何でも可うございしますが、杉山といふ
 のは、外科専門で、内科の方も出来る仁です、親切に療治をし
 て呉れます、當前はこの切傷などいふものは、迂濶に醫者が療治
 をしない、當今でも身体に傷でも受けた者と言つて御覽なさい、身
 分を調べんければ療治にかゝりません、また都合に依つては、警察
 へ交渉したりなせ致します、と言ふのは、強盗などが或家へ忍込ん
 で、身体に傷を受けて逃出したその者が、暗に治療を受けるなど、

いふ事がありますから、それ等の爲めの豫防でもございませうし、な
 か、信用のあつた仁で、兼ねて出入をして居る醫者杉山、この替屋
 の受合ひです、町奉行へ届けるの、會所へ申込むといふやうな
 事はしない、日々に療治をして居りまする、大きに季節が宜しうな
 さいますか、従つて追々快方に趣き、そのうちその年も暮れ、翌年
 の二月と相成りまして、スツカリ全快いたしました、主水は大いに
 喜びました、梅も散り今もう彼岸櫻の盛りといふ頃、はひ、大きに
 氣分も宜しいから、主人と庭口に出て、色々相談をして居りまする
 と、ころへ下女は、アノ若旦那様が、お歸りでござります、五郎「オウ、然
 うか……オ、く、件か新三「エ、剛父様、長らく御無沙汰を致しま
 してござります、貴郎入らッしやいませ」主水はそれを見ると主水
 これは御賢息でござりますか、私は長らく御當家に御厄介になつて
 居ります者で、新三「左様でござりますか、初めてお目にかゝります、

水 主 木 鈴

て、只今はお不在でござります、それゆゑまた四五日は宅に居らうと思ひまして歸つて参りました主水「ハ、ア、それではまた九州へ、左様でござりますか、何時頃にお歸りでせうか新三「エ、先生のことですから、一二ヶ月経ちませんと、お歸りではござりますまい主水「りましたか、親父の五郎右衛門は恰何事も言はず、莞爾笑つて居先生宅で斯うくであつたといふやうな事は言ひません、悴の新三郎は、撃劍熱心と見ゆ新三「失禮ながら阿父様、このお方様は五郎此仁は江戸の方からお出でになつた、鈴木様と仰しやる方で新三「ハ、ア、左様でござりますか、鈴木先生、何うかまたお稽古を願ひたうござります、主水「貴郎は神免二刀流をお學びになるので、私とは少々流義も違ひますが、併し暇々にはお手合せを願ひませう」といふので、これから悴も先生の道場へ歸らないで、宅に居て主水と話をすると、誠に益になる事ばかり、と言ふのは、餘り無駄口を利きませ

水 主 木 鈴

ん、時々のお話のうちにも、武藝といふものは斯ういふものである、撃劍或は槍術といふものは、斯ういふものであるとか、そのうちには軍學、その他の物語を聞かせますから、大いに新三郎は喜んで、これを聞いて居りました、その間に丁度三月のお節句も済んで七日の日、今日は宅中の者が揃つて、櫻の宮へ行かうといふので、一艘の屋形舟を眺へまして、主人が留守居で、他の者は行くことになりました、主水も勸められました、これを断りまして、主人五郎右衛門と留守事にお茶でも點てやうといふので、茶室に這入つて、色々風流の道を話し楽しんで居ります、此方は悴の新三郎、及び姉妹の娘、母親も附添ひ、その他下女、出入の者に至るまで、男はやうく三四人、女が十名以上、この屋形舟を長期から浮けて東廻を段々、大川から上へのぼつて、櫻の宮へやつて参りました、當今では造幣局が出来て、彼の邊へは勝手に参られませんが、その時分に、幾日から幾日まで縦覧を許すとかいふ事になつて、その

時だけは通行が出来ますが、平素は参れませんやうなことになるが、その往昔は只川崎と申しまして、對合せに櫻花が咲いて、居たもので、併し櫻の宮の方が櫻樹が多うございまして、さて、櫓屋の一行は、彼の岸に船を着けて上りました、何しろ若い女達で、鬼戯をしやうといふ者もあり、或は櫻の枝を手折つて叱られるもあり、瘦らも茶店が掛つて居ります、料理屋へ参るまでもない、宅から用意して参つた澤山の辨當、傍の茶店に於て、皆々飲み始めることになりました、ところへやつて来たのは、伊豫松山の藩中で、二十歳餘りの武士が四五人、しかも銘酌の餘り、踏限いたして居ります、何うもこの花の時分には、何處にでもある例ひで、近頃は警察から巡查或はその他の偵羅が出られて、氣を付けて居なされるから、餘り然ういふ事はないが、それでも時々兵士が劍を抜いたとか、或は若者が打合つたといふ事は、往々あることとさいます、今しも右の武士は、ヒュイツと片傍を見ると、櫓屋の一行が辨當を開いて、酒

宴に及んで居る、姉嬢といふのは、二十二三でもございませうか、誠に趣致の美しい、半元服と申して、鬘漿を付けて眉毛がある、中に居るのは例の新三郎、これは十九です、妹は十七歳、彼のお政といふ趣致美し、下女と列んでお館を喫べて居る、ところへッカッ、とやつて来た五人連れ、甲「ヤア、これは、何れもお揃ひで、ハ、ア、大層立派なことと頂戴いたしませう、お盃を戴きませう下女、イエ失禮でござりますから、御免をばして下さるやう、甲「ナア、失禮な事はない、町人は武家と盃の出来ぬといふ道理はない、ナア頂戴をしませう」と妹嬢が喫べかけて居るお館を横合から取つて、乙「ヤッこれは巻鮓、旨いな、海苔は關東に限る、成程、卵焼が這入つて居る、青菜が這入つて、こりやア結構、乱暴な奴もあるもので、娘等は呆れ返つて、アッ見て居る、すると姉妹と母親の間にある盃を一人が手を出して取り、甲「これは頂戴する、ム、ア、お前さん、歯を染めて居るナ、御亭主があるのか、オ、眉毛があるが、中

水主木鈴

元服、優しいナ、お前さんは母親か、お幾歳だ、お前さんも最う四
 十幾歳だらうなア、未だお前さんも水気がある」亂暴な奴もあるも
 ので、母親と姉嬢の居りまする真中へ這入つて、双方に手を伸ばし
 て袖を引いた、いまい一人の武士は、妹嬢のお政の身体を横に引抱い
 た「アレ、いッ」と言ふうちに、起上る下女の裾を捉へ引倒した、こ
 の騒ぎに下物が散らばる、酒はこぼれる、亂暴狼藉、見兼ねました
 か新三郎は、ツト起上つて新三郎は誰方です、御亂暴な事をなさ
 るものぢやアとさりません、何處のお武家です、甲ナ、何だ若輩、
 生意氣な事を言ふナ、憚りながら吾れは、伊豫松山の藩で、松
 平隠岐守様の御家來だ、吾れは、が盃を受け附合つて居るのは、貴
 様の方の仕合せだ、無禮な事を言ふと、此方承知をせぬぞ」と言ひ
 ながら、ホカ、ホカ、拳を固めて打込んで参りました奴を、新三郎は二
 刀流は神免先生に習ひ、同じ堂島に近頃道場を開いた澁川流を以て
 柔術を弘めて居る吉村雄十郎といふ者に、目録まで貰つて居ります

水主木鈴

から、撃劔よりは柔術の方が進んで居る新三郎、いま向つて來る武
 家の手を取るよと見せたが、肩に擔いで向ふへ投げた、力量餘つて
 土堤から下、澁川の流れへド、ア、ア、ア、と溺れながら
 川手へ流行く、これを見た向ふの船の奴は、〇、ヤ、ア、武士が流れる、
 早く止めてやれ、△、幾ら出しゃア止るんだエ、〇、エ、ツ、質屋
 の利息とは違ふんだ、武家が流れて行く、止めてやれ、何分川中へ
 陥められた一人、如何に酔つて居ても堪りません、忽ち酔が醒めた
 ものと見えて、ア、ア、ア、として上らうとする、漸く二丁ばかり川下
 方にて助けられました、酔醒の水の旨さと云ふ事を申します、が、
 この水は餘り旨しくはない、そこで陸に上つて遊來る、他の朋友も
 新三郎の爲めに投着けられ、這々の休で、共に天満橋の方へやつて
 來ました、が、甲、何だ彼れは、町人ながら中々ぬらい奴ではござらぬ
 か、乙、何うも怪しからぬ、酷い目に出遭しました、と驚きながら、
 路傍で濡れて居る衣物の袖を絞りながら、嗚をして居る所へ、〇、オ